

し、喧嘩をさし、嘘を吐き、日本流の遊蕩不品行をなし、西洋流と來ては只生嚙りの當國風の似而非自由の思想と、生意氣とを加味せるのみ
生活状態斯くの如く、既に他の尊敬を博する所以のものに非ざるが上に、一方に於ては非常に低廉の勞銀にて働くが爲めに、土人勞働者より受くるの嫉惡は淺からず、土人勞働者の嫉惡は一般國民の嫉惡となり、輕侮となり、爲めにジャブの悪口は、ピツグテールと並び行はれて人怪しみます、邦人偶々之を憤ふるものあれども詮なし

予一日散歩してマーケット街を過ぐ、店頭巨大の口上書を掲げたるものあり、ジャブの文字の目を射る程に、立ちどまりて讀みもてゆくに、此寫眞はご案内のジャブなり、店の内には是等のジャブスが種々面白く奇怪なる事をなせる其實況を撮影したるもの多々なり、諸君這入つてご覧じるとぞ墨くろくとは書いたりける、其下に日本男子の裸体寫眞を掛けたり予は思はず嚇としたれど、強いて忍んで店内に入るに、果して種々の寫眞は集めたり、殆んど悉く裸体にして、種々の作業をなせるの狀、如何にも不快千萬なり、予若し二三歳若かりせば此店主の横ッ面は倒し、寫眞を裂き棄てたらましを、此米蠻に取合ふたところで、仕方がないとヤツとこらへて引取つたり、固より一小市僧が利の爲めになすもの、深く咎むるには當らずと

雖も、我當局者は國際の徳誼上、何とか注意もする様になりたく、原來をいへば尊敬も輕侮も自から招ける所なれば、我國民は先づ以て大に反省せざるべからざるあり、而して輕侮は是に止まらず、彼等日本人さへ見れば、助平と呼ぶ事のもとをたづぬるに、是は當國の船乗りが横濱かにて此一語を學んで歸りしが、漸次流傳して今日にては一般流行の悪口とはされるなりとぞ
何は然れ、無智文盲不徳無品位の勞働者に依つて代表せらるゝ國民の不幸ぞ痛ましき、只予の本日記は謹んで議論を避くるの方針なるを以て、對米移民問題の論究は他日に譲る

(百三十) 桑港出發 太平洋

北米大陸より日本に航するに約五個の線路あり、曰く晚香坡、タコマ、シヤトル、桑港、サンデイゴ是れなり、内、主あるは晚香坡と桑港にして、甲は加奈陀太平洋鐵道會社の所謂女皇號、印度支那、日本の三船是に當り、船は太平洋第一の上等にして、速力も大に、且つ航路の短さが爲めに航海日數最も少く、通例二週間以内、或る時には十一晝夜位にして我横濱に達するを得、されど航路の北方に偏するが爲めに通例風波荒く、冬季に於て特に然り、且つ出船數は三週間一回にして、往々船待ちするの不便

あり、聞く所に依れば本航路には大西洋階級の大型船を用ゐ、現在の女皇號は濠洲線に廻はすの計畫あり、遠からず實行すべしといふ、果して然らば我日本亦大西洋の大船の通過を見、貨客の便利を増すを得べし

乙(桑)はピーエム(パシフィックメール)オー(オクシデンタルアンドオリエンタル)東洋三汽船會社の聯合にして、船數随つて多く、船は劣等なれども出船は八日毎に一回なり、但し近頃政府借上げの爲め前回の如きは欠航し、其他回數減少して早くて十日毎に一回となれり

三會社中のピーエムは米、オーは英、東洋は日本なり、此地貨客は非常に多く、優に競争船の來襲を惹くに足り、競争茲に行はるれば船舶及び貨客取扱上の改良始めて企望せらるべきを、惜しむべし、當港米陸山東間の鐵道、南方太平洋會社の專有に屬し、ピーエム汽船は同會社の所屬なるを以て、他會社の汽船は先づ以て別に鐵道を架設するに非ざるよりは同會社船と競争する能はず、斯くの如くにしてオーも東洋も泣々聯合の名の下に、實はピーエムの配下に屬したるものなり、航海日數横濱迄約十八晝夜、内約一晝夜ホノル、に繋泊す、乃ち航海日數を中斷して幾分退屈を減ずると、航路偏南するが故に風波少きと、布哇見物をなすを得るとは此線路の利益なり

距離桑港ホノル、間二千百哩、ホノル、横濱間三千四百哩

シヤトル以下は荷船なり、シヤトル線は日本郵船會社船にして、回數約四週間に一回、船更に劣等にして、日數十七八日を要す

(百三十一) 太平洋

九月二十九日寒暖計六十五度、正午桑港パシフィックメールドックよりオーオー會社のコブチック號に乗り込む、船長さ四百三十呎、廣さ四十二呎、深さ二十九呎、登簿噸數四千五百噸、即ち長く狭く深く、一見棒の如き船なり

此航路船には中等なし、横濱迄上等二百弗、歐羅巴下等八十五弗、亞細亞下等舊名支那下等五十一弗、但此下等は廣告面のみ本額にして實際は通例卅五弗なりといふ、歐羅巴下等止むを得ず中等に代用すべし

午後一時正に豫告の時刻に抜錨、二つ巴をなせる桑港半島の頭を繞りて港口に出で、暫時休泊の後外洋に出づれば、濃霧咫尺を辨せず、法の如く頻りに汽笛を鳴らし、て徐々進行す、實に人情は妙なものにて、居れば何時までも居りたきものゝ、歸りかへては歸りたくなり、二十日の後は此船が横濱に着くかと思へば、何となう嬉し、針路は西南を指す

九月三十日 土晴 七十度

海上平穩漸々暑し本日正午迄船走距離二百七十哩

十月一日 日晴 八十度

平穩暑し昨日まではこらへ居たれど斯うなりてはとて此日全部夏服に改む印度洋以來始めてあり船走三百四十哩

十月二日 月晴 八十度

平穩船走三百四十八哩

十月三日 火晴 八十度

平穩船走三百四十八哩

十月四日 水晴 八十一度

平穩船走三百四十九哩ホノル、を距る四百九十七哩明日午後は着すべきなり

十月五日 木晴 八十二度

平穩午前十一時左方遙に山を見る布哇群島中のモロカイ島なり十二時右方また山を見るホノル、港の在るオアス島なり人々喜び笑ひ罵りつゝ立ち盡す

午後三時陸に近づき岸に沿ひてゆく山は温泉岳の如く陸は島原(共に長崎)の如し予のお里ゆへ斯くいふに非ずかれもこれも火山島地文學上の約束は其從兄弟同士

たるを證してあやまたざるなり長汀竹林の遠くわたれる近づき見れば甘蔗圃なり曲浦松樹の密に繁れるつぶさに檢すれば椰樹園なり熱帯の風光快且つ暢やがて林中に家を望みやがて家上に帆檣を望みやがて水道は狭くありやがて浮標見えやがて郵艇來りおもむろに進みおもむろに止まり午後五時ホノル、の埠頭に着し六時本船を緊縛し終る

(百三十二) 布哇

先是予等の船と引違へて出港するの船二あり一は米艦某號他は日本萬國丸是は移民を積んで此地まで來り今日日本に歸航するにて横濱まで十七八日を費すべしといふ運き船なり

却説予等のコブテックはホノル、港の埠頭に着きピタと岸側に緊縛したるが其岸上は税關檢査場にして日本醬油樽など山の如く積んであり檢査場の後ろは公道にして其處に門あり二人の關吏出入を監す他にも繫泊の船猶數多あり對岸には巨大の消毒所もあり田舎とはいへ港内の設備は之を東洋に求むるに其類なし但し其規模は頗る小なり

晚餐後上陸す關吏一々出入者を誰何し且つ身体を摸索するを見る無禮な事なり

但し手に就いては單に誰何せしのみ幸ひに身体検査をなさず蓋し人ていに付き
斟酌するものかと申せば予の人ていは頗る紳士的ありと見えたり
暗夜に歩して市に入る道直にして街淋しや、ゆきて左折右折商店街に入れば賑
やかなり熱帯風の木造家屋兩側檐下人道を通ず支那人街に支那人あり日本人街
に日本人あり日本人の集まれる所第一に盛んなるを遊廓となす驚き恐れて走り
抜くれば種々の雜商あり煙草店にて煙草買ひ氷水店にてラム子呑み風呂屋の風
呂に這入つて見れば番臺には十五六の娘白粉コテ、塗りたるが座つて居り風
呂は男女の混浴にして醜狀萬態更に走り出で、散策すれば浴衣がけの兄さん蝶
々鬘の姉さん雪踏のチャラ、下駄のカラ、ゆくあり来るあり立つあり語る
あり勞れたればと日本御料理の家に這入りて一杯すれば、へい今晚はと大阪訛り
廣島訛りの女子どもがやつて来る、イヤハヤ一から十までが日本其まゝの開けか
た言語道斷のていたらくに恐縮し逃れ歸りてむし暑き船の中に寝たりける、ア
はれ日本の良風美俗其萬一をも民と共に移さばせめて御國の光りとだにめでは
こらふべきに、さりとては情けなや我同胞が住めば住むほど多きは惡風醜俗にし
て人の心の濁れるぞうたてきなんど、流石枯骨の無神經爺も物思ひては感慨夜と
共に深し

(百三十三) 布哇 (續)

十月六日

金曜

紀人鳥居芳之氏と共に再び上陸し領事齋藤幹氏を領事館に訪ひ轉じて鳥居氏の
友なる横川勇次氏を熊本移民會社に訪ひ三人某亭にて午餐し、後馬車を驅つて市
内外を周覽し午後二時歸船す、船は三時の解纜なり、横川氏は嘗て予等の同業者た
り、今前掲移民會社布哇出張所の支配人なり

▲土人の狡猾 歸船の際馬車を埠頭門外に留め歩して入る時に二人の土人來
りて持つて上げませうとて予等の買ひ來し水瓜、芭蕉實、ビスケツト等すべて一人
持にも足らざるをわざと二人して分ち持ち門より僅か五六間なる船に送り賃錢
一人二弗づゝを要請す、予等其無法を叱りて漸く一人三十米錢づゝを與へて追ひ
拂ふを得たり、不案内の地特に未開の國に於ては一寸したることに注意せざれば
往々這種の失策を免かれず

▲ホノルの地勢人口等 オアフ島の地勢島原半島(長崎)に似寄りたることは
前に記せり、さすればホノル、は有家の地にして、山前海後にくつろぎたる平地な
り、市内人口二萬九千九百二十にして、商店街は狭少なれども洋人の住宅街は地域

廣潤規模寧ろ宏壯、廣大なる庭園には熱帯の樹木鬱蒼として、頗る住み心地よかるべく見ゆ、街衢は概ね方形にして縦横數條の馬車鐵道あり、其他辻馬車も少らず、御者は洋人支那人土人日本人等なり、汽車鐵道は一線あり、市より三十哩の所に至る

▲見物の場所 別段にこれなし、元の王宮は現に米國の布哇政廳たり、低く小愛らしき石造にして、礎石にむす苔のまだらはそゝるに小島王國の昔を忍ばしむ、第一等のホテルをハワイヤンホテルと稱して亦低し、郊外里芋の畑を見、また水田を見る、芋畑は固より水田は予が此行中之を見るの初めにして且つ終りなるが、現に第二回作の挿秧中に在り、支那人農夫これに従事す

▲布哇の地勢 舊布哇王國の領土は即ち布哇群島にして、一にサンドウィッチ群島と名づく、太平洋中の一小群島にして島嶼總數二十三、内住民あるもの八、殘る十五は無入島なり、千七百七十八年キャプテンクックの發見せし所にして、十九世紀の前半より獨立の王國となり、後千八百九十三年時の女王リ、ヲカラニ廢黜せられて共和國となり、更に昨年米國に合併したるは世人の熟知する所なり

有人八島の面積(方哩)左の如し

布 島 名	面 積	布 島 名	面 積
ブ 哇	四、二一〇	マ ウ イ	七六〇

オ ア フ	六〇〇	カ ウ オ	五九〇
モ ロ カ イ	二七〇	ラ ナ イ	一五〇
ニ イ ハ ヲ	九七	カ フー ラ ウ エ	六三
計	六、六四〇		

(百三十四) 布哇 (續)

▲布哇の人口 千八百九十六年の調査に依れば總數十萬九千二千(男七萬二千五百十七、女三萬六千五百三)にして其國別左の如し

土 人	三二、〇一九	雜 種	八、四八五
支 那 人	二一、六一六	日 本 人	二四、四〇七
荷 人	一五、二九一	米 人	三、〇八六
英 人	三、二五〇	獨 人	一、四三二
諸 人	三七八	佛 人	一〇一
ホリチンヤ人	四五五	其 他	六〇〇

又之を職業別にすれば

農 業	七、五七〇	漁 業 航 業	二、一〇〇
-----	-------	---------	-------

工業	二、二六五	貿易	二、〇三一
自由業	二、五八〇	勞働者	三四、四九八
其他	四、三一〇	不定業	五三、七二六

更に宗教によつて分てば

新教	二、三、七七三	舊教	二、六、三六三
モルモン	四、八八六	佛敎	四、四、三〇六
不詳	一、〇、一九二		

現今正確なる調査なし、只概稱する所に依れば、總數約十三萬にして内四萬八千百十即ち約五萬は日本人、其半數が支那人、殘る五萬五千が土人及び歐米人なり、而して生存競争の結果、土人は外國人の増加に反比例して年々減少すといふ

▲布哇の土人 所謂カナカ人は色黒く体格寧ろ強大なり、内地の狀況はわれ之を知らず、目撃したる所にては男女ともに洋服を着し、概ね多少の英語をはなせり、彼等は所謂カナカ語なる其固有の言語を有し、現に公私に通用し居れども、文字は別に之を有せず、羅馬字を用ゐ居れり

▲教育 一昨年小學校數百九十二、教員五百七人、内米人二百五十三人、土人及び雜種人百十九人、英人六十九人、生徒一萬四千五百二十二、内土人五千三百三十、雜種

二千四百七十九、葡人三千八百十五、日支人千六百三十八、同年教育費十四萬四千三百八十九弗、而して現今強迫教育にして授業は英語カナカ語の二種を用う

▲産物貿易 隨一の産物は砂糖にして、次は米、其他は珈琲、芭蕉實、皮、毛等なり
一昨年八百九十七年の輸入價額八百八十三萬八千弗、輸出千六百二萬二千弗にして、輸出品の主なるは砂糖千五百卅九萬四千廿二弗、米廿二萬五千五百七十六弗、珈琲九萬九千六百九十七弗、芭蕉實七萬五千弗、輸入品目は主として雜貨、食品、衣類、穀類、材木、器械、鐵器、綿製品等なり、而して之をすふるに、輸出入總額の九割二分は米國との間に行はるゝものなり

砂糖は布哇の砂糖に非ず、砂糖の布哇と申す程の最大重要産物にして、群島中にて耕作粗製し、之を桑港に輸出して精製するものなるが、其事業は概ね米人の經營に係り、概ね會社組織にして、其最大なるワヤルア耕場(在オアフ島)は資本金三百萬弗、イワ(同上)は二百萬弗、ピオニヤ磨車會社(マウイ島)百三十五萬弗、ホノカア砂糖會社(布哇島)は百萬弗なり、而して是等の諸會社は一期一萬二千噸乃至四萬噸の砂糖を産出し、其以下のものは無數にして、現今耕地合計四萬エーカーに上り、會社の利益配當は一年三割、甚しきは四割に至るものあり、隨つて其株券の時價は拂込額の數倍なり

(百三十五) 布哇 (續)

▲鐵道其他 這個絕海の小島嶼ながら、鐵道總延長一百哩、電信同二百五十哩あり、ホノル、には電話電燈もあり、外國航船の入港は一昨年四百二十七隻、五十一萬八千八百二十六噸にして、同年島内在籍船六十二隻、三萬四千六十六噸なり、大陸に對しては未だ孰れへも電信あらず、米陸に對しては毎週約二回の定期船便あり

▲在留日本人 布哇は約二十年來の我移民地にして、隨つて在留邦人の多數なること前述の如し、然るに米國に合併以來、米人が我労働者を忌むの感情と、同國が本群島を勉めて本國に密接せしめんとするの施政方針とに由りて、同國移民法は多分本冬の議會より、此地に實施せられんとするの傾きあり、果して然らば實業の大要具たる日本人契約移民は向後拒絕せらるゝことなるなり、依つて糖業者之を憂慮し、其變革に備へんとて、急に一萬餘の労働者を輸入し置くことゝなり、目下日本に於て募集中なりといふ、去る程に其増募數を加ふれば、全島人口十四萬内、日本人六萬となる、大凡邦人の移民地に於て、斯る多數の人口を有するは他にこれなく、其土人乃至他外國人に對する割合の斯く多大なるは、更に其例なきことなり、されば邦人の勢力は見様によりては強大といふべく、全島の都鄙到る所、多數は邦人なるを以て、邦人は常に其食を食ひ、其服を衣、其酒を呑み、其語を語り、其夫妻親子を夫妻親子として、日本同様の生活をなし、身の外國に在るを知らず、雇主の覺もめでたくして、金もたまり、多少の貯金送金をなさざるもの稀れなり、即ち當地への日本移民は先づ好結果と申すの外なし、と雖も、勿論單に労働者としていふのみ、若夫、國民として、紳士として、實業家として、國の體面を境外に保つこと、由來此輩の任とすべき所に非ず

契約労働者の勞銀は、一ヶ月男十五弗、女十弗にして衣食は自費なり、さるに彼等の愛金に切なる、食費を節約するに過ぎ、健康體力を害するに至るものあり、雇主中には之を愛へて、時々牛肉類を惠與するものありといふ

葡人労働者は概ね一ヶ月二十弗を得、是は御馬術に巧あるが爲めにて、本邦人は其巧者も二馬以上を御する能はず、耕鋤等の器械は六頭立に至るものあり、獨り騎兵砲兵の古手は之を能くするが故に、葡人同様勞銀を得るとぞ

邦人の子女亦數多なるが、是等は國法に依りて一定の年齢間、當國の學に就かざるを得ず、されど用語は英布の二種にて、日本語を學ぶ能はざるを以て、近年在留吏民相謀りて各地に日本小學校を立て、日本小學の課程に依りて、彼等に邦語を授け居れり、但し其授業時間は公立學校の退散後、午後三時半より五時までといふ如き仕

組みなり、子女は公立學校と毎日二ヶの學校に出席し、過長時間の授業を受くるを以て、成るべく其腦力の疲勞を少くせん爲め、日本小學校にては算術地理其他公立學校にて學び得べきものを省き、主として讀書作文修身等を教授し居れり
ホノル、及びヒロ(布哇島)に於て小さき日本新聞紙發刊せらる

(百三十六) 布哇 (續)

▲嗟乎布哇 絶海嶼あり二十三、大も以て郡をなさず、小に至つて一家なし、而して土人二萬の衆を以て、無知蒙昧の群を以て、相集りて一國をなし、其獨立を數十年に維持す、寧ろ天下の不思議なり、否な偶然の僥倖あり、其外國に併呑せらるゝ、寧ろ當然の結果のみ、則ち予は今日に於て、布哇の滅亡を驚かざるなり、然れども今面のあたり、其舊山河を觀るに於て感慨は終に溢れて以て、往事を無用に追懷せざる能はず

蓋し布哇、地小なれども産物に富み、天熱けれども酷ならず、四時花あり禾穀常に稔る、且つや其距離柔港に六日、横濱に十日半の所に在り、日米航路の衝に當り以て遠洋永日の海程を中斷す、太平洋のパラダイスの稱、其所以なきに非るなり、而して居住民族の最多數を占むるもの實に日本人を是れとす、即ち日本對布哇の關係、特に

密接なる所以にして、特に關係の密接なる、特に國際の權利責任を厚うす、是を以て布哇の米國と合同するや、當時の外務大臣大隈伯は是に抗議を試みたり、或は或る筋の内部に於ては尙強硬寧ろ奇變なる議論を持したるもありしと聞く、されど此時遅かりき、布哇が米に併せらるゝや、併せらるゝの日に併せられたるに非ず、王政廢止、共和政府建設の時に併せられたるなり、故に抗議の以て或る目的を達すべきあらんか、彼時に於てせざるべからず、權變の以て乘すべきあらんか、彼時に於てせざるべからず、而して其目的や決して大を望むべからざりしなり、予等當時年少且つ今よりも尙愚、乃ち竊におもへらく、布哇は邦人の布哇のみ、我衆を以て之に臨む、活殺起伏意のまゝならんのみと、而して是れ甚しき誤謬なりき、實に空想空望なりき、如何にも邦人其頭數や多し、然れども只勞働者のみ、奴僕のみ、天下孰れの國法に照らしても撰擧權だに之を有すべき人物に非ず、此衆を擁して其お主筋なる米人事業家を御せんとするか、群鼠の猫を捕へんが如し、結果豈に知るべからざらんや、米人は布哇に於ける實際の主なり、米人あつて砂糖業あり、砂糖あつて布哇あり、カチカ人が王たるも日本人が布王となるも、英國人が大統領となるも、其實權の米人に歸する殆んど止むを得ざるの勢ひなりしなり、故に多くは望むべからざりしなり、只せめては姑息にも王朝を保護し、其獨立の名の下に我國利を完全に享有せし

めたかりしなり

陸奥宗光氏は外國を知り日本を知れるもの、其將に死なんとするや、來りて病をハ
フイヤンホテルに養ふ、而して終に病の治すべからず、布哇國命の救ふべからざる
を見しか、氏歸りて遂に起たず、布哇亦亡びぬ嗟乎
予今故らに死兒の齡を數ふ、敢て未練を遺して然らんや、只殘存の兒に處せんが爲
めのみ

(百三十七) 太平洋

(十月六日)午後三時、船はホノル、港を發して日本に向ふ、針路是迄は西南なりしも
是よりは西北なり、桑港以來海は太平、猶此末もしかれかしと、人々風伯海若に祈り
の、はや横濱を想望して着かん日を待つ

十月七日 土、晴、八十度

矢張曇し

十月八日 日、強風雨

始めての荒れなり、船動搖して波浪屢々甲板を越ゆ

十月九日 月、風雨

風雨あれども稍平穩なり、半ば甲板に出で、遊ぶ

(十月十日 火、此日消失)

多少地理を學びたらん人は、此一日消失の理由を會得せるならんも、好き機會なれ
ば婦幼の爲め茲に略説せん

蓋し地球は東西に圓く、まはれば無限無極なり、人間假りに限極を作りて以て始と
終とを立つ、即ち英國綠林の天文臺を中央とし、之を始點として西にゆき又東に至
る、曰く東經百八十度、西經百八十度、合して全周三百六十度は是れなり

而して其東經百八十度、西經百八十度の子午線の接合點、西と東の背中合せの處、正
に此處に在り、日晷の世界を一周する時間實は地球が一日轉をなすの時間は廿四
時なり、故に東經百八十度の時辰儀は綠林より十二時間、速く、西經百八十度は十二
時間遅く、東經の極と西經の極とは合計廿四時間の遅速あり、今予等が經過する所
は正に其境界點にして一刹那間に廿四時間の遅速を生ず、而して西より來れば二
十四時間を減却し、東より來れば二十四時間を増剩す、予等は西より來りし故に二
十四時間を失ふの理にて、即ち西經百八十度の十月十日の午前一時は、東經百八十
度の十月十一日の午前一時となることなり、猶圖示すれば左の如し

十月十日

子午線 西經百八十度
百八十度 東經百八十度

十月十一日

此差十二時四十分

斯の如くにして、十月十日の二十四時間は消失し、九日より直に十一日となれるなり

十月十一日 水、晴、風

船可なりに動く

十月十二日 木、晴、風、七十八度

十月十三日 金、晴、七十七度

十月十四日 土、晴、七十九度

船走三百五十八哩

十月十五日 日、晴、八十度

船走三百四十五哩、日本益々近くして天却つて益々暑し、何の兆をや

十月十六日 月、暴風雨

布哇を出で、より船は概ね帆を爰用す、此日強風帆滿を張り、正午迄に三百七十哩

を馳す

然るに午後暴風雨となり帆を撤して猶は足らず、或は櫓の折れんを憂ふ、起伏の浪は山岳の如く崩れて船を掠むるのみならず、船傾きては甲板水面以下に没して自ら潮をすくひ上げ、反動しては船上の水激して更に浪となり、左に打ち、右に迷り、甲板河となり海となること多時、舟子繩を引いて甲板に匍匐し、猶屢々轉倒を免かれず、洋人乗客頭に負傷し、予亦一再潮をわびたり、入つて試みに牀に臥すれば一身簾揚、夢に輕氣球に乗るが如く快からず、狂馬の背に在るが如く險呑なり、斯くてもひもじければ喰ひ、睡むたければ睡らざるを得ず、左手屹度卓を捕へ、右手を以て飽くまで食ひ、罪ならなくに千金の身を五錢の繩もて牀に繋ぎ、さても睡れば蝴蝶の夢、龍宮の春にぞ遊びてける

十月十七日 火、暴風雨

風浪猶は昨日の如し、船僅に二百三十哩をゆく、今日午後は横濱着の豫望なりしも、そらだのめとなりけり、明朝着くや否や覺束なし

(百三十八) 歸朝

十月十八日 水、晴、六十五度

山見ゆと人の呼ぶに、起き出づればまだ残る後の月(陰曆九月十四五日の頃なり)にありくと見ゆる芙蓉のいたゞき、笑みかたむけて迎へ顔なる花の姿のめでたさ、うれしさは實に飛び立つ程あり、ア、是れ一つ是れ一つと舌打鼓して賞翫する程に、岸はやうく近うなり、月落ち雲は白き午前四時横濱沖に投錨して檢疫船を待ち、其事終へて夜の明くると共に、横濱港には入つたりけり、さて見れば規模の小なる設備の殆んど皆無なる、是れが日本第一の貿易港にて候とは、人の前には申されず候、況んや解船、解船夫の汚穢亂雜喧囂なる、殆んど他國に比類なきに於てをや、八時、乗客概ね上陸し終るの時、郵便艇悠悠々として來る、他國の海港にて郵便艇は檢疫船と同時に來るを例とせしなり、手荷物は之を船問屋に托して單身上陸し、浴し、餐して小遣錢の残れるを兩替せんとて銀行にいたれば、待たせらるゝこと三時間、手荷物が税關の検査を受けて宿に持ち届けられたるが、午后の六時、斯の如くにして此日は暮れけり

十月十九日 木、晴

午前六時出發程ヶ谷にて東京下り一番列車に合し、急行西下して此夜は山陽鐵道の列車に睡る

十月二十日 金、雨、晴

此夜門司着一泊、是れよりみちく出迎へ呉れられたる諸友先輩と合し

十月二十一日 土、晴

博多に又一泊、福岡日々新聞高橋猪股外諸氏の饗應など受け

十月二十二日 日、晴

武雄よりは更に多勢となりて午後五時過長崎停車場に着しぬ

今年三月二十五日、此停車場を發してより、茲に至る二百十有二日、經る所約二萬五千哩、西遊して茲に東歸し畢んぬ

短かき留守中意外に多故、新報社に一親友を失ひ、社員福山徳三郎君此月初旬に歿せりといふ、家に一弟を失へり、只幸ひなるは社の益々榮え、家郷右の外に故無かりしことなり、且つ予自身に於ては、益々勞して益々健、もてゆきし藥品一も手を附けず、千金丹さへ封を切らずに、其まゝ持つて戻りける、われ祈らねど、神佛の冥助、かゝる仕合せぞありがたかりける

西遊後記

拙著西遊日記、章を重ねる百四十日、を包む二百十餘、以て西遊東歸の實歴を略叙し畢んぬ、而して其見聞及び所感の沈思熟慮を待つて後に言ふべきもの、事の性質上綜合比較の後、始めて判断すべきもの等、すべて之を歸國の後の閑日に譲りたり、其他或は雜事雜感の言へば言ふべく、言はざれば時日を経ると共に雲散夢消し去るべきもの、亦多少あり、乃ち是等を思ひ出るに任せて書きあつめ、編して

西遊後記とは題しぬ

西遊日記は概ね旅中に成れり、車中船中或は客窓、或時は食堂に臨時の書齋を造り、或時は膝を卓に代へ、或時は壁を寫字板に充て、以て萬年金筆を揮ふにあたり、以へらく、歸らば幾分安居して讀書作文をなすを得べく、比較的見るべきの文を成すこともあらんかと、さるに歸れば思ひきやにて、別に天公多慈の配劑は、予の境遇を憐察して、政界小旗手兼職の義務を免除したるあるに拘はらず、常務俗務の繁忙は、あはれ一日の慰勞休暇をも與へず、朝出晚歸、只喰ふて寝るの外、文章の字もあつたものにあらず、萬事勿々辛々は旅中よりも甚しくして、うしと見し世ぞ今は戀しき、前述旅中の希望は空頼となりけり、ざりとて三年山に入つて

思ひを撰へ筆を鍊るなんどのことは今更望んで得べからざる所なればまよ
殺器造りの破れ殺器名編名作は吾黨の事に非ずと先づ自分から多寡を括つて
間に合ひ出来合ひに遣付けて見んとさてこそ茶煙草の間を偷んで此稿を起す
には至れるなりけれ
事情右の如くなるを以て事の或は専門に屬して餘りに長くかりさうなものは
亦之を省かざるを得ず畢竟するに本編は西洋旅行後一席の雨夜語り過ぎざ
るなり

明治三十三年春

(一) 英國及び其國民

▲國勢一斑 英國の地理形勢等は餘りに世に知れ過ぎたる所ながら其國狀を
説くの順序として先づ其梗概を叙せざるべからず
英國は四個の獨立國より成れり第一次に英蘭威士の二國合同して一王國となり
第二次に蘇格蘭を合して茲に始めて大不列顛王國を成し第三次に愛蘭を加へて
現今大不列顛及び愛蘭合衆王國と稱す右四國は各別種の國語を有し無論別種の
歴史を有したるにて言語は英蘭のみチュートニツク種に屬し他の三國はケルテ

イツク種に屬し更に枝分してウエリシユゲイリツク、スコツチゲイリツク、アイリ
シユゲイリツク等と稱せり而して三國中現今猶英語を話す能はざるもの約六十
萬人英語と共に各自國の語を話し得るもの百二十五萬餘人あり但し國內統一の
事業の進行に従ひ英語を話す能はざるもの各自國の語三國のを話し得るもの共
に漸次に減少して絶滅に至らんこと近きに在り英國の爲めに賀すべきことなり
今参考の爲め右減少の趨勢を表示すれば

一八八一年調査

一八九一年調査

各自國の語を話し得る者人口に對する百分比例	
威士	七〇〇
蘇格蘭	六一二
愛蘭	一八二
威士	五一二
蘇格蘭	六三
愛蘭	一四五

にして單に蘇國が稍々變調を呈せるのみなるが其れすら蘇語を話し得るもの
内英語を話す能はざるもの數は著しく減せるを見る

兎に角に斯る合成國を單に英國と稱し或は單に不列顛と呼ぶは獨り邦人の略稱
に止まらず西洋諸國人の通稱にしてアングロサクソン、ブリテン等の由緒久しき
故なるべきか別に英人を緯號してジョンブルといふは猶は米國人をヤンキー、日

本人をジャブ、或は清國にて東洋鬼、支那人を日本にてチャン、ナンキン、乃至長崎にて阿茶等と呼ぶの類なり

英國は其屬地領地殖民地全部を合せて自ら不列顛帝國と稱す、然れども不列顛帝國には帝位なく、現大不列顛及び愛蘭合衆王國の女王は、印度女皇の位號を兼ねるのみ、又英國人が通例グレートブリテンと稱するは英本島のことにして、グレートブリテンといふときは前述全英領を指すなり

地形は本島英威蘇の三國、愛蘭の二島と、人島及び海峽諸島の諸島嶼より成り、太平洋の東隅に位置して、西は同洋を隔て、遙に北米大陸と相望み、東南は一帯の英蘭海峽を挟んで佛國に隣し、北は獨、蘭、白等と日耳曼洋を相擁す、固より孤島陸疆を有せず、陸上の平地は軍を行るに適し、海岸の概ね絶壁なると、海波の常に險惡なるとは座おがらにして敵艦を防ぎ、斯くの如くにして軍國の上には屢々寡以て衆を支へ、翻つて四面環海、四通八達の衝を利用しては通商上に世界の海上王となる、將來は知らず今日までに、英人が富強を致せるの源地の利に因れるもの少からずといふべく、實に英人は世界を在とし自國を店舗、問屋場として、以て商賈をなし來れるなり

經度は自己を中心とす、緯度は北緯五十度以上、我近國に例すれば、樺太以北、甘薩嘉

の邊なるに拘はらず、冬酷だ、寒からず、夏固より暑からず、寒暑の差僅少にして、同緯度國中世界無類の良氣候を有する事は、西遊日記に詳にせり、面積は四國諸島を合せ十二萬九千餘方哩にして、我日本(臺灣を除き)十四萬七千六百餘方哩に比し二萬六千餘方哩狭く、人口は千八百九十一年(明治二十四年)の調査三千八百十萬四千九百七十五にして、我同年の調査四千七十一萬八千六百七十七に比し二百六十餘萬少し、其後我には臺灣の併呑ありたること、なれば現今の差は更に甚しかるべし、備考英國の人口調査は、毎十年一回にして、次回は明千九百一一年なり

西遊日記に引續きたる西遊後記は、其第一回を掲げたる日、即ち去一月十六日の拂曉に於て本社圖らずも火災に罹り、全焼せし爲め、心ならずも、中絶し居たる所、災後の再設備漸く成り、新報は茲に一應復舊し進んで擴張改良するに至れるを以て、自今續々掲載し以て所謂洋行の荷卸しをなすべし

西遊日記が眞つ正直に事實を報道したるは、讀者の認知せる所、西遊後記は事實に加ふるに所感を以てするにありと雖も、其眞つ正直なるに於て相同じ、若し夫れ予に法螺を吹けと勸むるが如きは、予の性質を知らざるもの、無理注文なり、法螺は元來予の大嫌ひ大不得手

新報社の災は殘酷にして獨り社の財産を燒盡したるのみならず、差向き金もて買ふべからざる、予の旅中の手帖、新しき統計、其他の材料(尼哥拉瓦運河の設計書等亦有りき)凡そ編輯局に持てゆき居たりしものをして悉皆烏有に歸せしめ了んぬ、只頑鈍の頭腦幸ひに燒けず、粗末の記憶少々殘れり、どうせろくには出來ぬ筈なりしもの、まゝよ鶏肋の安料理 (明治三十三年三月八日)

(二) 英國及び其國民 (續)

▲國勢一斑(續) 國家立法の最上權は國憲上議會に在り、執行權は名義に於て君主に屬し、事實に於て内閣に屬するは夙に世の知る所なり

内閣は實際上所謂政黨内閣にして、下院に過半数を有するの政黨之を組織す。憲法は夙に世に有名なる不成文的非組織的にして、其淵源は頗る遠く、大憲章(千二百十五年)以後にても約七百年、其間歴史的に成長發達したるにて、造りたるに非ず出來たるなりとは例の英人の自慢する所、何ぞを複雑浩澁にして、之を學理的に編成するは學者の難しとする所なり

随つて内閣役員の範圍も時代に依りて變遷あり、乃至年所を経ると共に名實相副はざるに至れるものあり、現今内閣大臣を以て稱せらるゝもの左の如し

大法官(ロードハイチヤンセロール)

ハイコートオブチャンセラーと稱する王國最高衡平法院の唯一法官にして、法律の長と思惟せられ、而して國璽の保管者たり

大法官は其職責として、同時に貴族院議長となり、又君主の信任ある顧問として、國家の大事、副大法官以下重要なる諸官の選叙に助言す

大藏大臣(ファストロードオブジトレジュアリー)

内閣の首長行政の長官にして通常佛語のブルミエ即ち第一者を以て呼ばる、日本の總理大臣是れなり、國家重要の問題に就いて演説をなし、且つ貴族院に於て凡ての質問に對し答辨をなす

現今の保守黨内閣に於て、大藏大臣が別に獨立してパールフォータ氏之に任じ、ソリスベリー侯が外務大臣を以て總理大臣たるは珍らしき異例なり

樞密院議長(ロードプレジデントオブジプライベートイビーカーンシル)

樞密院の長官にして院の議事を統ふ、院の職制は大體に於て我國に同じ

掌璽官(プライベートイビーカーンシル)

御璽を保管する職掌なれども、現今にては主として榮位高級の表示として用ゐらる

出納尙書(チャンセロールオブジエクスチエクエア)

實際に於て日本の大藏大臣にして國家財政の長官たり、毎年度の豫算を編成し、財政諸法令案を議會に提出するを掌る

内務大臣(ホームセクレタリーオブステート或はセクレタリーオブステートフ
オアジホームデパートメント)

國內の民政を掌り治安を保持し、乃至商務に關係を有す

外務大臣(フォレン、セクレタリーオブステート或はセクレタリーオブステート
トフォアジフォレンシアツフエヤス)

我外務大臣に同じ

植民大臣(コロニアルセクレタリーオブステート或はセクレタリーオブステート
トフォアコロニス)

凡る海外所領地の政務を統ふ

海軍大臣(フアストロードオブジアドミラルテイ)

海軍の長官として、各委員諸官衙を統ふ

ランカスター公領大法官(チャンセロールオブデューキーオブランカスター)
ランカスターの法務を掌る、但し其實務は副法官之を行ふ

以上を特に重職とす

陸軍大臣(セクレタリーアットウオア或はセクレタリーオブステートフオアウ

オア)

海軍大臣より輕し

印度大臣(セクレタリーオブステートフオアインディア)

地方政務局長官(プレジデントオブジローカルガバメントボード)

通商局長官(プレジデントオブジボードオブツレード)

愛蘭太守(ロードリユテナントオブアイヤラント)

愛蘭大法官(ロードチャンセロールオブアイヤラント)

蘇格蘭大臣(セクレタリーフオアスコットランド)

工部大臣(フアストコミツシヨナーオブウオークス)

農務局長官(プレジデントオブジボードオブアグリカルチュア)

(三) 英國及其國民 (續)

▲國勢一斑 (續)

英國議會は例の兩院より成立す

上院即ち貴族院は皇族僧官世襲貴族一代貴族撰舉終身議員撰舉有期議員等より成り、議員總數五十年前四百五十七人なりしもの、現今増して、五百七十五人なるに至る

僧官は其職任を以て議員たるものにして、ヨーク、カンタベリーのアーチbishoppを始め、英蘭のbishopp二十六人、撰舉終身議員は愛蘭貴族にして、同有期議員は蘇格蘭の貴族、是は下院の任期中在任するものなり

世襲皇貴族議員の中には、十三世紀の昔より連綿たるもの四人、十四世紀よりのもの五人、十五世紀よりのもの七人あり、世襲貴族の三分の二は現女皇の治世に叙列せられたるものなり

貴族院は別に大法院となる

下院即ち庶民院は、ヘンリ三世の代より始まり、爾來幾多の沿革を経て、現今郡(日本の府縣なり)市、撰舉邑(バラ)大學等の代表者より成立つ
議員總數六百七十人にして、其内詳左の如し

英	二五三	市 邑	二三七	大 學	五	合 計	四五九
蘇	三九		三一		二		七二

愛 一八五
計 三三七
撰舉人總數は六百四十一萬五千餘にして、全國を通じ平均人口六に付き一人に當る(日本は百人に付一人二三分の割なり)

被撰舉人は滿二十一歳以上の男子にして、各宗僧侶は被撰舉權なく、政府用達人、市郡等の助役、地方吏員、其撰舉區内のは撰舉被撰舉權とも之を有せず、貴族は、院に列せざる愛蘭貴族に限り、被撰舉人となることを得

議會は樞密院に諮詢の上、敕命之を召集す、其發令は少くとも開會より三十五日前たるべし、通常會は毎年一回にして、會期は四月中旬より八月下旬に至るを例とす、議員は無歳費にして多くは倫敦に事務所を有し、俱樂部に出入し、交際場裏に奔走し、乃至議會の委員として、諸般の調査に従事せざるを得ざるを以て、其れ相當の才學あるべきは勿論、概ね百萬家の富豪なり、國會議員が英國に持てるは、一は其當人が議員たらざるも、亦有力有價の人物たるが爲なり、無學無能素寒貧の輩なきが爲めなり

故に議員の醜聞、惡聞等は、藥にしたくも此國にこれなし、偶々戀の浮名にても流せば、其入政界に於て死せざるを得ざるは、讀者の既に知らるゝ所なり

議會毎日の開會は兩院ともに午後にして、獨り緝紳の朝眠に便するのみならず、亦常職あるものゝ利便を圖る、且つ最も業務の繁忙なる議員に至りて、商は院内より商店會社の事務を指揮し、工は其部室に籠りて製圖設計等に從事し、自己の意見ある議事あるときのみ、議席に列するものも少からずといふ

英國議會故實多し、彼の議席にて帽を被るが如き、往古民會を野外に開きし時代の遺風なりとかや、猶ほ議院内の状況委細は、西遊日記を參看あるべし

(四) 英國及び其國民 (續)

▲國勢一斑 (續)

地方制度は亦頗る複雑にして、特に英威と蘇、愛の間には著しき相違あり、今英威の部につき梗概を叙せん

英威は最先に合併せるにて、未だ全くは言語の統一をなす能はざるに拘はらず、法律制度は大概のことには於て、殆んど同一に行はる、隨つて地方制度亦盡一にして、兩國の各地方行政區は共に中央政府に直屬す

茲に一言斷り置きたきことあり、其は譯語の事にして、所謂カウンティ、デイストリクト等は甲は我邦にて郡と譯し、乙は區と譯し來りたれども、此國の實際は頗

る相違し、カウンティは我邦の縣に當り、デイストリクトは市郡區に當るものなれば、童蒙或は名に依りて其實を誤解するあらんを虞り、以後は可成其實に依つて譯名を付し、若し我邦に適例なきものは、筆る原語を存することゝすべし、是れ説述上の便宜を圖る爲めに於て固より予一家の私則なり

英威兩國を通じて、行政區を六十一縣(カウンティ)或はシャイアに分つ、内倫敦行政縣のみ地理上區域に少異あり、他は行政縣即ち地理縣なり

縣に一人の太守(ロードリネーテナント)ありて王權を代表し、治安判事の候補者を大法官に推選するを司とる、然れども此官は今日にては只名のみにして、實權を有せず、實務を執らざることを猶ほ我王朝末の國司の如し(現任者、亦悉く貴族なり)故に實際の行政官としては知事(セリツフ)及び副知事(アンダーセリツフ)あり、其以下の吏員と共に縣會に於て選任せらる

縣は所屬の警察を有し、治安裁判權を行ふ

縣會議員の任期は三年にして、縣會(カウンティカウンシル)の權限略ぼ左の如し

- 一 縣吏員の選舉選任
- 二 縣稅及び警察稅の決定
- 三 縣會計の監督

- 四 縣の起債
- 五 縣廳舎其他建造物の管理
- 六 貧院の維持管理
- 七 實業學校の維持
- 八 橋梁及び主要道路の管理
- 九 警部其他吏員給料の規定
- 十 縣稅支辨吏員の監督
- 十一 下院選舉投票區の專
- 十二 家畜病の豫防

縣警察の監督は、議員と行政官の同數より成り立つ、常設合成委員會之を執行し、獨り倫敦縣の警察のみ内務大臣に屬す

倫敦縣を除き縣を分つて市區(アーバンディストリクト)郡區(ルーラルディストリクト)とし、郡に郡會あり、市に市會あり、孰れに於ても女子また選被選權を有す

郡區を分つて村鄉(牧師區)となし、村鄉に民會を置き、人口三百以上の村鄉には別に村鄉會を設く、倫敦縣の行政には特別法あり、此縣下のディストリクトは正に我邦市制中の區に當る

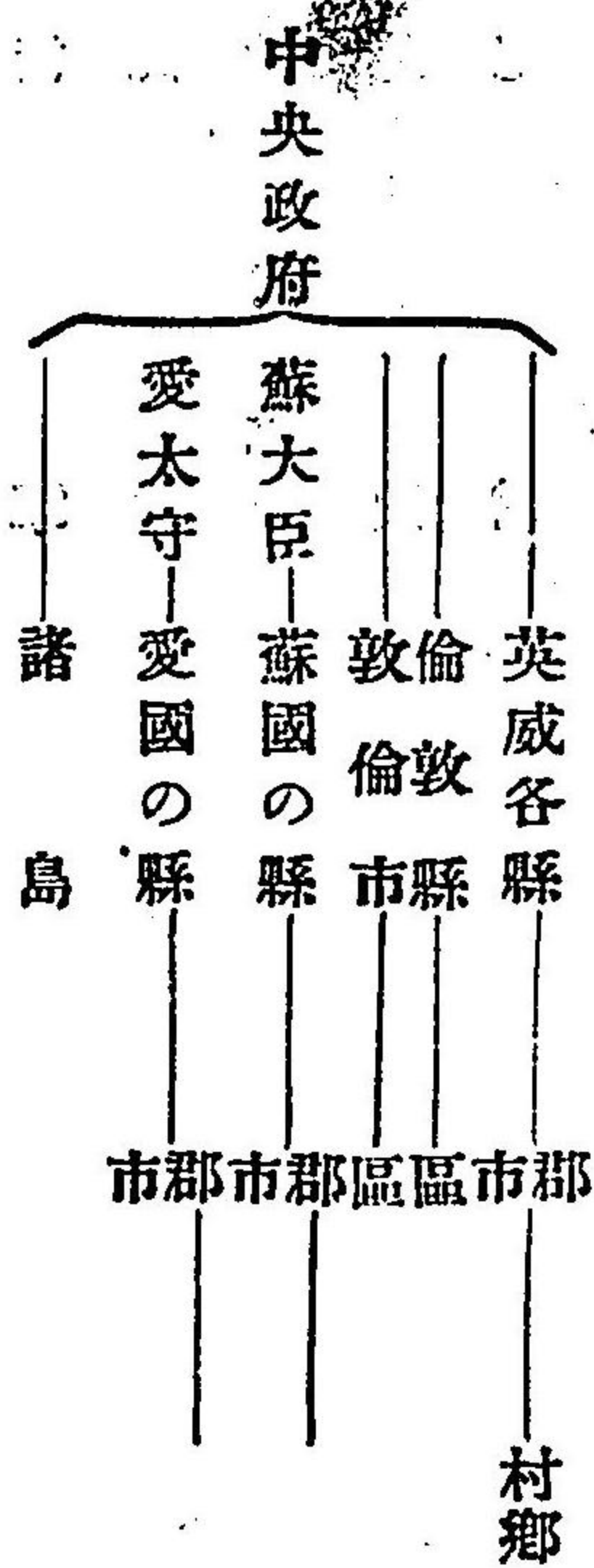
倫敦の市(シティ)は更に格別にして縣と對立し、市警察を有し、市長は裁判權を行ふ

蘇國は蘇格蘭大臣を總長官とし、其下に縣以下あり

愛蘭は愛蘭太守を總長官とし、其下に縣以下あり、其縣は全くの自治に非ず

人島及び海峽諸島は更に例外にして、主として各其固有の制度習慣に依る

故に英國地方政治の系統を表示すれば、大要左の如し



(五) 英國及其國民 (續)

▲國勢一斑 (續)

英國の財政は亦其大体を承知し置くこと、東洋の英國など、自稱する國民に取つて必要なるべし

會計年度は四月に始まり三月に終ると我邦に同じく、近數年の歲計は八億萬圓臺

より十億に上る、今千八百九十六年の決算に依り其出入の概略を掲げん
同年度の歳出は、九億七千七百六十四萬圓にして(假に磅を十圓とし、且つ萬圓以下
を切り捨つ)其大款左の如し

國債費	二五、〇〇〇萬圓
他の固定支出(年金司法費等を含む)	一六〇一
陸軍	一八、四六〇
海軍	一九、七二四
民政	一八、八〇〇
税關及内國稅費	二七〇二
郵便	七〇一八
電信	二、七四四
小包	七一五
計	九七、七六四
斯る複雑なる國柄に似ず、歳入の最も簡單なるは、苛稅繁租に苦しむ我々が最も艱 羨に堪へざる所にして即ち左の如し	二〇、七五六萬圓
關稅	

内

煙草	一〇、七四八
茶	三、七四六
ラム	一、九八五
ブランデー	一、三一一
其他合酒精酒類	九二〇
葡萄酒	一、二五四
小乾葡萄酒	一〇九
กาแฟ	一六七
乾葡萄酒	二二一
其他(但し有稅品は前記を合せ都合十三品に限る)	二九七
營業稅	二六、八〇〇

内

酒稅	一五、六〇三
麥酒稅	一〇、七一八
免許料	二三八

鐵道稅 二五九
其他 六

遺產稅 一一六〇〇

印紙稅 (郵電其他手数料印紙を除き) 七三五〇

地稅 一〇一五

家屋稅 一四九五

所得及財產稅 一六一〇〇

以上諸稅收入合計 八五、一一六

其他の收入 一六、八五七

總計 一〇二、九七三

彼の富彼の生活の度に於て、あれだけの仕事をあすに、僅に十億萬圓にて餘りあり、
幣は此貧、此生活の度に於て、僅か此位の仕事をなすに大枚貳億萬圓を投じても足
らず、結果日本の財政家は遣り様が下手と謂はざるを得ず、金を活かして遣ふ術を
知らざるものと謂はざるを得ず

(六) 英國及び其國民 (續)

▲國勢、一斑(續)

英國は世界の海上王たると共に、亦依然たる商業王なり、但し近來獨白佛蘭等が競
うて商業に勉強すると、一般海陸交通の進歩すると共に、從來概ね倫敦の取次を經
たる歐大陸と東南洋及び米國との間の貿易、漸次直接取引をなすに至るの傾きあ
り、爲めに或る部分に就いて言へば、英の商業減退の跡ありと雖も、其全體は年々増
進するのみならず、抑々英は世界に於ける事業の資本主、債主たるが爲めに、地理交
通の不便を顧みず、尙倫敦を經ざるを得ざるもの多々、此點に於ては漢堡も安都も
馬耳塞も、中々天窓上らざるなり

例へば東洋に於て長崎より浦汐に送る貨物が單に金融の關係の爲めに香港を經
ること毎々あり、東洋に於ける香港と西洋に於ける倫敦と、商業上の勢力は略ぼ相
似たりと見て不可なし

輸出入の合計は、同年(一八九六年)七十三億八千餘萬圓にして、其十年前(一八八七年)
の六十四億三千萬圓に比し、約十億圓の増加なり、總人口に對する入頭割は、百七十
圓より百八十圓に増加せり

同年輸入は四十四億一千餘萬圓にして、内有稅品は百分の六、コンマの八、殘る九十
三、コンマの二は無稅品輸出は二十九億六千三百八十餘萬圓にして、内二十三億九

千餘萬圓は自國產物、五億六千餘萬圓は外國及び植民地の產物なり、今輸入品及び自國產輸出品中一千萬圓以上のものを擧ぐれば、左の如し

輸入

穀物及麥粉	五二、七九二萬圓
棉花	三六、二七二
毛及び羊	二四、九五八
屠肉	二四、七五三
砂糖(粗及び精)	一八、三八三
バター及マーガリン	一七、八四二
木材	一九、二〇二
絹製品	一六、七〇四
亞麻、苧、黃麻	九、二三六
茶	一〇、六五一
毛製品	九、七〇四
家畜	一〇、四三八
油類	八、四四六

藥品類	六、七八四
種子類	六、七三五
果物及ホップス	五、七四七
小乾葡萄、乾葡萄	一、六〇〇
革皮	七、五九三
葡萄酒	五、九五二
チース	四、九〇〇
生銅	二、八五三
半鍊銅	二、八八二
生鐵	三、七六一
製鐵	四、五七四
鉛	一、八五三
錫	二、二八九
亞鉛及其製品	一、六六四
卵	四、一八四
カフイ	三、五七八

煙草	輸出	四三七〇
綿製品	輸出	五九三三三
綿製品	輸出	一〇〇四七
毛製品	輸出	一八二六六
毛製品	輸出	五、六六五
麻製品	輸出	五、〇三〇
麻製品	輸出	一、〇四一
黃麻製品	輸出	二、三四四
衣服小間物	輸出	六、七四五
製鐵及鋼	輸出	二、三八一三
鐵細工及刃物	輸出	二、二二一
銅	輸出	二、五四八
器械類	輸出	一七、〇三六
石炭	輸出	一五、一六〇
藥品類	輸出	八、二四三

輸出の主たるは綿と鐵輸入四十四億中十七億は飲食品此點に於ては英人は喰ひ倒れの民あり
 商品の輸入超過は十四億五千四百九萬餘圓にして輸出は輸入の四分の三に及ばず是れ同年のみならず毎年の例なり然れども金銀は却つて輸入超過を示すの例にて、獨り同年超出となりたりと雖も額左の如きに過ぎず

金	輸入	二四、四六八萬圓	輸出	三〇、一二三	輸出超過	五、六五五
銀	輸入	一四、三二九萬圓	輸出	一五、四〇八	輸出超過	七一九
計	輸入	三八、七九七萬圓	輸出	四五、一七一	輸出超過	六三七四

即ち六千餘萬圓なり而して此状態は同國に取つて別段貿易の逆境といふ程のものに非ず何となれば同國は前述の如く世界の最大資本主にして例へば獨逸より輸入するか其金利は英人の手に落ち米國より麥粉を輸入するか其借地料は英人の手に納まるといふが如き有様なれば畢竟するに同國に於ける年々十數億の輸入超過は單に爲換書替の手續をなすといふに過ぎず依つて同國人が國外に放資せる金額を五百億圓と算する決して過當に非ざるなり否な同國人は其金利を以て獨り收支を償ふのみならず尙歲々其富力を増進しつゝあることあり

(七) 英國及び其國民 (續)

▲國勢一斑(續)

英國は農國に非ず、然れども敢て農事を忽緒にするに非ず、時々農業博覽會等を開いて之を奨勵す、土地所有者は一エーカー以下のもの(首都を除き)八十五萬二千四百八十八人、一エーカー以上のもの(同)百十七萬三千七百九十四人あり、耕地は全面積の百分の五十八・五に當り、其他は林野河湖等なり、千八百九十六年の穀菜作付反別は

小麥	一、六九三、六五七	エーカー	大麥	二、一〇四、七六四
裸麥	三、〇九五、四八一		蠶豆	二五二、〇七六
豌豆	一九六、五六一		馬鈴薯	五六三、七四一
燕麥	一、八八三、一一八			

にして、同年收穫は裸麥一億一千四百一萬六千ブツセル(一ブツセルは約二斗)大麥七千萬ブツセル、小麥五千七百萬ブツセル等なり、地より出づるもの金屬一億一千萬圓、石炭五億七千萬圓、其他一億一千萬圓、工業は無綫最盛にして、河海に沿へる造船場一都をなせる紡績場及物細工場、英蘇

愛の各所に在り

綿毛麻等の紡績所七千百十九、錠數五千三百六十四萬一千六十二、其雇人男四十二萬八千八十二、女六十五萬六千五百四十九、合計百八萬四千六百三十一、内半日就役の幼者男四萬五百五十八、女四萬五千九百四十一

綿織等の製産額は前項輸出額の外、更に頗る巨額なる内國消費あることなり、漁業亦七十二萬噸、七千四百餘萬圓の多額に上れり

郵便局二萬三百九十八、電信局九千九百二十六、電信線路三萬七千三百二十九哩、電信線二十三萬餘哩、鐵道二萬一千哩、其資本壹百億萬圓、帆船(小船を除き)七千四百九十五隻、四十七萬九千餘噸、汽船(同上)二千六百三十三隻、四十萬六千餘噸、帆汽海員六萬人、右は内國航船、外に内外航船帆二百隻、汽三百餘隻、外國航船帆千七百餘隻、二百二十三萬噸、汽三千六百隻、五百四十七萬噸、海員双方十七萬、英帝國即ち全英領の商船三萬六千隻、一千五十餘萬噸

宗教は國法上國教あれども何等の宗教も妨げられず、凡て信教は自由なり、國教は監督教にして、君主は法に於て國教の長たり、僧職を任免し、教政を統ぶ、僧職は英威に於て、アーチビショップ二人、ビショップ三十三人、各ビショップの下にデイン九十人、アーチデイン九十人、ルーラルデイン八百十人あり、是等を以て組

續する僧議會各地方に在り、各村郷を牧師區として一寺を置く、其數一萬四千五百、千八百九十四年の結婚者、式を國教寺に行へるもの百分の六十八、コンマの六、四にして、コンマの二は羅馬教十一、コンマの九は其他の寺院、五は猶太教寺、十四、コンマの八は登記所に於てせり。

國教以外の宗派に於ては、美以美一萬五千二百寺、八十萬人、獨立四千六百寺、千十六萬人、洗禮教一萬九千寺、三十五萬四千人、羅馬教百五十萬人、猶太教約十萬人。

蘇の國教は長老教會、愛蘭は羅馬教、制度狀態各別異あり。

此他教育、軍事等猶ほいふべきあれども、斯る觀察は際限なければ、是にて擱き、次下直に言歩を進めん。

(八) 英國及び其國民 (續)

▲秩序の國禮儀の國体裁の國 前項國勢一斑は只順序上止むを得ず之を掲げたり、固より無趣味の數字的報告讀者の倦厭を招きたるを思ふ、請ふ是れより批評的觀察に移らん。

英國は徹頭徹尾秩序の國なり、足始めて英都に入るもの、先づ其繁盛雜踏に驚き、次に秩序の整然たるに驚く、紙上始めて英の法制を學ぶもの、先づ其複雜混淆に驚き、

其蘊奥を究むるに及び、終に漸々秩序を認め、或は認むるを得ざるに終る、而も秩序は終始在るなり。

蓋し足其地を踏むものは、眼直ちに秩序を見る、英國の實際は直ちに「秩序」なればなり、昔に依つて之を學ぶものは、秩序を看ること頗る難し、英國の秩序は想像と理屈を以て殆んど之を推す能はざるの度に在ればなり。

な主は殆んど虚位を要す、而も進んで實權を奪はんとせず、民君また威を冒すこと間し、君主屢々宮殿を開きて衆覽を許す、其質素なるを見ては皇徳に泣き、其莊嚴君見ては皇威を仰ぐ、英の王宮公開は外、外客を引くの手段となり、共に、内、君民のをを融和し、以て政治上秩序の根本を養ふの効大なり、宗教亦君民をして、互に慈忠要待たしめ、王は民福を上帝に祈れば、民は毎日寶算を禱る、斯くの如くにして、大朝敵のクロムウェルを歴朝の皇陵に合せ葬り、叛民、王を誅するの狀を見世物となして、世怪しまず、君民和して秩序あるを得るあり。

内閣は政黨の消長に因りて相進退す、而して渡すべきときに渡さじと執念する前、内閣なく、取るまじきを取らんと争ふ後、内閣なし、吏胥思想言論の自由を奪はるゝことなし、而して源氏の内閣に反くに非ず、平家の政府に偏するに非ず、吏胥は國家の公僕として、器械の如く正直に奉公す、故に内閣の更迭あるも、政府の事務に些の

故障なく、過渡に機關の圓滑を欠くことなし。議會の議場黨別あり、一定の席なし、被帽携杖而して入り、而して居り、而して語る、一見不規律極まるが如くにして、實は最も規律あり、出入必ず議長に禮し、言ふとき脱帽立つて許可を乞ふ。

而して其言ふや温雅なり、鄭重なり、議員大臣朝黨野黨等しく敬語を以て呼び、遊ばせ言葉^をを以て議論をす、故に演說數時間にわたるも、討論宵を徹するも、所謂口角沫を飛ばし、讒謗怒號罵詈する様のことなく、悠々として迫らず、謹んで傲らず、苟くも屈せず、苟くも侵さず、其争ひや君子なり。

斯くの如くにして秩序あり、此秩序や、大絃急的の秩序に非ず、俗弊洋々の秩序なり、橋上走馬の秩序に非ず、柳下長流の秩序なり、而して此秩序や、國性となつて、洋内に充つ。

(九) 英國及び其國民 (續)

▲秩序の國禮儀の國體裁の國(相)

此秩序や社會に滿てり、故に男子に男子の秩序あり、女子に女子の秩序あり、男女の間に男女の間の秩序あり、貧富に貧富の秩序あり、此秩序や學校に滿てり、故に父母

に父母の秩序、子女に子女の主従に主従の秩序あり、此秩序や學校に滿てり、故に教師に、生徒に、教場に、寄宿舎に、各其秩序あり。

市に出づれば、車馬の絡繹數哩、轂應に相撃つべくして相撃たず、死傷屢々之を出すべくして、而して未だ容易に之を出さず、指頭來往を指揮號令するの巡查、注意の周到なるにも因るべしと雖も、抑々車掌御者乗客、各其自己の責任として秩序を重んずれば、あり、聞く倫敦にて、苟くも其法を誤まり、馬車を衝突せしめたるの御者は、法の制裁と雇主の黜罰あるは論なく、爾後は孰れの會社個人も然る人物を雇ふことなしと。

人道には人織るが如し、而して肩應に相摩すべくして相摩せず、行くに法あり、右に就き、歩むに法あり、前者を跋えず、杖傘を持つに法あり、臂を張らず、若し誤まつて塵れ合ひ突き當りたるときは、其過失の孰れにあるに拘はらず、急に宥免を請ひたるものを紳士とし、淑女とす、秩序の整然たる所以のもの、亦偶然に非ざるなり。

倫敦路^上行政の秩序は、世に有名なる所にして、嘗て露帝戴冠式の事ある、露朝は特に官吏を派して、視察參考せしめたりといふ、然れども戴冠式には不幸にして、無数の歴死者を出すを免かれざりき、則ち倫敦路上の秩序は、政府に在らず、巡查におらず、萬千の人各自に在り、萬千の車馬其者に在り、自ら秩序なきの人民を以て、一朝摸

傲し得べからざるを見るなり
相集まつて物を観る、相集まつて船車に乗る、前なるものは自ら前あり、後なるものは自ら後なり、只男子は女子に對して、毎に譲り抜くるのみ、其他に於て、後は前を凌がず、二三は一の上に出づることなし

外國人あり切手を郵便局に買ふ、人あり集まれり、猿轡を人後より出して錢を供す、局吏オードオーダー(秩序々々)と制して顧みず、其人大に慚ぢて退く、婢の郵書を投函するを見る、三四十の書一通づ、且つ見且つ投ず、印紙の洩れざるや否やを検し、且つ其數を數ふるなり、是れ日本の下女ならば、一束投下し去るべき所

人會すれば長幼序あり、貴賤順あり、男女別あり、食卓に臨めば食卓長あり、三人集まれば議長あり、一も廉立ち儀式だちたる所なくして、秩序は自然に行はる、敢て勉めて行はず、安んじて之を行ふ、人間秩序を行はず、秩序自ら行はるゝなり

英の秩序に特質あり、此特質や實に秩序其者をして能く自ら行はれしむ、特質とは何ぞや、秩序を造つて物を支配せず、物に従つて秩序を造る、他國人は概ね然らず、秩序を造つて之を支配す、佛人は是れなり、日本人は是れなり、支那人獨逸人亦殆んど是れなり、倫敦市街の不規則は英人の秩序なり、巴里柏林北京の街衢方正は佛獨支那人

の秩序なり、京都は日本人の秩序なり、清人は一齊に辮髮せざれば國家の秩序立たずと思惟し、日本人は東京の市區を改正せざれば、帝都の秩序立たずと思惟す、之を要するに諸外國人は、物の尺寸を揃へて切つて而して等しうせざれば、秩序行ふべからずとなし、英國人は長短高低其まゝにして之に秩序を被らず、外人は角を矯めて牛を殺し、英人は曲つたなりに角を養ふ

英の秩序の原因は固より二三にして足らざるべし、只予は大膽僭越ながら、敢て一言にして之を掩はんとす、曰く、英國秩序の原因は國家成立の不秩序及び事物の複雑是れなりと

予は他が心醉者と思はん程まで英の秩序を稱讚したり、然らば直ちに是を以て之を日本を施すべきかといはんに、予は直ちに首肯する能はず、何となれば残念ながら日本は幼國、之に一概に秩序を強ゆるは、兒童に隱居の身だしなみを教ふるど一般、徒らに成長を妨ぐるの虞あるのみなればなり、故に日本が之を學ぶには、部分あるべし、時機あるべし、其部分と時機に就いては、世人各所見あらん、而して是れ自ら別問題に屬せり

但し茲に附言し置きたきは、英の秩序は前述の如く、物に隨つて之を立つるものなれば、若し學んで成らざるも、別段の危険なきこと是れなり

(十) 英國及び其國民 (續)

▲秩序の國禮儀の國體裁の國(續)

禮儀と體裁とは無論區別あるべし、茲には便宜により或は別ち或は混じて之を用う、必ずしも拘はらず

英國は亦禮儀の國なり、都市固より禮儀あり、田舎亦禮儀あり、予は今其法式の仔細に立入らざるべし、何となれば是れ寧ろ作法書の領分なればなり

先づ社會の高所より大觀せんか、王室席堂の進退動作は予の敢て知る所に非ず、只聞く所に依れば、閑雅にして頗る優美なるを見ると、蓋し東洋の禮は和を節し、西洋の禮は和を調ふ、故に王室の禮と雖も、親和を主として威嚴を主とせず、女皇屢々賤男女にも言葉を賜ひ、皇子女慈善演劇に出演せらるゝが如きは、世の普く知る所なり、國民女皇を大慈愛(グレートラブ)の人といふ、道德が宗教の博愛に基づけるが如く、禮儀亦宗教の博愛に基けるなるべし、上下を通ずる禮儀に於て、宗教の緣故を合ひや論なし

貴族の禮は鄭重なり、而して其禮儀や一舉一動一事一物悉く之を支配するを以て、野人のこれに慣熟すること頗る困難なりといふ

平民の禮は普通の禮なり、只其貧富賢不肖職業の貴賤等に因りて、各多少の詳略あるは猶ほ我邦に異ならざるなり

貧民の禮は粗略なり、用語發音すら大異あり、只其我邦の貧民に異なる所は、裸洗せざることを、帽を被ること、温良柔順なること等是れなり、此輩は酒に酔ふを耻ぢず、乃至内々喚打(ワンプビトイング)をさへ遣る

我邦小笠原流伊勢流等の如き、時世と共に進化し來らば、蓋し當國貴族乃至紳士の禮儀と同趣異狀のものとなりつらんと、予は思ふ、當國の紳士道は「かど」の潰れたる武士道にして、當國の紳士禮は「かど」の潰れたる武士禮なり、我邦の武士道は四角或は三角にして、當國の紳士道は一角なり

禮儀は時代に依りて變れり、而して其變る毎に、繁を去つて簡に就けり

今日英人普通の禮儀は、之を學ぶこと難からず、試みに其要領を掲げん(次第不同)

- ・ 一時處相當の服裝をなすこと
- ・ 一膚につくもの即ち下着の類を人目に觸れしめざる事
- ・ 一人目に觸るゝシャツ、襟、袖口等を清潔にする事
- ・ 一髪及び手及び靴を清潔にする事
- ・ 一剃る筈の所を剃る事

- 一人の前にて衣紋を繕はざる事
- 一同むく靴を脱せざる事
- 一時間其他の約束を確守する事
- 一書面には必ず返書し、來訪には必ず答訪する事
- 一一度訪問會したる人は遠からざる内に今一度訪問する事、若し一度限りにて寄りつかざれば、初對面にて愛相を盡かしたるかの様に思はるゝの虞あればなり
- 一無案内にて他人の室に入るべからざる事
- 一妄りに喫煙すべからざる事
- 一酒は飲むとも醉顔を人に見らるべからざる事、無論醉態を現すべからざる事
- 一高聲大笑すべからざる事
- 一女子は脱帽すべからざる事
- 一常に愉快の色あるべき事
- 一談話は世事美術政治學術旅行演劇何にても可なりと雖も、他人の誹謗をなすべからざる事
- 一對手をもちすべからざる事

- 一言葉は婉曲優美なるべく、露骨皮肉なるべからず、然れども明白にして聽者をして解釋に苦しましむべからざる事
- 一尾籠の談話をあすべからざる事、女子の前には猶殘酷なる事件の談話を忌む
- 一男女二人一室に在らば戸を密閉すべからざる事
- 一未知の人にも言はざる事
- 之を要するに非禮言はず聽かず視す

(十一) 英國及び其國民 (續)

▲秩序の國、禮儀の國、林裁の國(續)

私道とあれば人行かず、私門とあれば人入らず、博物館其他公開の建設物内に於て如何なる珍品を露出しありても、假にも手を觸るゝ様のことなきは論なく、公園に於ても僅か一尺高の鐵柵あれば、妄りに越えて入ることをせず、踏むなせあれば芝生も踏まず、花をば嗅ぐとも手折らんとするものなく、馬をば聽けども驚かすものなし、故に百花は風雨の外に散らず、禽鳥低く樹根に巢ふ、獨り人間陰私の事ある、未だ許すに慎獨の徳の全きを以てすべからずと雖も、少くとも人前表面に於ては、地を盡して年となし、敢て逃亡を企てざる底の民とも謂つべし

乗合馬車の内に美なる榜あり、記して曰く「謹んで乗客諸君が放唾し玉はざらんを請ふ、尾籠ながら辻便所に入る、固より落書などをなせるを見ず、小便所の前壁に標文あり、何なるぞと讀みもてゆけば、諸君此處を出る前に衣紋を繕ふを忘るゝ勿れ」とあり、前の控鈕を忘るゝなど申すことなり、倫敦に馬數萬頭、之に與ふる枯草も夥しきものなり、而して其市中を運搬するもの、悉く切り揃へて正方形となし、其を市松形に積み上げて行く、英人体裁に注意すること、殆んど馬鹿らしき程なり、一般斯の如くなるを以て、人若し無禮不体裁を免かれんと欲せば、朝起盥漱沐浴し、衣紋を正して寢室を出で、更に家外に出でんとするには、亦自室にて一切の体裁を整へ、出で、行くこと遠きとき、乃至歩きて人を訪ふときなどは、途中更に靴を磨かせ、顔を洗ひ、髪を洗ひ、帽をなで衣を清め、料理屋劇場等は論なく、停車場辻便所等にも概ね洗面所の設けあり、凡その威儀を繕はざるを得ず、西洋家屋に照姿鏡多きは、裝飾に非ず、實用の爲めなり、日本にては照姿鏡なし、故に佐々友房氏が常に鏡を懐中するが如きは、本人威儀保存上の必要に因るべく、強ち笑ふべきことに非ざるなり、嘗て帝國海軍の二三者あり、西遊して先づ馬耳塞に着き、巴里より特に出張せる知己の吏人に迎へ取らる、吏人絹帽にして美服せり、二三者潜かに笑罵して曰く「彼奴如何にも氣障な風をして居る哩、何と癩に障るではないか、予等佛都に入るもアン

ナ眞似をせし」と、さて護送せられて巴里に入る、翌日吏人拉して去る、第一番に帽店に到りて絹帽を買はしめ、第二番に服屋に入りて、新服を買はしむ、而して曰く「是れだけのことをなさいれば、予は君等を案内する能はずと、二三者終に拒む能はず、忽ちにして各自ら如何にも氣障な癩に障る奴ども」と化し了んぬといふ、吏人の言蓋し極端なりと雖も、郷に入つては郷の作法、また餘儀もなきものあるを見る、禮儀三百威儀三千、英國に於て殆んど之を見る、而して其効果は如何、直接には体裁を美にし、間接には亦道義を補ふ、英人多く徳行の民たるもの、後項に述ぶる原因ありとは雖も、禮節の制裁之をして不善をなすの機會に遠ざからしむるに因るもの亦少しとせず

禮とは何ぞや、兒戲中の兒戲なり、邊幅修飾は更に兒戲なり、然れども人生原來兒戲なれば、苟くも人生を無視せざる限り、其中の兒戲亦捨つべきに非ず、特に記者自身の如き、性癖に於て之を好まず、身勝手に於て之を便とせずと雖も、性癖身勝手のは之を議論の標準に濫用すべからざるや論なし、乃ち謹んで公平に思考するに、禮儀体裁亦文明の花にして、之を培養奨励するの必要こそわれ、嘲罵嫌棄し去るの謂はれなし、而して我帝國は文物の進歩見るべしとするも、禮儀は殆んど中絶の時期にして、舊禮破れて新禮未だ定まらず、特に服制の粗末亂雜なるは支那人朝鮮人に

も劣り、赤裸となることは印度の黑人にも優るといふ有様なれば、敢て歐洲都會の禮儀を直譯輸入せよとはいはれど、何とか現状を改良して、餘り世間に耻かしからざる日本新禮式を定めたいものなり、國民の禮儀体裁は、獨り國家の体面に關するのみならず、往々國交に影響することあり、有志者省慮せざるべけんや

(十二) 英國及び其國民 (續)

▲貴族の國而して、平民の國

貴族の國は同時に保守の國たるを意味し、平民の國は同時に自由の國たるを意味す

英國は蓋し驚くべき貴族國なり、貴族は王室と共に、或は王室よりも長く相傳へて七八百年世襲せるものあり、我邦の公家華族が遠く神代よりせるに對しては、固より比すべくもあらずと雖も、武家華族に對しては約二倍の長きに及ぶ、而して其等の舊貴族は依然巨大の財産を有し、學識徳望を有し來り、近代の新華族は猶更政治家富豪等の成上りなるを以て、貴族に貧者無學者あらず、隨つて其社會上の勢力強大にして、貴族平民の懸隔は、寧ろ我邦よりも甚しきが如く、貴族自ら威張らずと雖も、國民が之を尊敬するは、古來の習慣未だ容易に脱却せざるものあるを見る、故に

禮式稱謂文通、各一定の階級ありて、敢て相侵し相紊らず、かげ言いふにも敢て呼び捨てにする等の事なきこと、恰も我の封建時代に様付の所を殿付けにせず、丹後守様、肥前守様あや申す所に詮さん純雄さんと呼ばざりしが如し、是れ一は當國言語の組織上、貴族平民を混稱すべからざると、全体禮儀の國たるにも因るべしと雖も、之を要するに當國の社會は依然貴族的社會にして、禮儀交際諸般の事、亦貴族的なりと謂はざるを得ず、是に至りては我邦明治政府の元老諸氏が時候構はず、公侯伯子男等の爵位を製造し來れる事情を追憶しては、覺えず一笑を催さざる能はざるなり

英人が保守的傾向に富めるは、夙に世上の傳説せる所なるが、其實際を見れば聞きしに優れり、「作れるに非ず成れるなり」との自慢と同時に、最も自慢するは「古雅」にして建築物に古色を貴び、器物什器に古色を貴び、人間に古老を貴び、下女下男知人交友亦悉く舊きを貴び、獨り新を競ふは日進の學術器械の或る部分と、衣服小間物、卵とパンのみ

或は建築物中不用にして頗る不都合の部分あり、之を改むれば便利もよく不都合もなきは瞭然たれども、敢て改めず、何故ぞと問へば只古來斯くありたる故斯くありしむるのみと答ふ、何故に斯くありたるやと尋ねれば、其は古人がなしたる事と

て何の故かは今分らず、只ありたる故ありたるなりと申す体にて、我々の如く強ちにいはれ因縁を穿鑿して始めて満足せんと欲することなし、或は寺院に電氣燈瓦斯燈は物かは、ラムプも燈さず、全く蠟燭を用ゐたるものあり、石油が神様に臭いといふ譯に非ず、偏へに古風保存の爲めなり、或は店舗に千七百何十年創業なんど麗々しく表記せるものあり、商店新規開業を尙はす、老舗を誇る、一切の事業に經驗を重んずるが爲なりといへども、抑々人心新を好まざるを愛するに因るもの多し、或は當國の造船所にて軍艦水雷艇等を造る、其最新式は露國の注文、日本の注文等に於て英國自身の艦艇は却つて其後を追ふこと多し、是れ或は偶然なるべしと雖も、亦英人の氣風に因つて然るものなしと謂ふべからず、むかし日本の入念者は叩いて而して後石橋を渡れり、英人は鐵橋を猶叩いて渡る。故に鍛冶屋を潰して製造所を造らず、船大工を亡ぼして造船所を起さず、製鐵所は鍛冶屋の成長したるものにして、造船所は船大工小屋の擴張せられたるものなり、萬事概して斯の如く、改良擴張をば之をなせども、滅多に根本的改革をなすことなし。

英國の社會を貴族的保守的傾向の一面より觀察すれば、略ぼ前述の如し。

(十三) 英國及び其國民 (續)

▲貴族の國而して平民の國(續)

貴族的は富強に利なるか、曰く否、保守的は文明に利なるか、曰く否、然れども英國に在りては貴族的保守的の傾向が秩序を保つに力あり、以て急激なる變革を避けて、事物の恒久力を養ひ、進歩を秩序的ならしめて、以て結局今日の富強文明を來すに効用ありたるを疑はず。

然れども是れ寧ろ貴族的保守的の寸効といふに過ぎず、其弊として尺害の起るは、英國亦之を免かるゝを得べからざるなり、然るに當國平然として、獨り其弊を受けざるを得るは、實に貴族的保守的の効利のみを存じて其弊害を除去したればなり、貴族の國其儘にして之を平民の國となしたればなり。

政治に於ては貴族の特權尙存じ、即ち無撰舉或は少數者間の選舉に依りて、上院に座するを得ること我が邦の如し、社會上に於ては貴族が其上流に位して、人間生活諸般の事に勢力を有すること我が邦の比に非ず、然れども其貴族の位號を譜第の貴族及び一部政治家の專有物となさざる事我が邦とは聊か異あり、別言すれば授族の門戸を大に開放せられあり、故に大工も貴族となれば船乗も貴族となり、醫者も坊

主も百姓も町人も、業體に拘はらず貴族となる、學者政治家は勿論の事なり、故に日本の本の書生が大臣を目的として學問する代りに、當國の丁稚は貴族を目的として商賈に勉強す、故に貴族は當國に於て害とならざるのみならず、却つて民業獎勵民心興起の具となるの利あり、斯の如くにして當國は能く革命を避け、且つ進歩するを得、是れ必ずしも制度の宜しきを得たる故に非ず、經世的政策運用の妙を得たる故なり、否な苟くも故意を以て事物を進め或は抑止せんとせず、之を自然の發達に任せて、人は只其差當る障害物を除去するに止まればなり、斯くの如くにして自由の政治は、米利堅よりも佛蘭西よりも却つて美しく此國に行はれ、國家の富強文明は根強く秩序的に進歩するを見る、或人曰く佛人は二階を措きて三階を造り、英人は二階を作りて三階を作り、米人は二階三階同時に造ると、蓋し然らん

慈善は此國の名物にして、貧民法に依り各村郷が貧民救助の爲めに支出する公費壹億萬圓に下らず、倫敦府中の慈善義金のみにても一ヶ年五千萬圓に上る、故に倫敦には歐洲の貧民群衆して其恵に頼らんとするを以て、特に貧民多きを以て名あり、毎に米人等に笑はると雖も、此義舉以て貧民の反抗を豫防し、社會黨等を防禦するの功や絶大なり、貴族富豪等の大地主は、其小作人の快樂健康幸福を保護増進するを以て己れの責任とし、若し衛生工事の不完全等より其領地内に傳染病にても起

れば、己れ之を殺したるかの如く、悲痛哀惜するものあり

倫敦のイーストエンドは世界に有名なる貧民窟なれども、實は生活程度の異なるより八釜しくいふにて、必ずしも我貧民の状態よりも酷なるに非ず、例へば一室に夫婦母子等同居するが如き、我邦にては平氣なれども、此國にては殆んど人間以下の殘酷悲惨なる状態と思惟せらるゝことなり、且同地も近年漸次改良せられて、今は大學を卒業したるものさへ數人あり、名聞私利を脱離したる純粹なる慈善家が、是等を救済するに努むるや到れり盡せり、或は時々窓の花園共進會を開きて賞品を授與する等の事あり、庭園なきもの花を窓に植う、パンを與ふるに止まらず、亦是れに美を教へて人生娛樂あるを、知らむるの温情は、到底名聞慈善家の味ひ知らざる所なり

嘗て倫敦に萬國社會黨の大會あり、無論大數屋外に會せり、然るに政府は一巡查を増さず、全く關知せざるものゝ如し、ソコで狂人も獨りは狂はず、兇惡の會衆出さん手もなく、無事に散會したりけり、但し當局は極めて秘密に萬一の準備をなし居たりといふ斯くの如くにして、獨佛露伊が持て餘せる社會黨も共産黨も虛無黨も、此國に入つては忽ち鼠の如くになつて仕舞ふ、抵抗するものなければなり、全く干渉せざればなり、情けに及向ふ及なしとは何處の國にも通用するか

斯くの如くにして英國は貴族と平民保守と自由貧富貴賤を調和し了す予は非華族論者の一人にして嘗て本紙に公表したる其論議は何處までも之を執持すべきや論なしと雖もどうせ華族が存在する以上は此國の貴族の如くならしむること廢物利用の便方たるべく乃至一代華族勳爵士等を造るのことも華族廢止の楷梯として可ならんと思ふ

(十四) 英國及び其國民 (續)

▲責任の民、忍耐の民

英國人は信教の民なり英國人は篤行の民なり英國人は起業の民なり與國の民なり而して凡そ是等のもの悉く其各自の責任心忍耐心に依りて然るを得るを見る既に責任の心あり同時に忍耐の力なきを得ず英國人は能く責任の心を忍耐の力もて行ふの民なり

英國が殆んど世界隨一の信教の國たり英人が殆んど世界第一の信教の民たるは今更言を要せざる所にして宗教家中真正の献身的行爲をなすの男女少からざるは物かは俗人にして亦宗教の爲めに身財を致すもの比々たり他國にては助もすれば宗教を蔑視するの傾ある(日本に於て特に最も然り)學者政治家豪傑と雖も此

國にては眞心を以て神に仕ふるもの、如く宗教家は無論彼等を以て悉く眞心に神に仕ふるものとなす予は其果して然るや否やを知らずと雖も多くの中には只他人が信する故に自分も信するものあるべく即ち習慣風俗に依りて然るものにして畢竟するに英人の信教は神に對する責任の爲めなるものあるべきと共に自己に對する責任の爲めなるもの亦少からざるべしと予は思ふ何となれば此國にては助もすれば不信者は即ち悪人なりと思惟せらるゝが如き傾きあれば殆ど英人が篤行の民たることは亦世に認知せらるゝ所なるが其道德は無論基督教道徳なれば國民の性行に及ぼす宗教の力は蓋し尠少ならざるべし然れども予は此點に於て直接道德の保護者は社會の制裁乃至家族制度の宜しきを得たる等是れにして道德維持の終局の動力は自己に對する各自の責任是れなりと思ふ何となれば此國にては篤行ならざれば身を容るゝの地なければなり人生るれば父母の分限相應に教育せらる教育終れば貧者は勿論富者と雖も一身を自力に頼りて立てざるべからず何となれば此國にては親の物は子の物との諺殆んど通用せざればなり故に青年男子にして懶惰不品行なるものなし若しあれば乞兒となるも餓死するも親は子として之を待たず親類縁者は尙更之を顧みざるなり故に女子にして不品行なるもの尙更これなし若しあれば相應の配偶を得ざるは論なく下女

にも之を雇ふものなし、斯くの如くにして凡そ男女一人前の人間として世に立たんとするには、必ず篤行の人たらざるを得ず

商人と政治家は此國にても、比較的に虚言するものと信せらる、然れども比較的は即ち比較的にして、嚴格なる宗教家、道徳家の眼より視て然るのみ、時に商略政略を用ゐるをいふのみ、平常の行爲習慣に於ては、何處までも紳士に二言なく、商人に二價なし、紳士虚言すれば紳士の資格を累はし、商人一たび虚言すれば之れを賣買取引をなすもの無さに至る、即ち虚言したくとも、其身が可愛ければされぬなり

(十五) 英國及び其國民 (續)

▲責任の民、忍耐の民(續)

既に責任の心あり、之を行ふには結局忍耐を以てせざるべからず、而して當國にては前述各自の責任と社會の制裁とが、後より鞭撻して忍耐せしむる上に、前路各極樂あり、目標となつて亦忍耐を獎勵鼓舞し、前後左右の狀況が悉く人々をして忍耐せざるを得ざるの境に居らしむ

故に貧者は忍耐して百萬家とならんとし、賤者は貴族とならんとし、學者政治家は大家、大臣、タイムズ記者、倫敦市長たらんとし、大工は大工、左官は左官、畫師は畫師、詩

人は詩人、船乗は船乗、器械方は器械方、僧侶は僧侶、各其極點の地位に達せんとし、乃至其近邊に到らんとして忍耐勉強するを常とし、而して苟くも其極點に到れば政治家の親玉も大工の親玉も、國民の尊敬世間の名譽一身の利益を平均して決して優劣あるを見ず、即ち職業無貴賤の實を現はせるものにて、爲めに孰れの職業と雖も、大人物を容れざることもなく、大人物を拘束して忍耐勉強せしめざることもなし、其他下りて大志は勿論中志もこれなく、凡庸無能の多數人物に在りても、苟くも一事一業を固執すれば、結局必ず大なり小なりの極樂に達して、此國にても矢張り卑賤たる巡查と雖も、十五年二十年と勤積すれば、優に老後を養ふの年金あり、下婢と雖も最初無給なる代りには、辛抱すれば嫁資を造つて以て良夫を求むるを得、丁稚番頭なき前途最も多量なるは勿論の事なり

此他尙當國民の忍耐には地勢氣候の變化少きことも與かつて力あるべく、蘇國は山多きが住民比較的慍悍なり、歴史上先天的積勢亦強大なるべし、責任の民、忍耐の民が國家の富強に必要なは勿論にして、我邦人を以て此點を學ぶは蓋し何人も異議なかるべき所なるが、然らば之を學ぶの方法は如何といふに前述諸多の原因中、地勢氣候は學ぶべからず、宗教の勢力は頼みがたく、遺傳は一朝に製造すべからず、殘る所は政治上の手段を以てなし得る限りの事をなし、榮位名

爵を各種業家に普及せしむるが如き國民教育社會教育と相待つて、以て社會の組織を改良し、以て漸次に俗を移し風を變ふるの事あるのみ、地勢氣候の缺點の如きは、更に進んで人爲的修養を以て之を補ふの外なし

地勢氣候の缺點とのみいふては、或は合點せざる人もあらんか、日本人は概ね自國を以て最良氣候最勝景の地と誇り居ればなり、予も此點に於ては略ぼ同意を表す、而して所謂最良と最勝なるもの、是れぞ大なる缺點なりける、蓋し氣候の變化日本の如く頻數にして、山水の變化日本の如く小刻みなるは世界に又とこれあらざるべし、而して日本人は先祖代々子々孫々此時間空間縱横の多變化繁變化に慣れ居るが故に、同一事情の繼續すれば直に倦む、倦むは忍耐の大敵たるや論なし、外國は多く然らず、山のみの所あり、野のみの所あり、年中寒暑二季の國あり、冬一季あるあり、夏一季なるあり、年中春一季なるあり、斯る無變化少變化の國の住民は、生來「倦む」の何者たるを知らず、同時に忍耐の何者たるを知らず、知らず識らずに忍耐することなり、故に予は邦人が誇る所の氣候自慢山水自慢を以て國家國民の大缺點と悲しみ、如何にもして人爲を以て、此天然の難有迷惑を排除するの必要を感ずるや切なり

佛國の氣候は比較的に變化多く、其山水又比較的に變化あり、其地が世界第一の美術國となれるは、幾分是等の關係にも因れるなるべし、然れども其國民の性格が邦人の如く輕躁なりとの説は、予は一言之を辨するの必要ありと思ふ、其は輕躁ならば輕躁なりとして、之を輕躁と判断する其標準基點の事なり、成程佛國民は輕躁なるべし、感情的なるべし、然れども所謂輕躁感情的とは、誰が何を標準とし基點として言ひたるものか、英獨人が各自國を標準基點とし、之に比較して言ふたるとなり、故に英獨に對しては比較的輕躁なり感情的なるべしと雖も、日本に比較しては決して然らずと予は思惟す、是れ同國に入り國民の温厚平靜質樸なるを目撃して、直に感ずる所たるのみならず、彼一枚の畫に二十年を費し、一枚の敷物に十年を費すの忍耐力、乃至敵軍壘を越えて彈丸屢々壁を穿つの室内に於て、自若國會を開いて憲法を議したるの沈勇、乃至議場大争闘起りて、及閃き人死傷するの間、議長屹然として秩序を保守し、議事を繼續したる度量等の事實に徴して、同國民が輕躁ならず、裕容堅忍の民たるを知る、又米國人は亂暴なるに相違なしと雖も、是れ且つ英佛其他歐羅巴の老成國に比較して言ふにて、日本乃至東洋の諸國民よりも亂暴なる譯には非ず、(國際上等のことは格別とし)されば邦人動もすれば佛人の輕躁米人の亂暴を惡い手本に取りて、自ら満足せんとするは、大体に於て比較の標準基點を誤まり、乃至英獨新聞紙の惡口を其まゝ信用したるものにて、元來誤謬たるのみならず、

事實は兎まれ他の缺點を手本に取るは、同胞自身の不爲甚しきものなり。附言、右文中誤まつて食物が忍耐力に關係あるの件を脱せり、食物と人の性格との關係は頗る重大なるものあれば、我邦人の食物は、結局多少の改良をなさざるべからず。

(十六) 女子問題

は日本にては未だ有力なる問題とならず、西洋文明諸國に於て、未だ過去の問題とならず、之を要するに世界に於て尙現今の問題なり、且つ未來の問題なり。されば本問題終局の解決は、之を他日に期せざるべからずと雖も、日本に於て今日本問題を鼓舞するが爲めに、其趨勢と彼我の得失利害とを示すが爲めに、文明國の現状を記述するは、亦必要の事たるを信す。

子が特に觀察したるは英國の女子なり、而して同國の女子は世界に於て、最も發達したるものにして、其地位狀況最も善美なるものと稱せらるれば、今先づ其實情を略説すべし。

日本より野蠻文明の國々を経て英國に至る、野人の耳目を驚かすもの何ぞ限らん、而して子が先づ意外の感に打たれたるは、女子の温良なることなり、是れお轉婆を

以て豫期したるに因る、而して就いて之を熟察し、交つて之を久しうし、見聞之を廣くするに随つて、發見し來る所のものは何ぞや、肩を捻つて歩み、足を亂して疾走するが如き、謂はばお轉婆的舉動をなすもの、皆無にはあらずと雖も、偶々斯の如きあれば一般人は、ベリイラフとして之を指笑し、ツィアクチブとして之を戒しむる程にて、女子全體の標準は嚴に中庸に在つて、而して能く普及せること是れなり。

中庸とはいふ迄もなく、温良にして柔弱ならず、優美にして浮華ならず、機敏活潑にして輕躁粗暴ならざることにて、換言すれば「しとやか」にして「じやら」付かず、氣が利いて騒がしからず、威張つた様で愛嬌あるなり、餘りに女子の事を褒むれば、チト如何しき感起す人もあらんが、何せよ事實は事實にして、予は愚直だけに何處までも直言し得るの資格を確有し居ることなれば、讀者幸ひに安心して、予の言ふ所に任せ玉へや。

英國の女子は右の如くにして、之を日本の女子に例ふれば、演劇にすなる武家の奥方の品格をば其まゝにして、これに御殿女中の愛嬌を加味したらんが如く、歴史傳記に見る女丈夫の、華顔織手平日に内助し、一朝事あれば良人に代つて白馬金鞍三軍を指揮し、乃至良人を喪ひては自ら國政をさへ統べたりけんが如し。

日本武士道を骨として文明紳士道を作るべしとは、予多年の唱道にして、今回旅行

の結果は益々其是を確かひるを得たるが、更に武家の女子道の一部は、直に之を文明の女子道に引直すを得るを發見したるは、思ひ設けぬ掘出物にして、全く旅行の賜ものなりき、但し日本の女子道は武士道程には美からざりしを以て、随つて其復興保存するに足るの部分は頗る僅少なりと雖も、さりとて例の根本的に全く改造するを要せず、除れるを除き足らざるを補ひ、曲を矯め枉を伸べ、所謂改良を施せば、足るだけを得なり、今試みに同一なる例を擧ぐれば、西洋の女子に氣品あるが如く、日本武家の女子にも氣品ありけり、西洋の女子が學問し、馬にも騎り、自轉車に乗り、馬車をも馭し、舟をも漕ぐが如くに、日本武家の女子も書を讀み、禮樂を學び、馬にも騎り、薙刀も使ひ、鎌をも使ひたりけるなり、歐人の元祖が一夫一婦なりし如くに、日本人種の御元祖も、一夫一婦にして此世にはあれいでたまひたりけるなり、西洋の夫婦が男尊女卑ならざる如くに、日本の夫婦も神代にては甚しき男尊女卑には非ざりしなり、故に磨かば日本の女子とてあゝはれ終に光らでやは止むべき

右は面のあたり、當代女流の摸範と呼ばるゝ英國の女子を見るに及び、史上の日本を回想して、類似の點を求めたるのみ、若し夫れ現今の日本女子を以て、之を英國の女子に比せんか、其差は天地雲泥の如しと斷言するを憚らず、以下請ふ更に言歩を進めん

(十七) 女子問題 (續)

英國に於て、女子生るれば亦他國の如く、先づ家庭に於て女子として教育せられ、次に學校に於て女子として教育せられ、同時に亦社會に於て女子として教育せらる。女子は生涯を通じて區別あり、多くの事に於て男子と別あるや論なし

幼少の頃は活潑なり、其精神は無邪氣なり、愉快なり、何人にも和せざるなく、何人も之を見て可愛ゆき小供と感せざるなし、其身体は輕快なり、假令舞踏を學ばざるものと雖も、必定舞踏の眞似をなすべく、假令舞踏の眞似をなさざるものと雖も、所謂飛びつゝ、走りつゝ、はねつゝ、跳りつゝに慣れて、体の輕さは飛鳥にもたどへつべく、以て疾走の馬車に飛び乗り、飛び降る能はざるは稀れなり、童女は慥かに童男よりも活潑なり、機敏なり、否な凡う女子は男子よりも活潑なり、機敏なり、然れども女子の柔順は之に伴ふ必要資格なるを以て、柔順の特性は、童女の時より亦之を欠かず、無邪氣と多少の柔順とは、其活潑と機敏とを和して、以て婆娑々々然たるを免がれしむ

童女家庭に在りて禮を教へられ、樂を教へられ、祈禱讚美歌裁縫を教へらる、富者は自宅に師を聘するもの多く、其他は必ず小學校に送りて必ず少くも國民教育を受

けしむ、小學校と家庭との聯絡は、矢張日本にも現行しめる家庭通信簿に依りて保ち、學校の教育を家庭にて破壊せざるのみならず、之を扶くるのことだけが、多く日本に之を見ずして、此國に通例とする所なり

小學校を終れば、分に應じて女子中學、女子大學、乃至美術音楽書記學校、保姆養成所等、専門乃至職業の學校に送らる。而して女學生と在家の女子と、氣風服装寸異なく、大學の女學生が家に在りては、掃除もすれば、料理もする、日記帳も付ける、手籠提げて野菜貰ひにもゆくといふが如きは、此國には通例ながら、殆んど日本に之を見るを得ざる所なるべし

或は稀れに日本の男子が、西洋女子と婚せるものあり、世人或は其の女子の狀況を見て、贅澤無性我儘となし、以て一般の西洋女子を率せんとするは僻事なるべし、成程東西生活の程度は、其差甚しきを以て、贅澤と見ゆるは尤もなるべし、然れども彼等日本人と婚せるものは、實際過分に贅澤にして、特に無性我儘なる筈のものなり、讀者若し何故ぞと問はんとすれば、先づ洋人の妻妾たる日本女子の狀態を一見せよ、孰れが過分に贅澤にして、特に無性我儘ならざる、抑々過分の贅澤を望まず、無性我儘を欲せざる、而して盲啞蹙跛にもあらざる、あはれ十人なみの女子が、何を苦んで外國人、特に毛色も言葉も異なり、國の肩さへ並ばずと思惟せられ、輕蔑はすると

も尊敬はされざる東洋人の妻とは相成るべきや

抑々英國普通民の女子が、節儉なるは亦意外にして、衣食住に於て地位貧富相當の生活をこらすれ、衣は禮を缺かざるに止め、食は躰を養ひ、住は家庭の必要と快樂を保つを期するのみ、娛樂の爲めに、毎日六片の花を買ひ、開知の爲めに、毎日二三種の新聞紙を買ふ代りには、一時間をも空費せず、毎夜二時間樂を奏し、家族團樂談笑するの結果は、夫や息子が料理屋に通ひて、無益に散財するの必要を無くす、老幼は馬車、壯者は自轉車、能く郊外に遊ぶを好み、曾て公園の茶亭に入らず、兒女等の爲めには、自家製の菓子サンドウィッチ等を小奇麗に紙に包みて携へゆきて、樹下草上に之をひらき、遠く馬車に乗れば、其賃を拂ふのみ、然らざれば、半日乃至は終日遊び、壹錢も遣はずに歸るが常なり、凡そ浪費は男子は勿論、一家の家政を司るべき女子最も之を戒しむ

(十八) 女子問題 (續)

分相應の教育終れば、學校寺院郵便電信局其他公私の教師技術員事務員會計方として働き、尙貧なるは諸製造所の女工乃至家婢等として働き、貧富に拘はらず、醫師美術家文學者新聞記者等ともなる

一 昨年の調査に係る英國郵便局(電信局を含む)の吏員は十四萬八百六人にして内
 女子二萬八千五百五十七人あり、下婢保母家事方料理人以上は之を前記の家婢中に
 含む等の外都市にて女子が有付き易きはタイプライター技手にして、官廳商社と
 も此技術には主として女子を採用す、商店の現金方には亦女子多く、特に衣服小間
 物店等の賣子番頭は概ね女子なり、今前回の人口調査に於ける年齢十歳以上の男
 女職業別を表示すれば左の如し

一、英威の部

	男	女
高等職業	五九七、七三九	三二八、三九三
家 僮 婢	一四〇、七七三	一、七五九、五五五
商 業	一、三六四、三七七	三五、三五八
農 漁	一、二八四、九一九	五二、〇二六
工 業	五、四九五、四四六	一、八四〇、八九八
無 職 業	一、七〇八、七一三	七、四四五、六六〇
計	一〇、五九一、九六七	一一、四六一、八九〇

二、蘇格蘭の部

	男	女
高等職業	七五、五三二	三五、七八七
家 僮 婢	一三、一〇二	一九〇、〇五一
商 業	一七〇、六七六	一〇、二七六
農 漁	二一九、〇四二	三〇、〇八二
工 業	七四二、〇三六	二九〇、三六八
無 職 業	七二二、三二九	一、五二六、三六六
計	一、九四二、七一一	二、〇八二、九三〇

三、愛蘭の部

	男	女
高等職業	一三八、九七一	七五、二七二
家 僮 婢	三四、四九〇	二二〇、六五四
商 業	八一、〇一二	二、一六一
農 業	八四五、六九一	九一、〇六八
工 業	四〇四、一五五	二五二、二五五
不定及無職	八一四、六三四	一、七四四、三八七

家庭或は一身の状況に依り、職業に就くの前或は後に結婚をす、結婚は我々之を自由結婚と呼び來りたれども、無論放埒なる自由に非ず、我邦或る社會の實行する私約結婚とは更に異なれり、況いて私通に至りては如何なる下等社會と雖も、之を敢てせざるのみならず、普通民以上は之を夢想たもせざる所、何となれば當國の女子は、嘗て然る様の事を見聞せず、見聞するが如き機會を有せざればなり、日本にては不義は「御家の御法度」に限られたれど、此國にては不義は「社會の御法度」に極まつたればなり、兎角己れを以て人を推すの人情よりしてか、邦人動もすれば之を信せず、予を以て一概に皮相外觀に迷へりとなすものあり、誠に悲しむべく慚愧すべく、國民道徳の進歩の爲めに慨嘆すべきの限りなり、予固より短日月の旅行、敢て英國の社會の陰私を悉く探究したりと言はんや、而も直接に見聞し乃至幾多の先輩熟通者に就いて、益を請ふたる所に徴し、此點に關する英國女子の徳操は、或る不道徳なる日本男女の想像の外に在りと敢言するに躊躇せざるなり、或は一種の旅行者あり、英京に行き佛都に行き、在留の知人同僚に伴はれて、馬車を驅つて或る建築物を見物し、夜は國への土産にとて先づ或る場所に案内せしむ、而して數日にして去り、日本に歸來しては報じて曰く、西洋の俗表面は美なりと雖も、裏面の腐敗は甚しと

是れ豈に一夜十善寺に宿して、長崎の女子は悉く腐敗せりと稱するに異ならんや、而して自ら裏面を見たりと誇る、豈に酷ならずや、滑稽ならずや、倘しも十善寺が長崎の裏面ならば、天下恐らくは到る所に略ぼ同様の裏面あるべし、只大小甚不甚、要は程度の差あるのみ、而して此點に於ても英國は所謂公娼なるものを廢して最も成功したる國にて、然く其事が成功する程英國の男女は貞節なるなり、英國にても其本國の都市には一種の十善寺は存せりと聞く、而も其殖民地及び外國に於ては英人の私娼は一人もなしとぞ、佛國には比較的十善寺多しと稱せられ、佛國女子は外國に於ても猶之を行ふもの少からずと稱せられ、特に猶太人は此點に於ても亦人外を以て見らるゝ程あり、而も日本に比すれば、到底同日の談なるか否か、予は殆んど之れを明言するに忍びず

抑々予が今説かんとする所は、英國普通女子の事なり、貴族富豪より勞働者に至り、例外人倫外にあらざる人間なみの女子の事なり、而して人間なみの女子社會に於て、不義の法度が「御家」に限らるゝと、全社會を通ずるとの差は、以て日英婦徳の高下を比較説明するに足るべきを信す

結婚に先だつて許婚をす、許婚は我邦の結髪にして、其差は親々が幼少の時より之を約すると各本人が親々の承諾を得て、年頃になりて後之を約することに在り、許

婚の後更に親しく相交際して、愈々意氣の相合ふを確實にし、而して後結婚をす、許婚と結婚の間の距離は數月なるあり數年なるあり、或は此間に取消することあり、未婚の女子は特に兩親が信任するものに非れざば、男子と伴ひて外出することなし、中民以上の娘子一人外出することなきは日本に同じ

日本現今の風習にては結婚は父母之を約して各本人は之に盲從せしめらる、下等社會の私婚を別とし、英國にては父母の承諾を得て各本人之を約す、現行日本民法は略ぼ西洋の主義に則りたるものなれば、日本の父母は實際に於ても民法の精神を採用し、以て愛する子女をして健全なる結婚をなさしむること、子に對するの徳誼なれ、親の慈愛の全きものなれば、實に結婚の良否は直接家庭の良否を結果し、間接婦徳の清濁に影響するものなれば、結婚法の改良は、女子改良中の一重要件なり

(十九) 女子問題 (續)

早きは十五六歳、遅きは十七八歳に至れば髪を束ねて、ミスを稱し、交際社會に入る、女子は實に交際社會の中心にして、禮儀の淵藪たり、且つ往々にして名譽の源泉と思惟せらる、故に政治家も女子の愛重を得ざれば勢力を得ず、凡そ男子、女子に信せられざれば社會に信用なし

交際場裏に於けるミスの勢力はたゞならず、結婚後は更に倍奮す、故に人の紹介等の如きは、女子は男子よりも有力にして、且つ區域廣し

女子は非禮を語らず聞かず見ず、何人も女子の前に非禮を語るを得ず

女子少々酒を飲むけれども、喫煙は堅く之を忌む、故に男子は特許を得ざれば、女子の前にて喫煙するを得ず

中民以上は下婢と雖も、午前と午後は其服を易ふ、然れども只禮を要とするのみ、過分の奢侈をなすことなし

貧女も其下着類を清潔にす、中民以下は家婦家嬢、簡易の洗濯裁縫を自らすること、多く我邦に異ならず

家婦は勿論其名を以て交際往復し、其名を以て賓客を家に饗す

家婦不幸にして早く其夫に後るれば再婚するを不徳とせず、再婚せざるを奇怪とせず、只私通を嚴禁すること老少相同じ

女子は府縣會の撰擧權を得、郡會以下の選被選權を有す

社會に於ては女子は男子の先に立つ、家庭に於て上席し、會同に於て上席し、凡そ出入往來に於て、女子は主たり、男子は従たり、女子席を得ざれば男子之を與へ、女子途に當れば男子之を避け、女子重きを運べば男子之を助く

政治上に於ては猶男尊女卑なり、社會上、少くとも禮儀上に於ては既に女尊男卑、然れども女子苟くも男子を凌ぐこと無く、男子女子を憐むることなし。斯故に女子家に在りて酷虐に逢はず、外に在りて常に安泰、到る所社會に敬愛を受く、たとへば旅行する時なすの如き、日本にては女は道の邪魔物なれども、英國に限らず歐米にては、女は道中の王者にして、一人旅と雖も、毫も危険不自由を感ぜざるのみならず、之れに同伴する男子は、其威光に頼るを得、女子と同伴すれば何處にて

も、特に大切に取扱はるゝことなり。英國女子の性格地位、略ぼ前來の叙述の如し、故に適種生存の理法は、女子の超過を來せること左の如し。

男	子	一八、六〇八、三三七
女	子	一九、四九六、六三八
差引女子過		八八八、三〇一

又出産數男兒一千に對する女兒の割合は

英	威	一、〇三七
蘇		一、〇五一
愛		一、〇九三

是れは別して大なる差なり、然れども女子は比較的、夭折多きを以て、結局前表の差の如きに止まるに至るといふ。

斯くの如き地位性格ある女子を母とし、妻とするの國民は、其狀態如何なるべきか、子として身神健全ならざるを得んや、夫として有爲活潑ならざるを得んや、子は潜かに信せんと欲す、日本男子の意氣地なきは、男子其ものゝ詰らざるに因るや、勿論なりと雖も、女子の性格不良の罪、亦與つて多きに居らすんば、あらずと、若し予の言を疑は、讀者各自己、及び其知る所の人物に就き、幼にして母の愚愛に縛られ、長じて妻の愚情に縛られざるの男子、果して幾何あるかを數へ見よ、日本の女子は其夫が有爲活潑國家社會の爲めに盡力せんとするを、進んで助けざるまでも、せめて直接間接に邪魔とあらざるもの、能く幾何あるかを數へ見よ、恐らく思ひ半ばに過ぐるものあらん、實に日本今日の女子は、無希望無爲なる小世帯の細君、小世帯の母、小世帯の姑として、或は適當ならん、有爲有望なる國民の母妻たるべき資格なし、我邦殖民の成功せざる、對外事業の興起せざる、亦殆んど是れが爲めなり。佛國の女子は比較的野鄙なり、或は比較的、不徳なりと聞ゆ、米國の女子は比較的粗暴なり、然れども孰れも英國に對しての比較のみ、日本の女子に對しては、まだ一比較物となるべからざるあり、予は聊か兼てより、女子問題には留意したり、然れど

も思慮の粗漏なる之を道德問題、人情問題乃至體裁上の問題と看做し、世人の言ふが如くに女子の地位の高下は、以て其國の文野を卜するに足るとのみ思惟し居たり、而して今に及んで始めて知る、女子の地位性格如何は、直接乃至間接に、其國の貧富強弱を結果するものにて、即ち國家經濟上(汎義の)の問題、國力消長の重要問題なることを

嗚呼女子問題、女子問題は猶世界の問題なり、而して之を結局するに、日本女子の地位性格は、大に之を改良し、大に之を進歩せしめざるべからず。改良進歩の方策は如何、予は今にして之を男子に説く、迂にして効果少きを知る、何となれば凡る身勝手は人情の自然にして、他が身勝手をなさしむる間は、自ら之を止むること難ければなり、やすく買ふことを戒しむるよりは、やすく賣る者無くすること、捷徑にして且つ順序なればなり、故に予は目今の策、大に女子を鼓舞獎勵して、極言すれば、煽動して自ら其性格を高めしめ、自ら其地位を進めしむるの外なきを信す。

歐米の男子動もすれば言ふ、男子が女子を敬愛するは、女子を尊しとするには非ず、弱を憐れんで然るなりと、然れども是れ負け惜しみの言のみ、其實際は女子が自動的に其性格を高め、自ら運動して其地位を造りたるの跡は、歴然として現に尙其運

助中に在り、切言すれば、男性女性勢力競争の結果、今日の進歩を致したるものなり、若し身勝手を爲すの餘地と相手とにあらば、泰西の男子豈に敢て之を爲さざるの君子のみならんや。

(二十) 世界の公園たるの策如何

世人瑞西を世界の公園と稱し、日本人は自國を以て世界の公園たらんと望む、抑々瑞西は如何にして世界の公園たるを得るか、日本が世界の公園たらんとするの希望は、空想に非ざるか否か、聊か之を觀察せん。

大体に於て歐米人は能く働き能く遊ぶの民なり、而も其最も能く遊び最も能く金を撒くもの、英米人を然りとせず、故に世界の遊樂場は、英米人の嗜好需用に適するの地位に在らざるべからず、其趣味及び利便は、英米人の嗜好需用に適するの趣味及び利便を具へざるべからず、而して如何なる之を適當の地位となし、如何ある之を所謂趣味利便を具へたるものとなすか、土地の成るべく右兩國に近接せると、天然山水の美あると共に、交通往來宿泊の便利快適を具ふること、是れなり。蓋し英米人の夏季休暇をなすもの、長きは六ヶ月、次は三ヶ月、二月、一月、最も短きも一週間に下らず、而して此間自國の田舎に引込むもあれども、時間財政の許す

限り、外國に旅行するを通例とし、以て身心の快樂を取ると同時に、新知識の吸收、新事物の見聞に努め、以て學者は學術の研究をなし、以て文學者は文を養ひ、以て商人は商業経略の偵察をなす、故に旅行は快樂なると同時に、亦人間有益有要の行事となる、故に商店番頭等の自ら推薦する廣告の如き、善教育善經驗あるを自白すると共に、亦旅行済の文字を併記するものあるに至る。

斯くの如くにして英人一週間を得れば、以て佛都に遊び、二週間を得れば、以て瑞西に遊び、三ヶ月以て大陸諸國に遊び、六ヶ月世界周遊をなし、米人一ヶ月あれば、英に遊び、二ヶ月以て佛に遊び、六ヶ月以て世界周遊をなす、漫遊英米人の日本に来るもの、即ち這個六ヶ月の休暇を得たるもの、世界周遊の序でなり。

斯くの如くなれば、日本は其天然の地位に於て、世界の公園たるに適せず、且つ其氣候歐米人の避暑地たるに適せざるや論なし。

次に英米人の嗜好需要する趣味、利便に就いては如何、予旅程の都合に依りて、瑞西に遊ぶを得ざりしを遺憾とす、然れども其隣國にて聞きたる所は、郷國にて聞きたるよりも適切なり、其隣國にて蒐集査閱したる書類は、無論郷國にて見たるよりも多く、且つ新らし、因つて隣國にて得たる知識に依りて觀察するに、瑞西は頗る高地に在つて氣候寒冷、山多く、河湖多く、夏は青草綠樹に富みて、且つ山嶺に白雪あり、河

湖に船あり、水蒼々、山の峻にして起伏連延せる、谷の幽邃にして、屈曲通塞せる、柳宗元を地下に起して筆を執らしむるも、猶山冠り山偏の字の不足を訴ふべく、奇勝正景の富取て日本に劣らずといふ、是れ天然山水の美、英米遊子の嗜好に適するの趣味なり。

此趣味日本は之を有するか、予は思ひ切つて然りと云はん、實に天然山水の美は、日本は假令世界無比にあらざるまでも、其第一流たるには相違なし、趣味既に之を有す、然らば遊子が需要する利便は如何、瑞西は歐陸諸國の頭上に在り、日本も亦信州の山間にも比すべき所なれども、鐵路は各國より通じて、殆んど四通八達の衝に在り、而して其山水は人の有にして天の有に非ず、人工以て天工を奪ひ、否な天然の美を破壊せず、之を活かして人間に近づけ、之を山、神禽獸に奪ひて人間に献せり、故に數千呎の高山には其腹中に昇降器を設けて、座して山嶺に達するを得ること、猶淺草の凌雲閣に登るが如く、輕易なり、山の表面の登山鐵道、其數少らざるや論なく、河湖に華舫あり、汽力に依て船遊をなすべく、乃至釣るべく、泳ぐべく、漕ぐべし、交通宿泊の設備は固より申すまでもなく、各線聯合周遊切符は各國に於て發賣せられ、或はホテルの宿泊より通辯道案内までの費用を一切請負となしたるあり、儉ならんとせば、下宿料の割合にてホテルに宿し、下宿に寝て居る費用に鐵道割引賃銀を

足せば、以て此國に遊ぶを得べく、奢らんと欲せば一日百金一夜千金、遣ひみち無きに困ることなし、誠に便利至極にして、斯くの如くにして山水の美始めて人間に用あり、世界の公園たる名實始めて全し
然るに日本は此點に於て特に大に欠如せり

(二十一) 世界の公園たるの策如何 (續)

前述の如く日本は以て世界の公園たらんとするには、其地位及び設備の二者不合格なり、合格すべきは只天然山水の美の一のみ、然らば予輩日本人は全然此希望を抛棄すべきか、乃至はせめて及ぶだけの人工を加へて、及ぶだけの公園國たるべきか、以下進んで鄙見を述べん

第一、世界の公園たらんことは當分これを斷念すべし、世界文物の中心、他の意味にていへば多く金を遣ふ國民の住所が、東洋に移轉する迄の間は、謹んで之を斷念すべし、假令幾億萬の金を抛つても、實際出来ぬ相談なればなり、故に姑らく之を斷念して、東洋の公園を以て自ら任じ、且つ出来るだけの力を盡して、世界周遊客を引くに努むべし、蓋し當今の交通状態に於ても、米國人は二ヶ月以内に日本に來遊して歸るを得、然れども日本は彼等が態々來觀すべき程のものを有せざるなり、將來西伯

利亞鐵道が全通せば、歐羅巴人は三ヶ月以内にして支那日本に遊び、印度洋を経て歸るを得、猶バグダット鐵道成工して、印度より支那まで貫通するに至らば、彼等は二ヶ月内外にして支那日本に遊ぶを得ん、されば將來は來遊の洋客漸次増加するには相違なしと雖も、猶世界周遊か少くとも世界半周の覺悟をなすに非ざれば、歐米人は日本に遊ぶを得ざるなり、故に世界の公園とは到底成ることを得ざるなり、故に此儀は斷念すべし

然れども東洋の公園たるの事、日本實に形勝を獨占す、西伯利亞は寒し、されば同地方に在る散金人種は喜んで寒を日本に避くべし、韓國支那東京香港の夏は暑し、以て日本に暑を避くべし、以上は孰れも一ヶ月以内の休暇に於て、日本見物をなし得るの地なり、次に進んでは新嘉坡馬尼拉、亦一ヶ月餘にして來り暑を避け歸るを得べく、濠州諸島の歐米人亦日本に來るを便とす、故に東洋の中に於ては、日本は其地位中間に在りて、海上四通八達の要衝に在り、北西南の孰れよりするも、近く且つ便利なり、況んや其氣候も東洋に於ては最良にして、且つ比較的健康地なるに於てを(客)冬神戸の黒死病は其患死者少數なりしにも拘はらず、日本此病ありといふの事實は、世界の人民に一驚せしめて、我國民の爲に小ならざる汚辱不利益となりたり、但是れは全くの例外にして、日本に黒死病育たずとの原則は、何處々々までも押

通さる、様ありたきものなり、されば其地位及び氣候に於て、日本は東洋の公園たるに唯一無二の形勝なりとす

第二、天然山水の美は日本世界の第一流中に列すべきことは既に言へり、然れども猶足らざるものあり、花卉是れなり、成程櫻花は我國体と共に世界唯一無二にして、我れも誇り人も羨む所ながら、其花期餘りに短かく、其場所餘りに少くして、僅々二三週間に内の時期に東京か吉野の花候の間に合はされば來年までは見るを得ず、如何に自慢の美花にして、如何に外客が之を景慕するも、一便船後れば後の祭りとなるといふ仕體にては、如何にも甲斐所なきことなり、されば櫻花は其花期の短きは之を如何ともすべからずと雖も、歐米ならば冷室温室の仕掛に依りて、年中之を開花せしむることもあるべしと雖も、せめては其場所を多くして、大凡都會開港地の附近にては千株以上の花林を見るを得る様なしたきことなり、其他花艸の少きは誠に驚くべき程にて、歐米諸國には概ね四時花あれども、花園と稱する日本には只春夏秋有るのみにて且つ甚だ少し、西洋の公園には概ね植物園花園温室の設けあれども、日本の公園には只だ單純なる喬木かやくたいもなき雜木あるのみ、斯る有様にては美國といふも花園といふも、自分勝手の名稱にして、世界に通用せざる所なれば、せめては三都三港の公園には、内國花園及び植物園を設けて、日本の草

木を一場に觀、日本の花艸を四時に賞するを得せしめたきものなり、右人工を以て天然の美を補ふの策なり

第三、人工の設備、是は人工を以て天然美を活かすこと、利用すること、切言すれば天然美を「錢」になすの設備なり、而して日本は全く此設備を欠けり

日本が瑞西と衡を争ふの事は、其地位に於て不能なれば、随つて瑞西の如く之に人工を施さんは無益なり、經濟の價はざる所なり、されば此設備は結局するに、其投資が直接若しくは間接に報償せらるゝを得るの度に止めざるべからず、而して其度は如何、是れ一朝にして測定し得べからざる所なれば、予は今漫に之を豫定せず、只其設備の方針を論じ、以て後年漸々に實行せらるゝに至るを待たんとす、但し収支の價ふとは必ずしも即今の事のみに限らず、十年二十年の後にても相償ふの見込立たば、愛國の士は恐怖なく之を斷行すべきことなり、予の思考する設備方針大體は左の如し

世界周遊の歐米人が日本見物をなすの地域は、横濱長崎の間に在り、而して此間彼等は第一に日光を觀、或は鎌倉に遊びて又横濱に歸り、船にて神戸長崎に向ふもの多く、陸東海道を経るもの少し、或は其船にて通過するものは東京を觀るが精一杯にして直に歸船出發し、神戸長崎を経て上海、或は香港に向ふを常とす、其西より來

るものは只方角の反對なるのみ事情は同一なり故に彼等が日本の市街を見るは濱神崎の三港にして親しく日本の勝景を觀るは只一の瀬戸内のみあり故にインランドシーは獨り世界に名高く三港街の殺風景は偶々日本好きの外客をして失望せしむ故に彼等の爲めに直接に利益するは例の鑑船賣込商と波戸塲車夫と解船夫と外國向店なる高價價のみ高き店なり店の一部とに過ぎずされば大体は彼等をして成るべく陸地を通らしむべし其爲めには鐵路を勝景に通すべし第一は木曾街道是れなり此線毎度企てられて成らず軍事上は知らず本論の點に於ても最も惜しむべきに屬す此線にして成るを得ば客は東京を経て山道を縦貫し京都を経て神戸に達するを得而して其風景や蓋し日本最雄大の山谿の秀にして西人一たび之れを過ぎば其名は忽ち世界に揚り爲めに外客を誘ふの具となるべきや必せり而して客は横濱に見棄てし船に神戸に於て會するを得瀬戸内は既に鐵道あれども風景を觀るには海路を可とす鐵道の第二は耶馬溪なり是れ恐らくは天下の最巧緻最纖麗なる谿水の妙なり之に鐵路を通じて門司より上陸したるの客は直に之を賞して長崎に出で其乗船に合するを得せしめば蓋し佛國の機敏なる畫師は直に之をパノラマに製して巴里の市を闊ぐに至らん嘗て鐵道發起流行の際此鐵道亦發起されしに山水を傷ふと攻撃したるものあり誠に

當世不通の言なり文明の世は山水も風雅も開化せざるべからず若し否らず勉めて人間に遠ざからんか深山櫻と一般にして竹杖草鞋箠食して之を探るの閑人あるべからざるなり若し有りても國の爲めにはならず

斯くの如くにして新日本の三景は之を木曾瀬戸内耶馬溪に改むべし舊三景を日本風景の代表者と見られては誠に迷惑千萬の事なり

次は各都府古社寺寶物舊城樓の保存展覽必要にして特に申すも畏けれど離宮御用邸等の内別格の思召を以て内外人に公開せられんことを希望し奉る次は濱神崎三港に遊覽的設備をなすこと就中長崎は將來歐人が西伯利亞より支那印度にゆくの途次一寸立寄つて日本見物を是にて済ますの地となるべきや必然にして且つ東京よりも下の關よりも古く其名を西洋に知られ居る所なるを以て此設備最も必要なるべし次は富士登山鐵道にして抑々富士は世界の美山西人特に富士と櫻花を見んと望む既に其姿を見れば登て見たきは東西かはらぬ望蜀の人情なるに今日にては之に登らんこと頗る難きぞ遺憾なるさればせめては二三合目までなりとも座して登臨せらるゝ様致したきものなり

遊樂の地として日本を觀るの恐見大要前述の如し猶細目に亘りては他日改めて論評すべし

（二十二）米國の現在及び未來付日本勞働者の事

北米合衆國は其地最も日本に近く、之に遊びたるの日本人最も多く、通信往來頻繁なるを以て其國狀は邦人の最も知悉し居るべき所ながら、同國の前途が東洋に對するの關係は頗る重大なるものあり、我邦人の特に注意すべき所なれば、敢て愚見の概要を記すべし

亞米利加合衆國は四十餘個の獨立州の集合聯成せるものにて、憲法は民約政治は民主、元來各國移民の集合せるものたるのみならず、今尙移住集中中に在り、是を以て民に上下の隔てなく、人に新舊の別はあれども、畢竟五十歩百歩の差なり、是を以て人智あれば金を得勢力を得、金あれば更に勢力を得、勢力を得れば自ら大統領となり、其資格なければ自ら好む所の人物を大統領となすとも、固より勝手次第なり、されば一面より觀察すれば、此國は自由平等の名義の下に富豪壓制の嫌ひなきやを疑はるれども、さりとて撰擧は普通撰擧なるを以て、最大多數なる中民以下勞働者の勢力には抗するを得ず、結局多數の壓制に歸着するなり、少數に對する多數の壓制、黃金時代彌勒の世とならば卒さ知らず、今の人間にて自由平等と稱する事實の歸局は、到底此外に出づべからざるなり

故に此國は所謂民尊官卑にして、假りに雇主を主とし雇人を従としていへば、大統領は人民直接の公僕にして、内閣諸卿以下の官吏は人民の爲めには陪臣なり、それかあらぬか他國にて所謂下等社會は、此國にては威張つて仕方がなく、地主は小作人にいじめられ、議員は撰擧人にこき使はれ、凡そ事業家は往々にして勞働者に窘めらるゝの常なり

合衆國政府の政權は、立法行政司法の三部に分たる、大統領は行政の長官にして陸海軍を統べ、元老院の協贊を経て内閣諸卿以下の官吏を任免す、大統領の撰擧人は各州に於て其撰出の兩院議員と同數を撰出するものにて、兩院議員を兼ねることを得ず、被撰擧權は憲法採用以來の公民の子孫にして、十四ヶ年以上國內に住居したる、年齢滿三十歳以上の男子なり、外に一人の副統領あり、平時は元老院の議長たり、大統領欠員の場合に其殘任期を補缺す、資格撰擧法大統領に同じ

兩統領の任期は孰れも四ヶ年にして、年俸大統領は五萬弗、副統領は八千弗なり、本年は其改撰期に相當するを以て、來る十一月第一月曜日次の火曜日に其撰擧あるべく、新任統領の就職は明年三月四日なり

内閣は左の八卿を以て組織す、各卿年俸八千弗

一國務卿(外務卿)セクレタリー(オブネテト)

二 大蔵卿(セクレタリーオブジツレシユアリー)

三 陸軍卿(セクレタリーオブウオア)

四 海軍卿(セクレタリーオブジナビ)

五 内務卿(セクレタリーオブジインテリオル)

六 逓信總監(ポストマスターゼネラル)

七 検事總長(アットルネーゼネラル)

八 農務卿(セクレタリーオブアグリカルチュア)

立法部は元老代議の兩院より成る、元老議員は各州二人、各州立法部に於て撰擧す。資格は九年以來の公民にして、現に其州に住居する三十歳以上の男子、任期は六年。代議員は各州の人口に依り配當せられたる數前回即ち十年前の人口調査に際しては人口十七萬三千九百に付議員一人に當れり、當國は本年が調査の定期年なり。を各州各自の撰擧法にて撰擧す、資格は七ヶ年以上の公民にして其州に住居する二十五歳以上の男子、撰擧資格は各州異同あれども通例は二十一歳以上の男子、概ね一年以上住居したるを要し(長きは二年短きは三ヶ月の所あり)納税するもの、或は單に民籍登録を受けたるものとし、其他マサッチュセツツにては英文を讀み得るを要し、ミスシツビ及び南カロリナ亦教育上の條件を附し、ワイオミングにては

男子同様の條件を以て女子に撰擧權を與ふ、凡そ以上の條件を具すれば、人種の異同面の黑白一切之を問はずと雖も、獨り納税せざるの印甸人は多くの州に於て之を除けり、州外地は單に發言權を有して表決權を有せざる委員を代議院に出すを得、兩院は立法權の外に各其撰擧裁判權を有し、尙元老院は條約の批准、官吏任免の承認、彈劾高等裁判等の權利を有し、代議院は彈劾權を有す

各州亦各立法行政司法の三部を議し、立法部は同じく兩院より成り立ち、知事を行政長官となす、地方政治の詳細は煩を厭ひて記さず

政治の大要は前述の如くなるが、當國政界の腐敗は世界に有名なる所にして、行政も立法も司法も、黄金之を動かすを得と稱せらる、然れども是れまた歐州舊國に比較していへるに外ならずして、東洋の如く百金二百金に表決權を賣るが如き、乞丐政客なきは論なく、苟くも賄賂の爲めに大体の施政方針を害せざるは、其近年の政策が終始一貫せること、殆んど寡人政治の國にて、一の豪傑が政柄を掌握せるに異ならざるの事實に徴しても推知すべし、否な予は近年の米國を見て、合議政治に斯くの如き、窮的經略(所謂帝國主義)が能く行はるゝを驚くものなり

官吏の收賄には、賄賂を申出でたるのみにて刑法の罪あり、故に官吏の收賄は、評判の如く多きを得ず

但し當國政界の腐敗は制度上に於ても其原因少からず、議員に歳費あるが故に歳費と賄賂あてに議員となる貧乏政治家あること、官吏概ね大統領と共に更迭するが故に、其在職中に取り込み置かんとするの私情あるを免かれざること等、其著大なるものなり、是等は他日別に論せん

(二十三) 米國の現在及び未來、付日本勞働者の事(續)

人口は出産の外に夥しき輸入あるを以て、其増殖の割合は一ヶ年平均約三分に當り、千七百九十年に各色合計三百九十二萬九千二百十四なりしもの、前回の調査即ち千八百九十年には六千二百六十二萬二千二百五十となりたり、されば本年の調査には假に三割増とするも、八千餘萬とあり居るべきことなり
面積は布哇非立賓を別として、三百五十萬一千方哩、尙アラスカと印甸領地を除きて正味二百九十三萬九千方哩、一方哩の人口平均二十一、三右は全く例外ある古倫比亞區の一方哩三千八百三十九人、九十六方哩に二十三萬餘を合算したるにて、之を除きて最も密なるはロードアイランドの三百十八、最も粗なるはチバタの〇、四なり、一体に落機以東即ち太西洋方面は密にして、北太西洋地方百七、四、南太西洋地方三十三、北中央地方二十九、七、南中央地方十八、九なるに對し、山西即ち太平洋方

面は平均二、六に過ぎず、其最も密なるカリフォルニア州すら僅々七人、八にして我北海道の十二人に比し猶四人、二少あり、故に山西百十七萬五千五百五十方哩に對し、假に日本全國平均の密度(三百八十三人)に人口を配付するとすれば、其積三億三千二百六十八萬六百五十を容るべき割合にして、是より現在百七十六萬七千六百九十七を差引くも、猶三億三千萬許を補充するを得べきことなり、是れは後項に用事ある故茲に算出して、以て日本人及び米國人の注意を望み置かんとす
山西の餘地既に然り、況んや山東各部に於ても、人口の密度は猶日本に比して約十分の一内外に在るをや、米陸民を容るゝの量は實に無限無邊に非ずや
米は世界の農國ながら、其開墾されたる地所は極めて僅少の部分に過ぎず、最大部分は未墾の國有林野なるが、是は大別して第一種第二種とし、甲は平均價格一エーカー一弗二十五仙、乙は同上二弗半にて、甲は一人百六十一エーカー以内、乙は八十二エーカー以内、二十一歳以上の國民に拂ひ下ぐ、其他民有地の價格亦頗る低廉にして、且つ外國人にも之を賣るの州多し
千八百九十年の耕地は合計九億八千九百八十三萬エーカーにして、内改良畠三億五千七百六十一萬エーカー、無論所謂大農主義にて、畠地の廣きは一枚にして數哩に亘るあり、一枚千エーカー以上、四百町以上の畠三萬一千五百餘枚あるに對し、十

エトカート(四町)以下のものは十五萬枚なり、最も多きは一枚百エトカート以上五百エトカート以下の所にして、其數實に二百萬餘枚なりとす、されば日本にては米國の島一枚分を所有するものは、全國屈指の太地主なり。

全年農家の數四百七十六萬餘にして、内三百十四萬家は自分所有地、百六十二萬家は小作なりき、斯く地價低廉の國に在りて何故に小作をなすかといふに、一は官地拂下の資格なきものあるにも因れりと雖も、主としては未墾地を墾くには一時に資本を要し、既墾地小作は殆んど無資本にて着手し、其年より收益を得るを以てなり。

農産物の主なるは玉蜀黍小麦裸麥にして、千八百九十五年の産額合計三十四億四千二百六十八萬ブツセル(一ブツセル約二斗)内二百十五萬ブツセルは玉蜀黍なり、森林の富は更に無限にして、正確の統計は未だ成らざれども、其面積はアラスカを除き約五億萬エトカートと推測せられ、之に五億六千萬弗の資本を投じ、卅五萬の労働者を役して得たる總收益は拾參億五千萬弗と算せらる。

太平洋方面は右の面積の十分の一に過ぎざるに拘らず、十分の七は太西洋方面、一は落磯山、一は西部諸州の内部に在り、其木材の夥しきは驚くべく、或る場所にては全く無價なり、或る場所(開墾)をなすが如きにては所有者より伐採費を出して之を

伐採燒棄せしむ、嘗て二十年間繼續したる山火事あり、數年前に鎮火したりといふ、予は其邊に行き當らざるのみならず、六日間汽車にて走りても、さしたる大森林にゆき當らざりき、亦以て當國國土の大を想像すべきなり。

嗚呼斯の廣大無邊の國土、天産の富は無限なり、支那の人口を一時に移すも、敢て狹隘を感せざるのみならず、亦相應に營業過活せしむるに足るべし、然るに米人は少數を以て此國土と富源とを擁し、獨占しながら猶且つ何を苦しんで外國人の移住を拒斥するのみならず、敢て進んで海外に版圖を擴張せんとはするぞ、其等は漸次後項に説明せらるべし。

(二十四) 米國の現在及び未來付日本労働者の事(續)

鑛産の富亦莫大にして、鑛物は千八百九十五年の産出價額鐵一億五千萬弗、銀の七千二百萬、金の四千六百萬を始めとし、鉛、亞鉛、水銀、ニッケル、アルミ、アンチモニ、其他合計二億八千三百四萬八千弗、又鑛物は同年石炭一億千五百萬弗を始め石油、石材、鹽、礦水セメント、其他合計三億三千九百八十八萬餘弗なり。

若し夫れ製造工業に至りては、蓋し天下最盛の國なり、千八百九十年の總製出額無慮九十三億七千二百四十三萬弗にして、其十年前千八百八十年の五十三億弗に比

し殆んど二倍ならんとし、更に千八百七十年の三十三億弗に比しては約三倍の度に進歩せり、されど本年の調査にては、無論百幾十億弗となるべく、之に投じたる總資本額は、八十年の二十七億より、九十年の六十五億萬弗に進みたれば、是亦現今にては百億弗に近かるべし、右の内棉絲產出額三十五億磅なり、而して其製造所の一半は實に山東の胸腹たる新約克、ペンシルバニヤ、オハイオ、マサツチ、ユセツツ、イリノイズの五州に在り

工業斯くの如く盛んなるを以て、大は交通運輸農耕製造より、小は日常衣食住の事に至り、器械、理學を利用すること、天下此國に比ぶは無く、假りに所謂精神的の文明を西歐羅巴に在りとするれば、物質的の文明は此國に在り、歐人學理の研究を以て優れば、米國學術の利用を以て優る、故に大凡る新規の器械、人間生活上の便用は、米國之を歐に買はずして、歐人之を米に仰げり

商業は未だ割合に盛ならず、千八百九十六年の輸入は七億七千九百萬弗にして、輸出は八億六千三百萬弗、即ち合計十六億四千餘萬弗之を英國に比しては未だ半額にも及ばざるなり、然れども農業に次いで工業起り、工業盛んにして商業の起るは必然の順序なるのみならず、合衆國は人爲を以て此變遷を速かならしめんと熱心するの餘り、殆んど建國の趣旨にも反し、本世紀の始めより、最も明確に奉躰し來り

し所謂モンロー千八百十七年大統領上任の教義を、最も明確に拋棄してまで、其經營に努力し居ることなれば、其進歩や無論他の割合よりも速かなるべく、當國が農工國より一躍して、世界の商業國とならんは、蓋し遠からざるべきなり

予は今米國の現在に關して多く語るのいとまを有せず、されば前文政治實業の一斑を叙したるに止めて餘事を省略し、直に進んで其未來を觀察せんとす、而して當國の未來を説くには、先づ以て文明西漸の理實を辨せざるを得ず

(二十五) 米國の現在及び未來付日本勞働者の事(續)

抑々文明の中心は猶最低氣壓の如く、吸引力を有し、移動性を有す、而して現今の文明は、西歐に在り、北米に在り、大西洋の兩岸に在り、隨つて之を概括すれば、其中心は正に大西洋に在り、大西洋の世界に於ける、指輪に於ける金剛石に異ならずして、獨り光輝の燦然たるのみならず、之を包むの黄金は厚く、且つ大なり、之を距ること遠きに隨つて、獨り光輝なきのみならず、黄金細く薄くなり、太平洋印度洋の間に於て實に其の細と薄とを極む

斯くの如くにして、目今大西洋に停止せる文明の最低氣壓は、何れの方向に進行せんとするか、予は斷じて言はん、西方に向つて進行せんとすと

蓋し古來文明は東漸せずして西漸したるの蹟あり、而して現在西漸しつゝあり、將來大に西漸せんとす、印度、小亞細亞、埃及に發したる古代の文明は斯くの如くにして東歐羅巴に入り、東歐羅巴の文明は一變して西歐羅巴に入り、西歐羅巴の文明は再變して、近世文明となつて米陸に渡り、落機大山脈に遮ぎられて更に西歐羅巴に反射し、太西洋の兩岸は互に相反射するに隨つて漸次其光輝を強め、益々之を集積して、以て太西洋面に指輪の金剛石を現するには至りしなるが、抑も古今文明が地轉と共に東漸せずして、日月と共に西漸するは偶然なるか、造化の冥命か、乃至現實の理由あるに因るか、予は明に現實の理由に因るを認め、而して其理由を地勢、詳言すれば地球水陸の配合と、文明其者の實跡とに歸せんとす

地勢即ち水陸の配合とは何ぞといはん、幼兒も知るが如く、我地球は亞歐阿三洲陸相接觸し、米は亞と歐との中間に孤在して、前後各大洋を隔つ、故に亞歐阿は陸上交通に適し、米は獨り水上交通に適せり、而して「文明」は之を運搬すべきもの、所謂文明中心の移動とは運送搬去せらるゝの謂に外ならざれば、古今の文明は或る方法に依りて孰れも運搬せられたるものなるが、上古亞細亞、阿弗利加に發生したるの文明は、航海の業未だ開けず、多くも河湖内海貿易の時代に在りて、幸ひにも哲學、宗教、言語、文字等實跡輕量のものなりしを以て、駱駝、牛馬の背、獨木舟等に依りて運搬せ

られ、以て陸傳ひに西漸するを得たりしなり、支那文明が西漸するを得ざりしは、天山其他大山脈の障害の爲なり、然るに近世文明、就中十九世紀の文明は機械の文明にして、其實跡は即ち鐵、無論重量品なるを以て、駱駝の背にて東歸する能はず、恰も造船航海の大進歩に際し、遠慮なく海に浮びて亞米利加へとは西漸したり、而して猶ほ西漸せんとす

但し餘波と例外は必ずこれあり、歐の文明が南阿に南漸し、印度濠州に東漸せるが如き是れなり、而も猶ほ地の利に依るに非ざれば成功せず、地の利は東漸に不便にして西漸に便なり、日本に於ても昔時支那、印度の文明は東漸し來れり、然れども是れ餘波のみ、例外といふ程にもわらず、近世の初め、葡西兩國の文明が、支那、日本に東漸したるは例外にして、且つ地の利に於て無理なりき、故に成功するを得ざりしものにて、若し當時兩國の本國が米洲に在り、地の利に依つて西漸し來らば、豊臣の勇略、徳川の智と頑とを以てするも、結局日本は鎖國主義を維持する能はざりしなるべしと予は憶ふ、次に文化の頃よりして、露、英、佛等は頻りに來つて日本の國を開かんとせり、而も成功する能はざりき、東漸は不自然なればなり、而して遂に米人來りて始めて之を開くを得たり、西漸は是れ自然なればなり

自爾以來日本及び支那地方の文明は、東漸及び東漸し來れり、而して「紙の文明」書籍

新聞紙等は西漸して自然の地利に合するを得たりと雖も、鐵の文明は猶ほ不自然に東漸し來る、故に其進歩甚だ遅々たり、此點猶ほ聊か説明を要すべきか、蓋し文明の中心たる大西洋より東亞に來るに、無論東西兩線あり、西行即ち米を經ば近く、東行即ち蘇士を經ば遠し、然れども西行には米大陸あり、鐵道は亦れども運賃高く、其に於て輕量品は歐よりするものも米を經て東亞に達し、重量品は米よりするものも歐を經て、而も大西洋形船は概して蘇士を通過しがたき等の事情の爲めに、必ず英國にて積替の上、始めて東亞に達するを得、故に東亞の輸入文明は、徑路不自然の爲めに遲緩なり、運搬不便の爲めに遲緩なるなり、然らば之を如何にせば可ならんか、西伯利亞鐵道を以てすべきか、バグダット鐵道に依頼すべきか、未可、未可、依然不自然なり、以て紙の文明を運搬すべし、鐵の文明を運搬すべからざるなり、然らば遂に之を奈何せん、他なし、大西洋の水を決つて太平洋に通じ、大西洋形大流船、大西洋形とは多少喫水深きの外別に異なりたる製式あるには非ず、予は今假りに登簿一萬噸以上の大汽船を大西洋形と稱するのみを其まゝ、即ち荷積のまゝ、之を太平洋に持來すの一事あるのみ、南北亞米利加を切つて兩

斷となし、水路を開くの一事あるのみ、而して此事一たび成るに於ては米國山東諸州は論なく、西歐の機械は一直線に太平洋を指して進出し、現下大西洋上に集積停滯渦溜せる所謂十九世紀文明の最低氣壓は、大颶風となつて颯々颯々、東亞の陸に吹き附け、かん、大西洋の荒浪は、直に太平洋の荒浪となつて、日支の岸頭に打ち寄せなん

地球水陸の配合と、文明其者の實跡とに由りて、文明西漸の理實あるは前述の如し、而して此理實に基づき、颶風荒浪に順應せんとするもの、即ち米國の未來なり、米國の未來は直に東亞の未來なり、東亞の未來は殆んど世界の未來なり、予は切望す、我讀者が之を操觚者職業柄の縱論横議と看過せず、眞面目に此理勢を精思熟察せんことを

(二十六) 米國の現在及び未來付日本勞働者の事(續)

米人は固より予の如く、文明西漸などの理を附けてかゝりたるには非ざるべし、無論文明の移動に方なし、只天時地利に依るのみなればなり、而して其天時地利に依つて着眼講究し得たる所は、恰も前述の理法に合し、米人が太平洋の價值を認めて、是れに經營の方針を向け初めたるは數十年の昔に在り、歐人が之に着眼したるも

亦數十年の昔に在り、さてこそ佛のレセツプ氏はパナマ運河の土工を起し、米人はニカラガ運河の計畫をなすには至れるなりけれ
 而して米人が太平洋を利用して、爲さんとする所の事業の主なる目的は何處にあるかといふに、申す迄もなく支那大陸に在り、蓋し米國農工の富は前述の如し、而して農産物の顧客は主として歐羅巴に在るが、何さま是は食物なれば其需用に限りあり、或は限度より以上は工業の如くに有利ならず、次に米國工産物の顧客は歐洲よりも東洋に多し、何となれば歐洲には米國同等の工業國數多なればなり、故に米國は遙に顧客を東洋に増加せしめて、其販路を擴張せざれば、工業の進歩亦自ら或る限度に達せざるを得ず、而して其販路を擴張するの目的地は、世界廣しと雖も支那に如くはなく、前述の如く米陸の沃野は無限なりと雖も、其三百萬方哩を開拓するは、支那四億萬の人民を開拓するの遙に有利なるに如かず、四億萬人が悉く文明の事物を需用するに至らば、之を供給するもの、利益は誠に無限無窮なり、而して此人類の曠野を開拓し、即ち之を顧客となし、工産物の販路を擴張するには、勢ひ自ら商業を爲さざるを得ず、商業國とならざるを得ず、而して支那に對するの商業國たるには、天下米國より其地の利を得たるは無し、米人の着眼講究し得たる所は、誠に當に斯くの如くなるべし、是に於てか米人はモンロー主義を拋棄したり、覇的經

略を開始したり、而して此覇的經路は商業覇的經路なり、約して商的覇圖と呼ぶを得べし、商利を目的とすればなり、インペリアルイズムを帝國主義と直譯すれば、或は誤解を招くの虞あり、故に予は覇的經路乃至覇圖と譯するの便なるを思ふ、而して此商的覇圖の第一段として布哇を取れり、是れ實に東亞に渡る第一の踏石なり、次に第二の踏石は何處最も便利なるべき日本諸島は、古來の強國日本の有なり、次に便利なる臺灣島も亦日本の有に歸せり、此近海にて手の着けられうなもの、到底馬尼拉の外ならず、是に於てか戦争は却つてあらぬ方角の玖馬島に開始せられ、敵は本能寺の非立賓群島は結局米の有に歸したり、斯くの如くにして第一第二の踏石は豫期の如くに据ゑられたり、最早渡るの外ならず、商的襲撃を開始するの外ならず、然れども尙一個大なる障礙物の殘存せるあり、其主要なる工業地より東亞に直通する海路の開けざることを是れなり、是に於てか米人はニカラガ運河の計畫を急げり、其二度目に組織せられたる調査委員會調査の結果は、恰も予の豫米中昨年九月最も有望なる状態に於て報告せられたり、是に依つて造りたる政府の豫算計畫は、本期の議會に提出せられたり、嘗て英國との間に結びし運河中立の約款は、恰も英杜戦争の混雜に乗じて、協商の上取消されたり、而して該件議會を通過せば、急ぎ工事に着手するなるべく、工事は七ヶ年にして成るの豫定なりといふ、太平

洋電線の敷設も亦頃日決定せし由
 形勢事情前述の如くなれば、二十世紀世界の舞臺は太平洋にして、其舞臺の中心は支那に在り、米國が此舞臺に於て大立物たらんは疑ふべからず、斯くの如くにして米國は世界の商業國となり、海上王となり、雄を英國と争ふに至るべきなり、若しニカラガの工事失敗に歸するか、乃至開通するも思ふ程の大船を通ずるを得ざるあらんか、斯くても猶米國の覇圖は、非常の大蹉躓を來さざるべく、兎角する程には、現に農業坑業の時代に在る山西諸州亦工業時代となるべく、左なくも米人が金と膽とを以て其工業地を太平洋岸に移すは容易なり、結局太平洋上の商的覇權を握るを誤ることあるべからざるなり

以上觀測の中不中は之を後年の事實に驗するの外なきが、若し斯くの如き暴風警報が、信すべきものとせば、最低氣壓の進行路に當る我國民の覺悟は如何、此暴風は猛烈なれば門戸を網縵して豫防し得べきに非ず、且つ豫防するの必要なし、否な之を利用するの必要あり、米國丸が帆を揚げて走らば、日本丸亦帆を揚げて走らるのみ、若し日本にして鐵をだに有せば、支那の開拓に對する地の利が世界第一たるや論なし

(二十七) 米國の現在及び未來付日本勞働者の事(續)

以下日本勞働者の事に就いて述べん

日本人道徳心の低度に在ることは、平素之を思はざるには非ざりしと雖も、足一たび歐洲に入りて以來、更に意外を感ずるばかり、彼の高く我の低きを識認したるが、次に彼我國家國民貧富の差に至りて、嘗て郷國に於て統計の數字、乃至先輩の文章談話等に就いて見聞したる所よりは、更に最も適切に其差の甚しきを感得したり、抑々予輩日本人が國家の富強開明の爲めに、其資を外國に取るべきもの何ぞ限らん、而して其最大最要なるもの、形而上に於て道徳にして、形而下に於ては黄金是れなり、而して其形而上の事は別問題なれば、之を差措き、形而下に於て金を得るの方法如何を考ふるに、元來邦人の貧なる所以は、其働かざるに因ること勿論にして、而して其働かざる所以は、人口の多き割合に仕事の少きに在つて存すれば、之に働いて金を得せしむるの策、只仕事を増すか、人口を減するか、二者の一乃至は二を行ふの外あらず、而して予は仕事を増すの事を別問題に譲り、本項に於ては一に人口を減するの方途、換言すれば海外移民をなすの場所方法に就いて觀察したり、而して他は姑らく措き、予の經歷せし所にては、我邦の移民に適するの地、北米大陸

に如くものなし蓋し歐の大陸は人多く業少し故に各國の貧民労働者は英國に集
 合す然れども英國は米陸に比しては猶頗る人多く業少し故に英國の貧民労働者
 は他の各國の貧民と共ニ米陸に向つて流出す亞細亞亦人多く業少し故に亞細亞
 の貧民は亦米陸に向つて流出す故に北米大陸は世界貧民労働者の群至集注する
 所にして貧民の群至集注するは富源の絶大を證する所以なり
 實に米國富源の無窮前項詳述の通りにして其人口を吸収するの餘地廣大無邊な
 る亦讀者の知悉する所なり隨つて勞銀の高貴は實に世界第一にして無藝無能の
 労働者と雖も歐人一日二弗以上亞人一日一弗以上を得るを普通とし若し小作の
 農業をなせば殆んど空拳を以てして一ケ年數千弗を掴むこと難からざるは西遊
 日記に記載せし通りなりされば若し自然の限度即ち結局勞銀が他國と平均する
 の限度までに移民を輸入するを得ば誠に世界各國の大幸にして若し此天下が一
 天下ありせば自在に民を米陸に移し粟を歐亞に移して以て民口經濟を行ふを得
 べきことなれども天下は幾多の邦國に分たれ人為は自然を妨ぐるを以て可惜此
 沃野を雜草に委し他の諸國にては往々にして俄拳を出して能く救ふ無きの恨事
 を致せり

蓋し米人は其事業無論積極的にして敢て他人の國土を奪ひ民を奪ひて憚らざる

にも拘はらず其領内の經營は鎖國的にして概して外國人を優遇せず外國貧民の
 亂入を防ぐに努め移民法を設けて凡う海陸の要道に關門を据ゑて各國の劣等船
 客汽車客を嚴査し一定の條件(西遊日記參看)を具せざるものゝ入國を嚴禁するの
 みならず猶進んでは支那人に對し一切新來者の入國を禁止せり是れ國家の權能
 に於ては現今國際公法實行の狀況に照らし強ち不當と謂ふべからずと雖も抑々
 世界の人道に對しては寧ろ擅私横暴の沙汰と謂はざるを得ず而して事是に及び
 たる所以は一は當國に來集する外國人が歐洲に於けるが如く金を遣ひに來るに
 非ずして金を働きに來るもの多きに因り主として古參の労働者が其労働權を
 專賣的に保護せんが爲めに新參労働者を防ぐの私意に基づけり故に識者資本家
 は富源開發の大局の公益と事業興起の私利との爲めに労働者の輸入を欲すと雖
 も而も最大多數なる労働者の爲めに間接に政權を左右せらるゝを以て結局彼等
 の横暴に抵抗するを得ざることなり

(二十八) 米國の現在及び未來付日本労働者の事(續)

斯くの如くにして米人は少くとも外國労働者に對して鎖國主義を執れる間に在
 りて日本労働者は如何なる地位を占め如何なる待遇を受けつゝあるか蓋し當國

勞働者に大別二個の階級あり、第一は無論歐人にして、第二は即ち支那人、或る場合に直に亞細亞人と呼ばれるもの是れあり、而して日本人は孰れの階級に屬するかといふに、不幸支那人と同じく亞細亞人種たるに拘はらず、法律上には幸ひにして、支那以外の亞細亞人と共に、歐人同等の待遇を受けつゝあり、即ち歐人同様の條件を以て入國し就業し、定住入籍するを得、然れども社會上の待遇に至りては、支那人を距ること遠からず、否な殆んど同一からんとす、抑々米人が支那人を待遇するは既に法律上に於ても其入國を禁じたる程にて、社會上に於ては殆んど禽獸同様にいはんも過言に非ず、随つて日本人は禽獸を距ること遠からず、殆んど之れと同一ならんとするの地位に在るなり。

何を以て日本勞働者は斯くまで輕蔑侮辱せらるゝかといふに、其原因は大體に於て略ぼ支那人が輕蔑せらるゝと同一なり、即ち其第一は非常に賃銀の廉なるに在る、賃銀の廉なるは悪事かといはんは、流石の米人も決して然りと答ふることはざるべし、然れども其處が人情私擅の弱點にして、之を「職敵」となすの嫉惡は、感情と私利害の双方より來るを以て、其猛勢や當るべからず、此爲めにして一般勞働者が支那人を罵詈譏誘すれば、勞働者跋扈の國柄とて、局外の識者も止むを得ず之に雷同するか、假令雷同せざるまでも其爲す所に放任して、黙して止まざること能は

ず、況いで無識者は之を誤信し、乃至一種の愛國心にて、好んで之に雷同するなり、支那人入國禁止法の如き全く此事情より起れるにて、其動機は殆んど申談の如き所に發せり、即ち某地(名を逸せり)に於て或る事業を一米人が請負はんとなし居たるに、支那人例の廉賃を以て中途より出で、之を奪ひけるにぞ、當該米人の忿怒甚しく、直に部下の勞働者を煽して一大騷擾を起しければ、政界の野心家奇貨措くべしとなし、直に之を利用して支那人排斥問題を議會に提出し、一犬萬犬針小棒大に騒ぎたるの結果、終に通過して法律と成るには至れるなりけり、而して日本人の賃銀が低廉なること亦支那人と同一なれば、其此點に於て憎むること亦支那人と同一ならざるを得ず、右同様の事情に因りて日本勞働者が或る町村を放逐せられたるの例亦是あり、(米人は今日にても尙放逐等の事を敢てするの民なり)其第二は支那人最も賭博を好み、米人彼等を先天的博徒(パトザンギヤムブラリ)と呼ぶ、而して日本人亦賭博を好み、支那人不潔にして酒色を好み、日本人亦不潔にして酒色を好み、故に支那人の憎惡せらるゝ所以のもの、日本人亦殆んど之を具備せざるはなく、否な支那人は定業を有するもの多けれども、日本人は寧ろ無賴の徒多く、支那人中には金を白人に貸し附け、事業に白人を使役するものあれども、日本人には全くこれなく、支那人は奴僕使役人として、從順緻密勤勉なれども、日本人は傲慢疎放遊惰

にして、往々口舌を以て雇主に抵抗することあるのみならず、甚しきは腕力を以て抵抗することあり、是等の諸點は使役人として、日本人却つて支那人に劣るの所なり、故に西部地方に於ては、豚尾(ピッグテール)と綽號して支那人を輕賤する代りに、助平(蓋し其意味を知らず、單に汚辱のものと思へり)と呼んで日本人を侮蔑す。米國に於ける日本労働者の地位は略ぼ前述の如し、されば今日のまゝにて進み行かば、獨り彼等が得たる金を日本に送りて、直接に其家族をだに糶はすことの僅少或は殆んど皆無なるのみならず、米國に於て日本國日本人の名譽、體面、信用を汚損すること尠少に非ず、其結果は延いて日本商品の人氣を害するにも至るべく、特に遠からざる内に、日本人排斥の議論はものとなつて、結局法律上に於ても支那人同様の運命を見るなきを保せず。

(二十九) 米國の現在及び未來付日本労働者の事(續)

米國に於ける日本の労働者は、今のまゝにして放任せば、結局排斥の厄を見るに至らん、果して排斥せらるゝに至らば、其結果は如何なるべきか、或は轉じて移民の淨土を他に求むべきか、世界は廣し、五萬十萬の労働者は何れの所にも移すを得ん、否

や現今在米の邦人は僅々九千一百餘(内公用三十、留學三百餘、商用七百四十餘を含む)、然れども留學と商用の名義の下にも労働者あり、其他實際の労働者數は彼官廳に統計なく、我公館にも戸籍なければ之を知るの術あらず、只領事等の推算を尙控へ目に報告したるものなり、何とされば日本労働者の數大なるを知らば、之に對する反抗の氣焰益々高まるを以てなり、に過ぎざる位なれば、國家の經濟眼に於ては彼等の増減有無の爲めに毫も影響を感せざるのみならず、或る部分には却つて良好の結果を呈すべしと雖も、而も排斥せられたるが爲めに汚損する國の體面を奈何せん、尙這個多望の移民地を永く將來に失ふの不便を奈何せん、就ては之を結局するに、我労働者が當國に於て支那人同様の運命に逢はんことは、極力之を豫防せざるべからず、而して其豫防の策は如何といふに、現今の在留者を引揚げ乃至渡航を禁止するは、一時の權道としては捷徑なりと雖も、是れ到底法律を以て、或は其他の方法を以ても行ひ得べき所に非ず、されば姑息ながら一方に於ては、當分現行法の許す限りに於て、該國渡航労働者を撰擇制限し、之れと同時に他方に於ては、資力品位ある有志者が自ら渡航して實業に従事し、永住し、乃至直接間接に我労働者の品行を監督して、以て一方日本人は、亦自ら事業家として天産地富を開發し、以て米國に益する事もなし得るといふの事實を米人に知らしめ、他方労働者の惡風を一

洗し、生活素行を改良せしめて、以て米國人をして之れを支那勞働者と同視せざらしむるに努むるの外なし

果して斯くの如きを得ば、爲めに直接の利益を得べきと共に、其品位体面を進めたるの結果は、我邦生産物に聲價を附與して我貿易商工業に益する所莫大なるべし而して是等の施設をなすの事は、結局之れを朝野有力家の計畫努力に待たざるを得ず乃ち予は朝野の有力家に向つて、苟安遊逸乃至目前一私の小事小利に醒醒たるの弊習を打破して、國家國民前途の爲めに、海の内外を通じたる遠大の經營畫策に従事せんことを切望するものなり

附言す、日本人が殖民事業に成功せざるは、餘りに愛郷癖深きが爲なりとは、既に世人の言説せる所なるが、是は勿論事實にして、現に在米勞働者の如き、僅々數百金を貯へ得たるものは、家郷を戀ひて片ツ端から歸國し、後に残れるは遊蕩浪費是れ事として、未だ國への土産を得ざるが爲めに、歸去するを得ざるもの多きに居るといふも決して過言に非ず、甚だしきは歸國の船賃を得ざるが爲めに止むを得ず在留し、飢ゑては借り、貸す者なければ始めて働き、金を得れば又其れが在る間遊ぶといふ底のもの亦少からずといふ、誠に斯くの如き状態にては、世界如何なる極樂國に行きても、愛敬信用せらるべからざるは當然なれば、殖民不成功病の原因的療法と

しては、今の青少年幼童よりして、家郷外國に對するの觀念を一變せしめざるべからず、若し此觀念にして一變するを得んか、日本人は大陸の野に、歐米諸國の人民とならび棲んで、同等の權利体面を保持し、與に其地の國家組織の一分子たるに於て決して「ひけ」を取るべからざるの民あり、而して國家百年の大計よりいへば、結局其地位にまで進まざるべからず、一時出稼人の働き高に依りて、移民の利害損益を較するの間は誠に「目の子算用」の尙最小なるものにて、實は語るに足らざることなり

(三十) 實業の方針

我國家を富ますの策は結局するに前述の如く、業を増し人を減ずるの外ならず、而して人を減ずるの事は別問題とし、茲には業を増すの事を説かんに、其方法は、大別下の二途に出でず、第一製造輸出、第二貿易上設備是れなり

第一製造輸出に亦大別二個の部門あり、固有國産の製造輸出、新創國産の製造輸出、即ち是れなり、而して甲は歐米向輸出品にして、乙は主として亞細亞向輸出品とす、我邦歐米向商品の輸出先は、米合、衆國第一に居り、佛國第二、英國第三にして、即ち輸出總額貳億餘萬圓中

明治三十一年

米

四七、三一一、一五五圓

佛

二〇、四九六、四〇七

英

七七、八三六、四三三

明治三十二年

米

六三、九一九、二七〇

英

一一、二七〇、七七〇

佛

二九、二四七、八三七

(第四獨國參百七拾九萬圓第五伊國參百五拾八萬圓にして他は皆其以下なり)

なるが其重ある品目元價額は、一昨三十一一年輸出

生

四四、七〇三、三四一圓

羽

一二、〇五五、五〇五

茶

八、二一五、六六五

絹

三、五五五、一一五

布

の數種にして、其他は概ね百萬圓以下の雜品のみなり、而して右諸品が前記三國に入りたる額は

生 絲

羽 二 重

米

二五、三四一、四〇一圓

四、〇一五、五〇四圓

米

一四、一四〇、三三八

三、五四二、九六九

英

三一、五八一、一五

一、〇三九、一七六

茶

絹 手 巾

米

六三、五〇七、二二五

一、五一九、〇三三

佛

.....

四、一五、八三三

英

二七、五五三

七、四〇、八九三

右は一應順序上日本の側よりして其輸出先を大觀したるものなり、而して進んで米佛英の三國に於る其需用の狀況を視るに、各品の販路は其餘地綽々たるものあり、即ち英國一ヶ年の絹類の輸入額は壹億六千萬圓、茶の輸入額は壹億餘萬圓(一八九六年)にして、數年前後したる統計を以て比するも、日本品は猶絹類に於て百分の一、茶に於て百分の三弱を占むるに過ぎず、其餘は殆んど總て競争の餘地なり、佛人は珈琲を用ゐる多しと雖も茶を用ゐること亦少からず、若し夫れ米國に至りては日本茶の最大需要地なりと雖も、猶一ヶ年輸入額一千萬弗中(昨年支那茶十分の五を保ち、日本茶四半を保つに過ぎず、全く餘地なきに非ざるなり、特に絹布に至りて

は、歐米諸國之を珍重すること實に豫想の外にして、其之を着るものゝ少きこと、日本に於て金剛石入りの指輪させるものゝ少きが如し、而して是れ何の故ぞといふに、全く重税の爲めなるが、抑々各國の税金は大躰に於て猶漸次増加して止まざるべしと雖も、奢侈の進歩は増税よりも速かにして且つ大なるものなれば、絹の需要は現今の文明が破壊乃至は一大變を來すまでの間は、只増進すべきのみ、減退することあるべからず、随つて人造絹絲等の如き、如何なる良品が發明されるも、到底正絹に影響する能はざるべし、何となれば絹は便利經濟の爲めに非ず、専ら奢侈の爲めに需要せらるゝものなればなり。

其他雜品に就いていはんに、日本古器物は各文明國に賞翫せられ、特に佛國の如きに於ては日本人以上の鑑識を有する數奇者少からず、苟くも高價の各器にしむらば、佛英米の孰れに於ても、希望者澤山なりと雖も、是は近年日本に於て却て高價を生じたれば、さしたる輸入あらずといふ、是れ誠に喜ぶべきことにて、古器物を商品として外國に鬻ぐは或る程度より上るべからず、何となれば古物は新造すべからざればなり、然れども漆器の如きは、いはば我國の名産にして現に製造し得べきものなれば、是は翫弄用としては今日の所謂外國向よりも、古風の蒔繪類を製すること可なるべく、實用品としては歐米家庭現實の用品例へば手箱椅子小卓等の如き

もの、成るべく上等品を製造輸出せば、上流社會の嗜好に投じて、漸次日本漆器なるものを實用界に進入せしむるを得べしと思ふ。

陶磁器は主として支那産歐羅巴産にして、日本産は頗る稀少、其實用に供せらるゝものに至て殆んど皆無なり、是れ支那産歐羅巴産に比して、粗悪高價なるのみならず、概ね用途を知らずして製造したるものなるに因る、翫具雜品は更に粗悪にして高價なり、故に其需用頗る少く、若し有るものは、獨逸其他の模造品に壓倒せらる。斯くの如くにして西洋旅行中、特に注意して目撃する所の商品を始め家庭の日用品を吟味するに、日本産に出逢ふこと容易にこれなく、茶などは所々に廣告を見ることあれども、口に日本産茶を呑むと稀れなり（無論歐米風の日本茶を指す）米穀食品はブツディングに用ゐらるれど、日本産米にはあらず、日本産米のライスカレーなどは全く出逢ひたることなし。

之を要するに實際に於て實用的に日本産物が需要し居らるゝは、米國に於ける茶と絹とらゝぬに過ぎず、其れすら容易に行き當らざる程にて、況いて歐洲にては殆んど一も實用的地位を得たるものなしといふも過言に非ず、即ち餘地の綽々たる所以にして、若し一品にても現今の諸國產品の地位を取つて代るを得ば、其需要額は廣大無邊なり。

而して既に多少の販路あるものは之を擴張し、其無きものは之を開拓し、所謂取つて代はるの策如何といふに、何よりの急務は各種製造業者の實地視察にして、而して其視察は販路の状況を視ると共に、更に轉じて供給地の状況を視ること最も必要なり、即ち茶業家は米歐の茶の呑み方を調査すると共に、支那印度の製茶法を調査し、英米の絹の需要を査すると共に佛以の製絹業を査し、米歐日用の陶磁器を視ては支那の陶磁器業を學ぶべく、斯の如くにして需要地を視察しては、より良品を賣るの術を講じ、供給地を調査しては、より廉價に製出するの工夫をなすの外ならず、而して其結局は、日本人が手を以て製する者は成るべく之を一個幾何、多くも一打幾何といふ如き高價品に止め、十打以上一函乃至は一擔等を以て價を定むる物品は、大産物は勿論雜品玩具に至るまで、成るべく之を大仕掛の器械に托し、即ち粗製濫造を廢して多製廉造せざる可らず、而して此方針を實行せざれば、邦人生活の度の進むと共に、言ひ換ふれば文運の進歩と共に日本の産品は、漸々益々劣敗の地に陥いるの外なしと雖も、苟くも此方針にして實行されんか、販路の餘地は無限り、前途は春海よりも洋々たらんとす、何となれば日本の製造輸出品は、未だ世界の大市場に名を出すをも得ざる程、極微極幼稚の度に在ればなり。

米英商業の状況に就ては予は聊か志す所あり、特に立入つて調査したるものあり

しも、豫記の如く一切書類焼失せし爲め、今其詳を語るを得ざるを遺憾とす、然れども右の結論だけは、大體に於て差謬なきを信す、何となれば是を滯米の際に於て、既に決定し居たる鄙見なればなり。

(三十一) 實業の方針 (續)

次に新創國産の製造輸出とは、泰西の器物を製造して、之を亞細亞諸國に輸出するの事は、是れなり。

抑々貿易は兩者を利益すとは、經濟學者の格言にして、近くは日本開國以後の事實も、其言の誤まらざるを證明したり、然れども其文明人と野蠻人と貿易をなすに於て、其利益の分量は双方均一なるかといふに、事實は決して然ること能はず、一時一期の損得交代は之を措き、平均通算したる上に於て、文明人が多く利益し、野蠻人が少く利益する差あるは、誠に止むを得ざる所なり、されば我邦が開國以來、主として歐米文明國と貿易をなしたるは、勿論時期状況の止むを得ざるものありしに因りたることにて、其間自ら利益したるには相違なしと雖も、而も高きものを低く賣り、低きものを高く買ひたるの事實あるを免かれず、故に時期と状況の許す限りは、先進國との貿易よりも、後進國との貿易をなすを主とせざるべからず、特に況んや其

天然の地理に於て後進諸國は多く我に隣接せるに於てをや、然るに我國文物の程度は、殆んど西洋先進國に比肩せんとするを得るに至り、随つて對歐米貿易上に於て殆んど均等の利益を得んとすると同時に、更に對亞細亞の貿易は頗る長足の進歩をあして、昨年の輸出入總額は一億八千九百萬圓に上りて、歐の一億二千萬圓米の一億八百萬圓を遙に凌駕し、特に之を十年前即ち明治二十二年に對比し、増加の割合は、歐の十割四分、米の二十二割四分に比し、四十割五分の高度を示せるを見る、誠に喜ぶべきの現象にして、我邦貿易の健全なる發達の順序趨勢に在るを證するものなれば、我邦は此際に於て、前述固有國產の輸出に於て對歐貿易の増進を圖ると共に、特に大に對亞貿易の範圍を擴張し、新創國產即ち歐米物品を製造して、之を亞細亞に輸出せざるべからず、日本苟くも之を爲すか、對亞貿易の地の利は無論世界第一なり、勞銀は競争國中の最低なり、但し方今にては一人づゝの勞銀は無論日本廉なりと雖も、歐米一人を要する所に、十人二十人以上を要するが故に、結局生産費の計額は、日本却て不廉となるもの多し、されば歐米同様に大仕掛の器械を採用するを要するや論なし、勞少くして功多く、座らにして最優最勝の地歩を占むるを得べきは、數理の最も明瞭なる所なり、然らば則ち前章に説きたる、米合衆國の商的範圍は、偶々以て日本の爲めに、其商戰場を開拓し、洒掃するものに外ならざるの結

果を呈すへし、否な日本は米國と共に支那の開拓に盡力し、商戰場に優勝の陣地を占領して、以て英獨の商工と鹿を逐はざるべからざるとなり、然るに茲に日本が有する一大缺點とは他に非ず、鐵を産せざること即ち是れにして、十九世紀の文明は鐵なり、二十世紀の文明も亦鐵ならんとするに際し、自ら産鐵を有せずして文明の商工國たらんとするは、道理に於て頗る難事に屬し、即ち歐米より遠路生鐵(重き)を輸入して、之れを製鐵となし支那に輸出するは、歐米より直接に製鐵(輕き)を支那に輸出するに如かざる筈の計算なれば、我新創國產の製造には、其鐵を用ゐるの分量に於て、自然の制限を受けざるべからず、但し英米にても生鐵の輸入額は猶少からざることあれば、我邦にても其狀況の同一限度までは生鐵を他に仰ぐを得べし、されば我邦産鐵を得るに至るまでの間は、止むを得ず成るべく鐵を用ゐざるもの、乃至之を用ゐる分量重量の少き物品を製造せざるべからず、換言すれば歐米より日本に至る運賃が、原料を以てすれば製造品よりも廉なるか、乃至同等までの物品を撰擇し、其不廉なるもの、製造を避けざるべからず、若其品目の詳に至つては、一品毎に別毀の調査をなすを要し、無論立談の能く辨ずるを得る所に非ず、乃ち之を他日に譲り、今は只大体の方針に就いて鄙見を陳じ置くのみ

(三十二) 實業の方針 (續)

第二貿易上の設備とは主として港灣を是れ謂ふなり、抑々日本實業の方針としては、前述新舊國產の製造輸出をなすと同時に、更に他の利を利用して、米亞兩陸及南洋間の取次貿易に従事せざるべからず、而して此二者の孰れをなすも貿易上の設備を要するは勿論にして、就中其最も主要にして且つ要急なるを貿易港灣の設備とす。

蓋し日本は東洋の一大貿易國たるに拘はらず、其貿易額が全國を擧げて未だ香港二港にだも如かざるが如く、港灣の設備も亦田舎の一小港たる香港にだも如くもの二もこれ無し、去程に凡る船舶の碇繋貨物の輸出入に不便利益少らざるや論なく、特に取次貿易に至つては殆んど皆無といふも過言に非ず、此天然の形勝を占有しながら猶取次貿易の振はざるは、一は金融機關の不完全なるにも因れり、雖も而も主として港灣無きが爲めなり、日本に港灣なしといへば人其極端なるを咎む、予亦日本の國內に於ては此言或は極端なるを知る、然れども世界の「港灣」ある意義にていへば、日本には一も港灣といふべきものなし、日本の港灣は香港にも如かず、孟買に如かず、古倫母にも如かず、或る點の設備のみに就いていへば、「中隊の

兵は以て其國を轉覆するに足りける布哇にすらも如かざるなり、若し其例を擧げよとならば、日本第一の貿易港たらざるべからざる横濱港には、一個五噸の重量品を陸揚するの設備なし、五千哩の太平洋を無事に輸送され來りたる貨物は、横濱港より陸揚する間に於て、破損し濡損し沈没するなり、故に日本行貨物の海上保険料は、陸揚の危険の爲めに高貴となるなり、現に日本第二の貿易港たる神戸港には、波濤を防ぐの設備なし、倉庫を建つべき海岸には、倉庫を建てず別莊を築けり、日本第一の貿易港にして、且つ歴史上の最有名港たる長崎港には、倉庫も無ければ、棧橋もなし、香港より長崎に至ると、長崎港より鐵道停車場に至ると、其運賃は同額なりといふ、斯くの如くにして貿易の盛大ならんを望む、豈に石上に禾穀の豐熟せんを望むと異ならんや、國內に對する輸出入は止むを得ずして斯る港灣に於て行はると雖も、而も障礙を受くること、尠少に非ず、何となれば、陸揚船積の不便、多費の爲めに輸出入品ともに高價となるを免かれざればなり、況んや取次品に於て、貨主は如何に日本の某港に集積場を置かんとするも、之を爲すこと能はざるに於てをや、況んや自國と諸外國との貿易には、年々自國人が直輸出入を増加すと雖も、猶外國人の手に依るもの大多數を占むるのみならず、進んで外國品の取次貿易を營むもの、日本人には殆んど皆無なるに於てをや。

之を要するに我邦實業立國の方針の爲には、大に貿易上の設備を整ふること要急にして、而して其中に就き、港灣の設備は更に最も急なるものなり

然らば之を爲すこと如何先づ以て三大國港を設定し、各大設備を整ふるに在り、茲に國港と稱するは必ずしも國庫費の支辨に限るを要せず、其地方の民力の耐へざるより以上、乃至私人の事業に適せざるより以上の事業の國庫の力を以て之を経理し、國家自ら其大体を經營するを謂ふ、抑々凡そ貿易港の設備を、國家が爲すべきか地方が爲べきかの理窟は、今之を問ふの要なし、只今日の時代時期に於ては、差向き三大港灣を國家直接の經營となすの必要あり、然るに生憎や一方政治界の狀態は、立憲政治尙は甚だ幼稚にして、議員眼中國家なく地方あり、甚だしきは單に私利あるの時期に際し、無論尋常の手段にては、斯る政策を實施するに能はざるべければ、政府苟くも此方針を定めば、戦後の軍備擴張に劣らざるの熱心を以て、之を斷行せざるべからず、苟くも此決斷をなさば、事の實際は必ずしも非常の大金を抛つを要せず、意外に廉價にて成功するを得ん、其方法左の如し

所謂三大國港となすべきの他は、第一に神戸若くは大坂の一、第二に横濱、第三に長崎即ち是れなり、而して此諸港は既に一應の修築を終へたるもあり、現に修築中のものもあることなれば、政府は之を國庫に移して更に修築の規模を擴張するか、若

し到底其經理を國庫に移す能はずんば、更に其補助を増加して、地方の負擔も亦増加せしめ、以て修築の規模を擴張し、設備を完全ならしめざるべからず、而して此三港を完成せしむるまでの間は、既往決定の分を除き、新に他の諸貿易港に對して、補助等をなすことを防止し、力を三港に集めざるべからず、門司口之津以下の諸港、固より必要なるに相違なしと雖も、國家の貿易政策よりいへば、之を補助するを急務とせず、其他近年設けたる法律上の貿易港中には、全く有名無實のものあり、今更之を廢するに當らざるべしと雖も、自今虚飾的の貿易港は決して製造すべからず、不完全なるもの、多數は完全なるもの、少數に如かさればなり

(三十三) 實業方針 (續)

神戸若くは大坂は中日本の外國貿易と、米亞兩大陸間の取次貿易の二途を兼ねべき要港なり、蓋し方今兩大陸間の定航線路は、桑港、加奈陀の二線ありて、孰れも香港を終點とし、其北清、浦潮等に至るの貨物は、香港に於て取次がる、然れども、西伯利亞及び滿州鐵道の完通以後は、米陸大連間、米陸浦潮間の定航も回始さるべく、加奈陀太平洋鐵道會社は既に浦潮に代理店を設くるの計畫中なりと聞く、況いてニカラガの開通に及ばば、是等諸線の盛大となるべきは勿論なりとす、されば此地にして

若し相應の設備をなさば、香港行船の北清行貨物、浦潮行船の南清行貨物取次ぎ得るの額は、頗る莫大なるを疑ふべからず、則ち此地は取次のみにも優に一大貿易港を設置するに足るなり、然るを況んや現今に於ても、神戸港は日本互市場の第一位を占め、其貿易權の領域は中日本を立脚點として、東は横濱を歴して東日本に及び、西は長崎を歴して西日本に及ぶの盛況なるに於てをや、故に國家の眼中には、此地を貿易港の第一位に置き、最大規模最完全の設備を整へざるべからず、然るに予の單に此地と稱する一針頭點の地内に於て、二個の競争者對立しあり、神戸大阪即ち是れあり、抑々大阪神戸の距離は、海陸共に十里に過ぎず、而して海に礁灘の險あるに非ず、陸に山岳谿谷の阻あるに非ずして、猶其域内に競争するは、左眼と右眼が競争するよりも恐なるは、苟くも虚心平氣にして之を思はば、神阪の商人自身に於ても、無論疾くより承知なるべし、抑々國家の公事は、只大局を觀すべきのみ、區々たる情實固より之に拘はるを許さざること勿論なれば、政府は斷じて其一を取り、他を捨てざるべからず、而して兩地地位の優劣は別に相違する所なければ、要は技術家の選擇に任せ、其港灣築造上の優者を採用するに在り、然るに大阪は既に修築工事中なれば、政府は更に精査の上、果して大商港を造るに適するや否やを判じ、若し必適ならば之を採用して更に其規模を擴張し、是と同時に正に修築の計

畫中に在る神戸港を拋棄し、若し大坂が不適ならば、潔く之を拋棄して、之を大坂人のみならず、若し陸軍が特に輸送港を要すとならば、是は別段の問題として別に研究せん、貿易港には神戸を採用して、大に修築整備すべし、次に横濱港は主として東日本の外國貿易の爲に必要なり、港の擴張は漸次にするも可なりと雖も、設備は急に整ふるを要す、近者同稅關擴張の計畫あり、折角規模を大にしたきものなり、別に東京築港の議あれども、國家の貿易の爲めには不用の事なり、故に東京の市民府民が之を爲すは隨意なりと雖も、國家は當分之を補助するの必要を認めず、三大國港の第三は長崎なり、此地、主として支那海、日本海の取次貿易の爲めに之を設け、西日本の貿易は神戸門司等と之を分つに至るべし、然れども、其主たる取次貿易に至りては、無論横濱等の企て及ぶべき所に非ざるのならず、設備次第にては神戸と雖も優るを得ざるなり、蓋し長崎の地位北は西伯利亞、韓國、北清より、南は南清、印度、澳洲に至るの中樞に當るを以て、南清、北清、南洋、北亞、諸國諸港間の取次貿易に屈竟なるのみならず、更に東は神戸、横濱に連れるを以て、少くとも歐洲、神戸間、上海、神戸間、香港、米陸間、諸線路船舶の北清、浦沙行貨物を取次するの便あり、現今にても海外航路の出入數は、一港を以て優に神濱二大港に越ゆるの有様なれば、此地苟くも港灣の設備あり、商業の規模大なるに於ては、取次貿易の一點に

於ては、獨り日本に冠たるを得るのみならず、其對岸なる上海と雄を支那海に争はんと甚だ難きに非ざるべきなり

然るに此港既に修築の工を起して、目下、其中途に在るが規模甚だ壯ならず、特に浚埋築後の附屬設備に至りて、未だ殆んど豫定せられたる者あり、若し野蠻時代の港灣ならば、所謂山繞りて水深さのみにて、も足ぬべしと雖も、文明時代の港灣は浚埋築をなしたるのみにて、實用に應ずべきものに非ず、されば此地を三大國港中の第一取次貿易港となし、以て上海と對抗せしめんとするには、現工事中の浚埋限度も、之を擴充増加するの必要あるべく、其他必要の設備の爲めに、既定の工費僅々參百拾萬圓の外に更に參四百萬圓乃至は五六百萬圓を投じて、都合大約壹千萬圓位を費すを吝しむべからず、但し這個の金額は敢て一時に之を要せざるのみならず、其幾分は之を私人の事業に移して、自ら收支相償ひ且つ營利するを得せしむべきものなれば、別に驚き恐るべき程の費途に非るなり

以上三港、横濱は東日本の貿易港、米陸よりの第一着港、歐洲東洋航船の終點港として、神戸若くは大坂の一は中日本の貿易港兼取次貿易港として、長崎は西來船の第一着港、南北亞細亞の中繼港、主なる取次貿易港兼西日本の貿易港として、國家重要の開港たり、國力を以ても其設備を完成せしめざるべからざるなり

而して其設備の大体に就いて、予の望む所は巧運細麗に非ずして、粗大拙速に在り、横濱の如き詰らぬ鐵の棧橋(果して實用をなせるや否やを知らず)を一個造るよりも、木製棧橋十個を造るを可とす、其他近頃發布されたる税關假置場法の如き、尙之を擴充改良して、如何なる大商品も輕便自在に貯藏するを得しめ、三港岸、必要の場所は是等の倉庫荷揚場等の爲めには、其事業主の官私如何に拘はらず、一定の條件の下に土地收用法に依るを許す等、何ぞを設備完成の爲めには、事實に於ても法令に於ても、勉めて之に便宜を與へ、障礙を排除せざるべからざるなり

尙三港の設備事項に就いては、各港に就きて特に調査の上更に鄙見を開陳し、敢て教を識者に請ふの日をらんを期す

三十四 實業の方針 (續)

付歐米商店事情一斑

左は嘗て長崎實業青年會に於て談話したるもの、要領なり、固より卑近單純にして何の参考にもなるまじけれど筆の序でゆへ茲に附記す

凡う歐米商店の事情は夙に我にも知れ渡りたるべき所なるが、委しく言へば其國々に依りて相違あり、同國內にても都鄙に依りて相違あり、同都内に於ても場所に

依身相違あることなれども、之を要するに大體は各國大同小異なれば予は今其一例として倫敦商店の状況を説き、其他諸國の事は單に其目立つたる相違の點のみと言及するに止めんとす。倫敦都内に商店街あり、非商店街あり、商店街に小賣店街、卸賣店街等其他種々の區別あり、固より一定の區畫ある譯に非ざれども、土地の便否の關係に依り類似業者は自ら同地方に集合するなり、先づ主なる小賣店街の状況を説かんに、店頭の裝飾は多分西遊日記にもありたらんと思ふが、如何にも廣大美麗にして特に見本の陳列方は、其爲めに専門の技術家ある位に其體裁を得んことに注意せり、さて内に入れば男子或は女子の賣子がズラリと整列して居り、先づエスサ、エスマダムなど聲をかけて客に接し、賣買終れば其物品は大小如何に拘はらず奇麗に包みて緊束し、或は之を客の手に渡し、或は直に使を馳せ乃至配達會社に托して送達す、賣子は客に傳票を附與すれば客はそれを以て會計にゆき金を拂ふといふが通例にして、其仕事の敏捷にして取扱ひの鄭重懇切なる、如何にも心地よし、商店の地下層は倉庫にして人道の下まで擴がり居り、人道の中或は家の壁の邊等に其出入口を設く、巴里には地下層なし、米國にはこれあり、特に桑港の如きは其利用盛んにして地下に一大商店料理店等を開けるもの少からず、二階三階以上までを店舗となして商品を陳列したるもあり、或は二階以上には何々の事務

所、例へば諸會社領事館、辯護士醫師等の事務所を設けたるあり、米國に於ては特に此事務所集合の事盛んにして、甚しきは十餘層より二十餘層の高樓に至り、各層各室を合せ數百の事務所を集めたるものなり、
卸賣店貿易商店諸器械店等は各相應の地の利に依つて河岸倉庫地近傍等に集合せること何處も同じ習ひなり、
而して凡る商人たるものは、都内に數多の商業學校書記學校徒弟學校等ありて、これに入りて相應の教育を受け、卒業後全く無給乃至は一週間五志、乃至十志の手當を受けて見習丁稚等となり、數年經驗熟練の後始めて一身を養ふに足るか足らずの俸給を受け、其後は技倆と忍耐とに依りて何萬磅の年俸を取る大番頭支配人ともなるあり、經驗と信用とは何れの道にも必要あれど商人には特に必要なり、商人注意の緻密なるは勿論にして一事一物も忽せにせず、極言すれば世界の萬事を殆んど悉く自己の商賣に利用せんとするやの概あり、子燐寸に就き一寸取調べたるに其多くは其箱に他商人の廣告を貼付して廣告料を得、以て製造原價にて販賣しても利益を得る様の仕掛となし居るを以て、他の廣告料收入なき燐寸は到底之と競争すること能はざるを發見したり、廣告に熱心にして且つ機敏なるは勿論にして、乗合馬車の切符の裏は物かは、地下鐵道停車場の梯子の段にすら麗々しく

之をなしたるあり(末廣氏の陞の旅行にピアス石鹼の廣告を停車場名と誤まりたる由記載しありしが、今も同石鹼の廣告は到處に美しく掲げあり、亦恒久にして間斷なきを見る)

貿易に至りては無論世界第一の商業地たるだけに其規模廣大なり、然れども其執行は頗る簡便容易なり、今輸入品に就いて一例を説かんに、輸入商は某國より某品を輸入すれば其着荷するや否や之を船渠に陸揚す、船渠會社には必ず多數の倉庫ありて、其倉庫は有税品に對して保税倉庫なり、さて之に倉入して見本を携へ、コーオペラチブ會所に至る、此會所の制度は近年頗る發達して多くの取引は此處に行はる、固より日本の商人の如く各現品を檢査して、後に取引するが如き迂をなすことなく、固より見本と受渡品とを相違せしむるが如き奸策を敢てするものなし、價格も決して掛引を用ゐず、賣るものは賣り、買ふものは買ひ、一磅は一ギニアは一ギニアと双方明白に打出すを以て早速賣買は取組まる、故に一口何百萬磅の取引をなすとも、事は瞬間に結着して毫も面倒あることなし、斯くて取引成立すれば買主は更に之を卸商小賣商等に賣り付け、入用の時々倉庫より引出し、有税品ならば關稅を納む、而して其物品は倉庫の後に接續したる鐵道に依りて自在に各地に輸送するなり、故に大凡そ商賣は見本品に始まり見本品に終り、直接現品を吟味す

るは單に小賣店より需要者の手に移るとき一回に止まる、故に如何なる大取引も立談の間に結了するを得るあり、然るに日本の商品は未だ見本取引を行ふるに足るの信用を得ず、爲めに商業の進歩發達を害すること少らざれば、今更の事ならねど、日本の商人に信用を重んずるの習慣を養はしむるは最も必要なり、凡う商店は新に之を起すものあり、或は他人の商店を得意付きにて買ひ受くるものあり、英國の如き保守性の國に在りては、何事も古きを好むの常なれば、新規開業よりも舊株買受けの方便にして、隨つて何町何々商店幾年前の開業にして、現今利益一ヶ年幾何のもの其まゝ譲り渡したし、或は何町邊にて何々の商店譲受けたりし等の廣告は毎日の新聞に現出して、毎日若干の店株賣買行はれつゝあるなり、米國は新規開業のことゝて新規開業多く、且つ其事頗る容易なり、例へば茲に一人あり、小賣商店を開かんとすれば先づ家を借りて營業の免許を受け、其免許狀を以て卸商店に申込みば、卸商店は早速其注文だけの商品を送達し、毎週乃至毎月等の勘定となすなり、新規開業各國流氓の集合地たるに拘はらず、其商人間の信用の厚さは誠に敬服の至りなり云々

(三十五) 科學の普及

國家の富強文明を望むには、智識を全國民に普及せしむること必要にして、就中科學的智識を普及せしむること特に必要なるや論なし

而して此事に於て歐米諸國は一般教育の普及と共に、頗る高度の地位に在るが抑々其普及をして是に至らしむるの方法は、小學の教育は主として其基礎をかせるに相違なしと雖も、更に直接に有力なるものは、通俗科學書出版の盛んなること即ち是れなり

蓋し大凡歐米人は其小學に入りたると入らざるを問はず、少しく勉強すれば字を解し、既に字を解すれば通俗の言語もて記述せられたる書を讀むこと容易なり、故に例へば「各家の器械」「各家の料理」「各家の衛生」「各家の治病乃至製劑」「汝自身の辯護士」「汝自身の教師」云々と題する、社會百般學術の通俗書は、盛んに著作出版せられ、盛んに購讀咀嚼せられ、依つて一般人民は概して科學の大體を解して、以て専門家の談話を聞くを得、以て日常生活の實際に應用するを得、而して其淺薄ながら享有し得る人民個々の智識の集合せるもの、即ち國民知度の高上となり、以て直接間接に國家の文明富強を形成乃至裨補するを得るなり

然るに新文明國の日本に於て科學の思想普及せず、國民知度の低きこと甚だしきは、將に後章に述べんとする文字の困難なること其最大原因なりと雖も、更に他に

存する主なる原因は、之を適當の通俗科學書無きに歸せざるを得ず

無論日本にても多少の通俗科學書はこれあり、幾種の百科全書的著作はこれあり、然れども其實用をなすこと大ならざるは、眞に實地に不適當なればなり、蓋し日本の科學書は其原無論翻譯にして、甚だしきは明治初年の翻譯物を複寫し、又複寫して目先のみ新規を装へるものすら少からず、或は大學の書生乃至は卒業生等が其聽聞せし講義録を抜萃變造して、以て一書とあしたるものあり、是れも原本は主として西書にして、動もすれば教師も分らぬなりに之を教へ、生徒は分らぬなりに之を習ひて、分らぬなりに書となし出版す、即ち讀者賢なりと雖も、之を解得する能はざるは當然なり、抑々翻譯は翻譯なり、之を氣候風土禽獸草木の種類を異にする外國に移して、其まゝ之を應用せんとす、實地に適合せざること多きや勿論なり、況んや其翻譯をば三十年も踏襲して、單に十度も二十度も焼直しをなしたるのものに至りてをや、萬一實地に適合せば寧ろ偶中と謂ふの外なし

此故に我々日本人は日本の植物書に依りて、自家庭園の雜草の名を知る能はず、日本の建築學書を讀みて日本の家を建つること能はず、日本の動物書に依りて日本の虫を知ること能はず、之を要するに日本の科學書は、日本の實際、日本人生活の狀態と懸隔すること甚しきが爲めに、之を實地に應用し其利便を受くること能はず

るなり

夫れ既に實用に適せず、其書の賣れざる、其學の普及せざる、誠に止むを得ざるなり。故に今日本問題に對する我國の必要は、眞實専門の學者が其實力に依り翻譯を離れて、我邦の實際に適當せる通俗科學書を著作出版するに在り。専門の學術に關しては東京帝國大學の如き、往々有價の新發見新意見を公表すと當局者辯疏す、然れども其専門の學術を、専門家以外一般國民に普及せしむるの點に於て、方今我邦學者の義務は欠如せり、換言すれば我邦の學者は大家自ら手を下して、名義を貸すにわらず、責任ある日本科學書を編成し、之を直接に一般國民に貢獻するの義務を欠けり。

(三十六) 新聞紙及び文字の事

天下新聞紙幾千萬、日本に居て之を集むる事なし得べからざるには非ざれども、無論頗る困難なり、いでや職業柄せめてもの家土産には、手の届く限り集めて見んとて、香港以西經る所の地の新聞紙は論なく、賣捌所にて見當る他地方のものまで之を集めしに、英佛の間にて既に一廉の荷物とぞなりける、然るに歐米陸上の旅行は手荷物の制限窮窟にして、到底之を携ふる能はざればと、いと惜しながら田舎の新

聞紙を拋棄し、單に都會のものゝみを携へて渡米したるに、彼地にて又大に増加し、又々運びがたきに至りしを以て、止むを得ず再び之を淘汰し、結局各國都會に於ける重立ちたるものゝみとなして、さて日本に携へ歸りしに、過般の新報社罹災の爲めに倫頓出版、世界の新聞雜誌なる大部の案内書とゝもに全く烏有に歸し畢んぬ、されば今數字に依るの説明をなすこと能はざれば、漠然ながら只目撃の状況を略記せんに、予の經たる諸國中最も新聞業の盛んにして其數多く、最も讀者の普及せるは英米の二國にして、價は各國共に廉なり、例へば巴里の二頁巾四頁即ち八頁倫頓の八頁乃至十二頁までの新聞紙は、甲は四十冊、乙は一片にして即ち約我四錢に相當するに、日本にては六頁乃至十頁の新聞が貳錢或は貳錢五厘なり、故に金の値打を一と五との割合とすれば、我の貳錢は彼の拾錢に當ることゝなり、彼の四錢に對しては我は八厘に引下げざるべからざることゝなる、故に歐米の如く新聞紙の讀者を各家各人に普及せしめんに、我は一方に廣告料の收入を増加し、一方に印刷の費用を減じて、大に新聞紙代價を引下げざるべからざるなり。新聞紙の發行紙數は割合に多からず、其實際百萬に上るは世界に指を屈するにも足らざるべく、大都の新聞にて十萬内外より以上を多しとし、地方の新聞紙は無論其以下多く、更に村落の新聞に至りて數千以下のもの多かるべし、蓋し各國地方分

權の制度は、地方到處に政治上の中心(無論日本の地方政治上の中心より大にして有力なる)存するのみならず、商工業上技術學問上の中心亦所々に散在し、是れと同時に電報電話の十分に普及して料金の頗る廉なるあり、随つて新聞紙の分權十分に行はれ、柔港の住民は其地の新聞に依りて新約克同様の記事を見るを得、愛蘭の住民は其地方の新聞に依りて倫敦同様の報道を受くるを得、更に之を擴張しては倫敦の出來事は歐米の兩洲より、遙に喜望峯殖民地の小新聞に至るまで、之を同日に掲載せらるゝを得るといふ有様なるを以て、地方人民は郵税をかけて一兩日の後に着する大都の新聞紙を遙々取り寄するの必要なし、若し取り寄するも極めて少數なり、乃ち新聞紙の數は非常に多しと雖も、其各新聞の發行紙數は、比較的に平均分配せられて少數となるなり、而して此新聞紙の地方分權なるもの、亦購讀の普及に與つて力あるや論なし

顧みるに我帝國が世界の競争場裏に文明強國と馳驅角逐するに於て、物界に於て必界に於て其及ばざるもの數四にして足らず、否な直言すれば萬事萬物殆んど悉く劣敗の地に在り、而して其及ばざるものを補ひ足らざるを加へて、以て對等優勝の地位に達せしめんとするには、結局するに國民の知識を普及上進せしむるより急務なるはなく、知識の普及上進を圖るには、大に知識流通の途を開くより急務な

るはなく、知識流通の途を開くは、新聞雜誌書籍等の出版發賣購讀を便にするの外策あらず、而して出版發賣購讀を便にするの策、國字改良の唯一あるのみ

蓋し凡う出版物を普及せしむるには、其方法に於て二個の大なる要件あり、其出版物の代價を低廉にする事、其出版物をして何人にも讀み得べく、解し得べきものたらしむること即ち是れなり、而して此の二要件を一舉にして充たし得べきもの證する所、國字の簡易國文の平易を措いて他に在らず

申す迄もなく、歐米諸國は其使用する文字の數僅少なり、故に出版業に器械を應用するの範圍廣大にして、其最も手工的なる「撰字植字」を人力に依つておすの式に於ても、一職工の面前に都ての文字を配備し置き、一職工は座をからしめて撰字植字をなすを得、之に器械を應用するものに至りて、最も簡單且つ廉價なるタイプライターと雖も、新式のものは一原紙にして即座に數千枚を複製するを得、印刷業に賞用するラインタイプは、文章一行づゝのタイプを其まゝに拈出し來る、然るに日本の活版印刷の状態は讀者承知の通りにして、文字の種類は少なくとも六千以上を要し、之を配備するに數坪の場所を要し、之を撰字するに數人の職工を要し、之を植字するに亦別段の職工を要し、到底タイプライターなりラインタイプを應用すること能はず、彼の一人を要する所に我は十人以上を要し、彼の壹圓を要する所に我は

拾圓以上を要す、則ち今の國字(漢字)を以て歐米人と競争するは、器械上計算に於て一馬力を以て十馬力以上に當るの難あり

次に教化の上に於て彼は文字の數少く、言文殆んど一致なるを以て、書を讀み之を解すること極めて易きに、我は文字の數多く言文の差甚しきを以て、書を讀み之を解すること頗る難く、我は一人を教ふるが爲めに、彼の十人以上を教ふる時間費用を費さざるを得ざるの失あり、日本劣敗に甘んせんとならば、則ち止まん、苟くも對立優勝を志す、否か對立優勝を必期せざるべからざるに於て、國字(及び國文)の改良は、實に要中の至要、急中の至急務なり

西遊日記以來我と歐米との優劣に就き、反寫若くば直寫したるの事實は、思ふに度量眼識ある讀者の承認せし所なるべし、而して其道德に於て、教育に於て、政治に於て、風俗に於て、實業に於て、富力に於て、彼の優りて我の劣れるを自認し、之を救ひて地位形勢を一變せしむるの策固より多端なりと雖も、何を申すも國民が或る程度までの知識を共有通有するに至らざる限りは、千計萬策施すに由なし、則ち國字改良は結局するに帝國の富強文明を圖るに於て、千計萬策の依つて行はるべき道路たり、第一豫備の要件たるを認めざるを得ず

抑々國字改良は先輩之を唱ふることに久しく、予亦其流を汲むの一人なりしが、此行

に於て特に大に其緊切急要なるを感得し、歸來其方法に就き熟慮中、幸ひ其論朝野に喧しきに際したれば、更に力を得て傾心考査の結果、頃日に至り漸くにして一の私案を決定するを得たり、固より乳臭書生の愚案、世論に影響する所あらざるべしと雖も、其等は元來予の頓着する所に非ず、近日清記彫刻の上之を新報に發表し、教を識者に請はんとす

讀者諸君博識多聞、十年歐に學びたるものあるべく、十回米に遊びたるものあるべし、今予一季半歳の旅行敢て諸君に益すといはんや、只操觚者の本分に於て、此

行の必要を感じたるが爲めのみ
是は是れ去歲三月廿五日の曉、西遊の途に上るに際し、謹んで別を讀者に告げたる辭の冒頭なり、而して予は斯くの如くにして行き歸り、斯くの如くにして且つ報道したり、西遊日記以來約百七八十日の紙上、百行内外づつを費したる文字、敢て讀者に益すといはんや、只操觚者の本分に於て、此記事の必要を感じたるが爲めのみ、若夫自ら益したる所は、故らに言はず語らざるの間に於て、物に觸れ事に接する毎に、之を將來の新報に貢獻するを得んを庶幾す

明治卅三年五月四日西遊後記は茲に終る

(三十七) 英國の教育に就て

左は長崎縣有志教育會總集會に於て演説したるもの、要旨なり

題は「英國の教育に就て」にて「就て」といふ曖昧なる文字に随分雜駁な、随分詰らぬ事をいふといふ餘地をかくして居る故、諸君其れ積りにて天窓から五算を刎ねて度を低くめて聞取りを願ふ

世に物質的文明精神的文明などの語があるから、先づ劈頭に於て英國なり其他歐米諸國と日本との文明の差如何といふことをいはんに、申す迄もなく彼先だち我後れて居り、其差は中々近くない、頗る遠い、洋行者が予に對して是はお互ひだけのこと、未洋行者にははさされぬがどうも日本もあれではいかぬ、丸で比較にもされぬことだと言つた人が幾らもあるが、彼人々は何故「お互ひだけ」と申して之を未洋行者にいふを憚るか、といふに、是は生意氣と呼ばれ心酔と嘗られ西洋崇拜と罵らるゝを恐るゝので、即ち政略の爲め情實の爲め其實を吐かぬのであるが、政略と情實とは予の事に非るを以て予は遠慮なく實を吐かんに、どうして中々耻かしい腹立しい程遠つて居る、今や對等條約を締結實行して我も文明國の仲間入りをしたとて威張つて居ることであるが、此對等となつて威張るといふのは、朝鮮國か日

本乃至歐米の諸強國と對等條約を結んで居るのを威張るのと、やゝともすれば相似ては居ないか、よくよく考へて見れば尻ころばゆくて座にもたせらぬといふ位である、而して其相違我と彼の物質上の文明の粗達を極めて簡略に擧げて見れば

- 一、日本には彼等文明國の意義にて、家といふべきの家殆んど一軒もない、日本の家は先假屋とでもいはねばならぬ
- 一、日本には道路がない、彼等にいはすれば之を土といふ、泥といふ、彼等の印度洋から來る者は段々田舎を見慣れて來るから左様迄もないが、サンフランシスコから直に横濱に來る者は、先づ横濱を見て喫驚する、是は決して横濱である筈ではない、横濱近在の田舎であらうと斯ういふ、次に進んで東京にいつてからどういふか、まだ目が日本に慣れないから其道路のないのに喫驚する、而して是れが日本帝國首府の道路であると聞いては之を惡道路といふ筈のところ、直にパッドアドミニストレーション惡行政と申して、以て日本全體の狀態を幸せんとする誠に失敬なことであるが、併し決して虚言でない、殘念ながら事實である
- 一、日本には港がない、船が港内に碇を以て泊つて居るといふのは彼地にてはど

んな田舎にいつても殆んど見るを感ない、其れに日本ではよい港は船が港内に散らがつて居る

一、日本では都會にゆけば電信電話電燈の柱が澤山立つて居る、西洋にては田舎にゆけば其れが立つて居る、都會には殆んど無い

一、米國の小都會なるサンフランシスコのゴールドンゲートパークは面積一千十
二、エーカーなり、日本の最大都會ある東京の上野公園は百三十八エーカーなり

一、日本にては上等社會が麥酒を呑む、西洋にては下等社會が之を呑む

一、日本にては上等の靴が鳴る、西洋にては下等の靴が鳴る

一、此帽子(黒の山高)は日本にては上等社會が被る、西洋にては下等社會が被る、否々彼地貧民の帽は予の此帽の倍以上高價なるもの多きなり

といふ様な譯にて、比較をすれば我の上等が彼の下等にならぶかならばないといふ位の有様、次に所謂精神上の文明は如何といふに他は姑らく措き英國に就いていふならば、同國精神上的の文明は残念ながら遙に高い、精神上の文明は何であるか、道德であるか、禮儀であるか、信義であるか、節操であるか、是等のものは悉く驚くべき高度に發達して居る、同國にては忠恕の道も、智仁勇も、知育德育体育も十分に行

はれ、禮儀三百威儀三千も、琴瑟和樂も、男女別わりと申すことも、武士に二言なしと申すことも、勤勉貯蓄も、忠信孝悌も凡それ互ひが額面にでもして朝夕の規箴となさうといふ所の金言格言は、其根本主義の別異なるものを除き殆んど悉く實際に行はれて居る、而して其が敢て廉立たず所謂無爲にして化するを申すが如く、至極圓滑に行はれて居る、而して其結果として行ひの宜しくないものは、社會に棲息することが出来ぬので、我と英國民とは此點に於て最も著しき相違がありませぬかと思はれる、即ち日本にては多少曲らねば世が渡られぬと人かいふ、彼國にては眞直になければ社會に立たれぬ、ナニ日本にでも正直で立れぬことはない、我々未だ處世上の經驗のない若い者は力んで居るが、世故にたけたる老輩はどうして修身學の教科書では實際の世間は渡られぬと私語く、予は其孰れか當れるを知らずと雖も、兎に角彼國民の道德は頗る高いといはざるを得ず、我邦東洋の君子國たるには相違ないか、而も西洋の君子國に對してまだ、どうも耻ざるを得ずと思ふ、獨り忠君の一事に至りては我は世界古今にわたりて專賣特許權を得て居るに相違ないが、其れすら、其精神を姑く措き、禮儀に於ては頗る慚愧せざるを得ず、即ち彼國民は全國を擧げ、男女と老弱とを問はず、少くとも毎日曜には必ず寺院に參集して國王の壽、王族の幸福、内閣の幸福及び議會開會中は議會の安寧を祈禱して

居る、其れに對してお互ひは精神は兎に角、禮式に於ては何を祈つて居るか、先づ天照皇太神宮を拜し奉りて何を祈るか、やゝもすれば何はさておき一身の私利、家内安全、息災、延命、願望成就、商賣繁昌など申すことを祈りはせぬか、よく考へて見れば誠に相濟まぬ、恐れ多い次第である。

尙英國の富強といふ點に付て一言せんか、冗長を避くる爲めに只一言せんに同國には世界各國から金を借りに來る、本春日本が借りたときも露國と南米アルゼンチンかと金借りの鉢合はせをした位である、近年實業の最も盛なる北米合衆國の資本も英國から出て居るのが多い、兵に於ても同國は矢張り強い、全く他人の地所を踏まずに世界一周が出来るといふ程の廣漠なる領地を保護した上に猶進んで取る進んで戦ふの餘力がある。

之を要するに東洋は何一つとして西洋に叶つて居らぬ、就中英國は富強に於て物質上精神上の文明に於て矢張世界の第一といはねばならぬ。

以上予は盛んに他の優れるを稱して我れの劣れるを自白したり、是に於てか諸君少くも諸君の中には必ず怒るの人あらん、而して必ず嘗つて言はん、彼れ井口は只文明の皮相のみを見て歸れり、彼は西洋崇拜者、心醉者、眩惑者なりと、或は切齒腕扼して予を論駁せんとする人あらん、だから前述の洋行者がお互ひだけと限るので

予も一年前に斯る談話を聞かば必ず怒りしに相違なし、否な有りやうが彼地の狀況を目撃しては怒り心頭より起つたのである、否な歸朝後の今日まで矢張り怒つて居るのである、否な日本が世界一流國の第一等と相成るまでは、生涯怒つて居る積りである、無氣力遲鈍なる予既に斯くの如し、況んや諸君に於てをや、何卒諸君怒り王へ、大に怒つて貰ひたい。

さて怒つて何をするか、諸君お互ひの怒りはいふ迄もなく、文王の怒りでなければならぬ、既に文王の怒りをなす、舜何人ぞ我れ何んぞ、英も國なり我れも國あり、力めて及ばざることのあるべきや。

予は實に斯く決心したり、そこで必ずしも人真似をするのでないが、只英國に追ひ付き追ひ越さんと發願しては、先づ以て英國の富強文明の原因を調べねばならぬ、そこで調べた、而して其の原因は多々これあり、決して一二にして足らざるが中にも、教育と宗教と新聞の三者、就中教育が其主たる勢力であるといふことを認めただ、是は勿論予の私言に非ず、現に文明の競争者たる佛國の學者エドモンドラン氏の如き英の富強を羨んで、其原因を教育の方針宜しきを得たるに歸し爲めに「アンピアンラスウベリオリテザングロサクソン」なる一書を著はしたる位である。

是に至つて予は諸君こゝ疾くに詳しく御承知の事なる彼國教育の狀態を概説せざるを得ず

抑も英國は御承知の通り其領地殖民地を除き本國自身が四ヶ獨立國の合同より成れるにて、其れも一度に合同せるに非ず四國三回に合同し始めて所謂大不列顛英の本島にして英威蘇の三國より成る(及び愛蘭の合衆王國をなせるものたり、現に威士に於て總人口の百分の二十二、六、蘇格蘭に於て同百分の一、〇九、愛蘭に於て同コンマの八一、此合計人口四十八萬四千餘といふものは英語を話す能はずといふ程の國柄なるを以て、法律制度各別異あり、概ね三區英威を合して一區とす)三様に行はるゝなり、随つて凡そ事物の複雑は此國の大名物にして、教育令の如き亦固より一轍ならず、各區各様の差異あるなり

而して之を各區別に依つて詳言するは此席の許さざる所なるを以て單に大体に就いていはんに大体に於て同國の教育は亦之を大別して(軍事教育を除き)初等教育中等教育高等教育及び専門教育の四種となすを得べく、其の設立は公立私立の二種の中、公立は近年實施の強迫教育法に依りて市區町村が小學校を立つるの外には其數少く、私立には亦一箇人立釀金立、會社立、寄附金立、宗教立等數種あり、初等教育は前掲強迫教育法に依り全國七歳以上十四歳以下の童男童女に、無月謝

にて、必ず就學せしむるの仕組にて、其學校數生徒數は一昨年の調査が

	學校數	設備數	在籍生徒	平均出席
英 威	一九、九五八	六、二一五、一九九	五、五〇七、〇三九	四、四八八、五四三
蘇	三、〇八六	八四三、七六九	七一六、八九三	六〇五、三八九
愛	八、六三一	五二一、一四一

右に對し昨千八百九十八年に支出されたる國庫補助金が總額一千五十一萬四千五百四磅、之に寄附金地方稅等を合せ全國々民教育費收入總額は但一昨年實に一千三百八十七萬二千五百十二磅なりき

中等教育は英威に於ては全く統一が出来て居らず、其他に於ても矢張雜駁であり其一齊の統計を造るには頗る手數がかゝり、其各別々のものを擧ぐるは更に煩冗を増すのみなれば茲には略し、只其雜駁なる諸中學校の總數のみを擧ぐれば

英 威	六、二〇九	內公立	七六
蘇	八三	同	三一
愛	三六七

右中、男校あり女校あり男女合併校あり、寄宿者あるものありなきものあり、其他狀態頗る區々なり、高等教育の爲めには大學あり、其數全國にて八ユニバルシチーに

六十九コレージュ、コレージュはユニバルシチーに属するのと別に獨立せるものとあり、講座總數千五百九十六あり、其學校數生徒數は

	ユニバルシチー	コレージュ	生徒
英威	三	五八
蘇	四	二
愛	一	三
計			二四、五三四

大學の中には全く授業なく、單に試験のみをなすものあり、倫敦大學是れなり、専門教育は商工業農業航海醫藥學理化學美術音樂等にして其の程度は中等のものあり高等のものあり

男子の大學及び専門學校には女子の入學を許すもの稀れなり、故に女子の爲には別に女子大學女子専門學校あり

數字ならばは徒らに諸君の退屈をますのみなれば、もう此位にして廢すべし、其他各學校必ず宗教の事あり、それも諸宗派區々様々なり、之を要するに英國の教育は頗る複雑難駁といふの外なし、而して斯る複雑難駁なる教育の組織は、果して最良

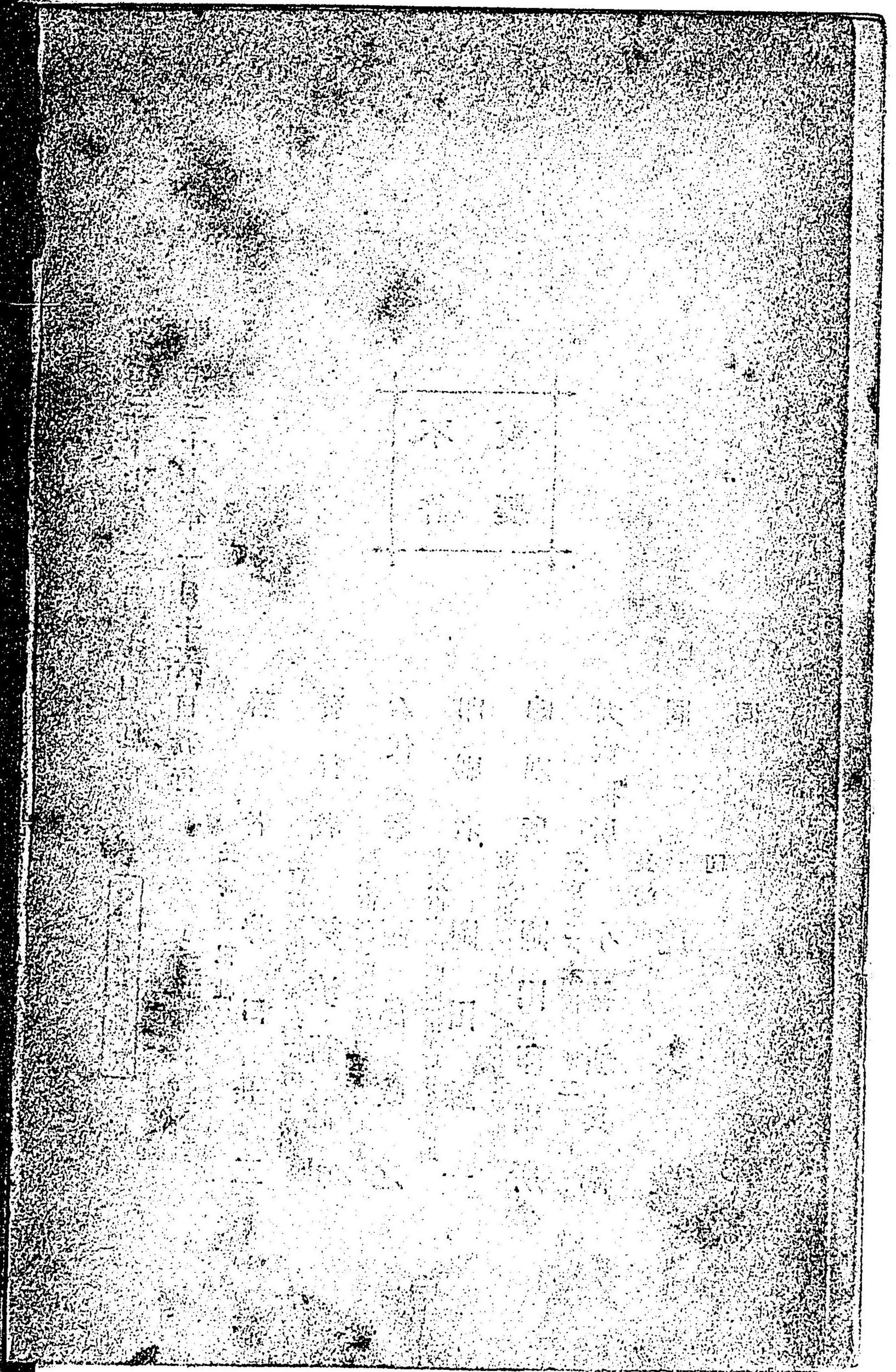
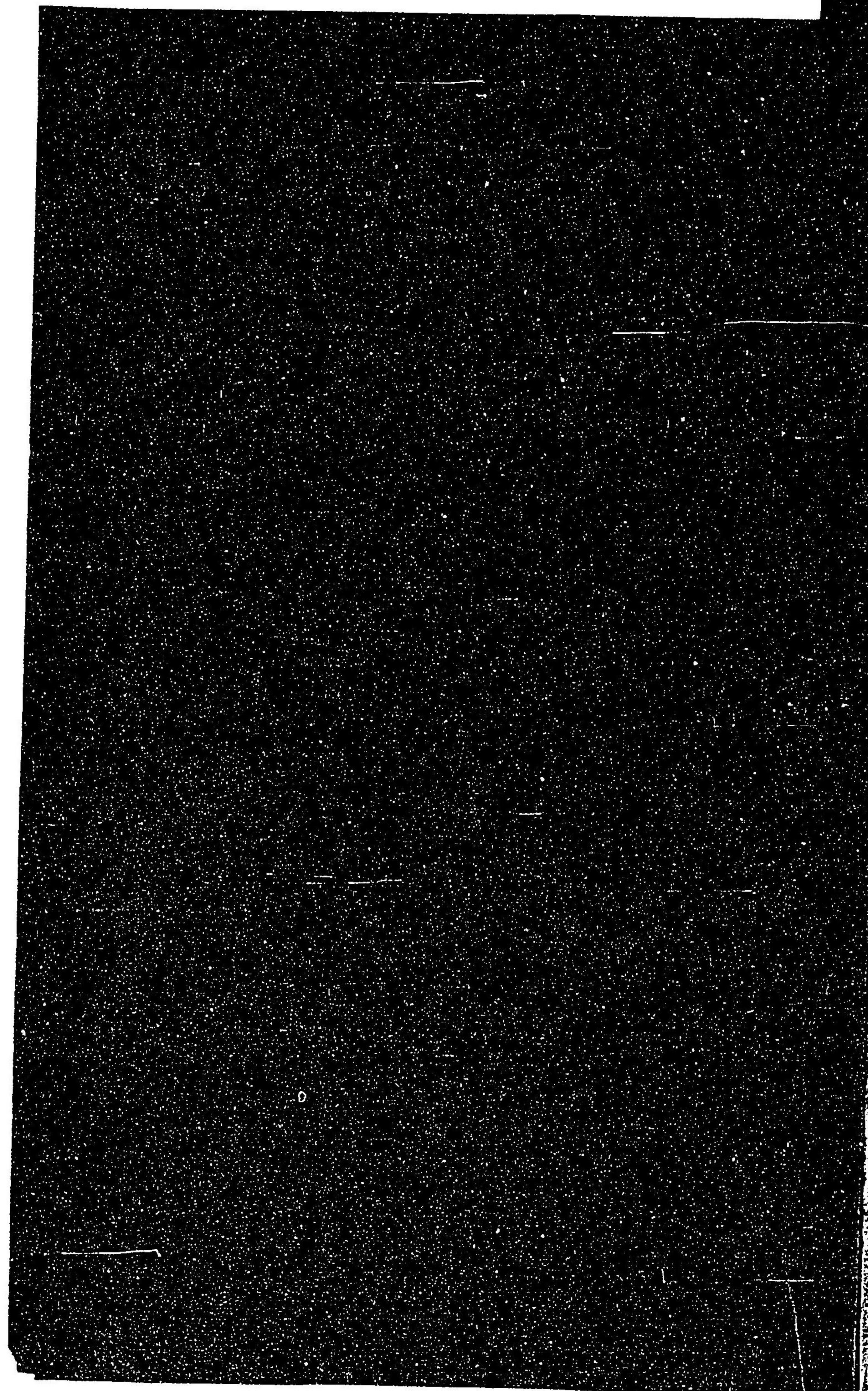
のものなりや否や、予は今其れに論及するのいとまなし、予は只這個難駁の中に於て一の畫一一貫せるものを求め出し、其れを諸君に報告すれば足れり

斯くも複雑難駁なり、其間畫一あるものあるを得るか、曰くあり、大にあり、英國の教育、下は小學より上は大學に至り、徹頭徹尾一貫周流せるものは他に非ず、書生を造らず人間を造るの大方針即ち是れなり

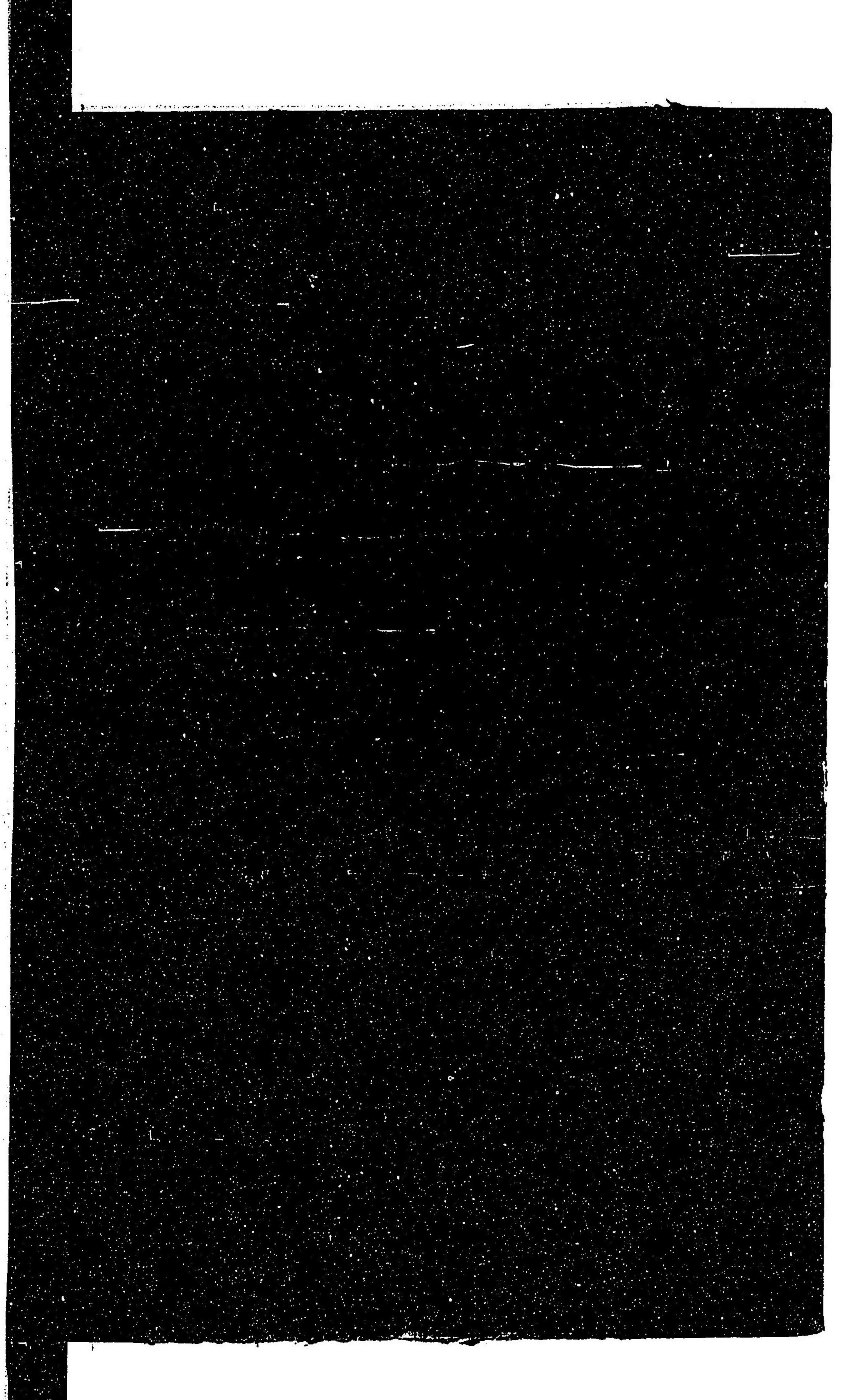
書生を造らず人間を造る(無論此人間とは善い人間を意味す)是れ予即ち英國の教育が他に卓絶せる所以のものにて、識者が認めて以て同國富強文明の大原因となす所のものなり

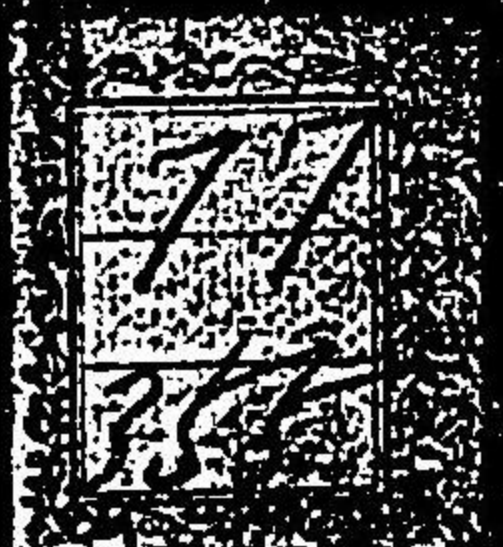
所謂書生を造らず人間を造るとは別言すれば、學校と家庭と社會と此の三者が同様なりといふこと、書生と人間とが別でない一つであると申すことなり、而して之を我邦に施すの得失は如何

日本にても多年來精神教育人物教育など申すことが八釜しく議論されたことで、方今の時論は予知らぬが、兎に角大體に於て議論上には別段反對はなからうと思ふ、併し實際は大に相違して居る、人間と書生と社會と學校と家庭とは丸で相違して居つて、尙甚しきは右精神教育人物教育の解釋を誤まり、精神教育とは切齒扼腕悲歌慷慨時々喧嘩でも吹かけることかと思ひ、人物教育とは粗放豪慢所謂其室を



77
358





022042-000-4

77-355

世界一周実記

井口 丑二/著

M37

ADA-0375

